7211
九條の小政
歌美堂

特22
856

序詞

本編九條の小説は、先年發行なりたる生首お藤の後篇として、諸君の御勸もありたれば、欽英堂主人も乘氣になり、發行する事となりたり、此お藤、小政等は、決して虚構の人物でなく、小政は監獄病院にて死亡なしたれども、伊達お山のお藤は現に下寺町の尼寺に行ひすましも、墨の衣の袖で、恐ろしい生首の刺繍を隠して、居るを涙花の小説家岩本異芳生が本人直接の懺悔談に、潤色を加へて一部の小説に編したるものにて世の流行に追れ且つ幼童婦女の耳に入り易き樣にと、小南陵の口演とし、宮本が速記して世に公にするに至れるなり、之れ

勸善懲惡の一端になさんとする、諸氏の意志なりと、推察を下して夫を序詞に代ふるものとす

明治三十四年櫻花爛漫たる時

竹の家主人誌

九條の小政

第壹席

旭堂小南陵　講演
宮本松三郎　速記

エ、這回何か面白い情話をとの御所望に依りまして、演じまするものは九條の小政と題しまして、至極新らしいところの實事談で御座います、本話は漸く明治三十一年に、終局が告きました程ですから、當時關係の人々は、何れも存命いたして居るやうな次第にて、根葉のない駄法螺と覺召さずに、お聽き取りを願ひます、却説桑田は變じて海と成り、雀は海中に入つて蛤と化す、生娘が醫者となれば、藝者は夫人と化る、昨日に變る今日の飛鳥川、夫れにはあらで此處は大阪市と接續しております三軒家村も彼の紡績會社が出來ました

てから、大變繁昌なる所柄となりました、今や狂氣じみたる殺交りの暴雨は、瞳を吐いたかと言ふ樣に、キヨロリカンと晴れ渡りますと、紡績會社の煙筒の端に、淑し氣に寒月が、加之も物凄い光りを放して、泥途を照して居ります、此處三軒家村から赤手拭稻荷へ通ひます、泥田に添ふたる田舍の小道でございます、その小道を少し入り込んだる所に、五六本の立木があります、敗れ汚たる地藏堂の前に、一人りの娘、衣服は襤褸を纏つて居りますが、木間洩る月影に透し見れば、花の樣なる顏容に玉なす涙を、兩眼からパラ〳〵と流しております、傍の拾石に腰打ち掛けたる、惡者作りの男が男「コーお前は知るめへが、乃公アお前が日々〳〵辨當を提げて、會社へ通ふ姿に、ぞつこん戀風を引いておつたのだ、サーお娘如何するのだ、素直にウーンと承知をするや夫れで好し、左もなくば男の意地で、殺害しておいても本望遂げるんだ、モー恁なつちや百年目、應が掴んだ小雀同樣、羽叩き一つさしやしないよ、だが滅法の上玉だ、這奴爾う後生氣になつて居られ子ー、兎も角も斯ふして……」と、

突然に娘へ抱き付けば、娘「アーレ……」ト一聲、逃げんと致します、男は爾ふはさせぬと猿臂を伸して、帶の結目を捉りますと、拍子に結目解けて身はクル〳〵、逃げんとするを遣らじと爭ふ、娘も此處一生懸命の場合であります、猶も惡者は駈け寄り引捕へ、男「エー如何さらす、幾何荒馬の如にピンシヤンさらしても、人家離れた此森影今時分にや巡査なんぞも廻つて來る氣遣へはなし、泣いても叫いてもモー駄目だ、夫れより優しく素直にウンと言つて見子へ、今に好い人だと言してやらア、サア如何するんだ、三々九度のお盃も、木葉滴る雨水と、しつぱり濡るゝお座敷も、敗れて居れど地藏堂で、密ひは洩らさぬ彌陀の本願、日頃の本望遂げるも、仲人は此處に立つてござる地藏さん、俱是の船の渡しをば、何と言ふても無理往生に渡るから、サア强情言はずにキリ〳〵返答しなせへ」、戰き震ふ娘の手を無理に引き寄せますと、娘「何卒後生でございます、是ればつかりはお恕しなされて下さりませ、何卒々々」ト掌を合して泣き伏すをセ、ラ笑ひ、男「オイ〳〵乃公に後生氣があつて出るものか、モ

「四の五の問答は無益だ、當世人間は氣が短けへ、何と言ふても斯ふするんだ」、逃けんとする娘を無理往生に、既に人倫に外れたる毒手にかゝりて、アワヤ玉の如き少女が、汚されんとする悲慘の一刹那、アラ不思議やな、地藏堂の後より、パッと燃へたつた陰火にスーッと姿を顯したるは、此世の者とは思へません、髪振り亂した る面色眞蒼に、男か女か分らぬが、白い衣物にてスーッと立つて、物凄い眼でジーッと見詰めてゐる、彼の鬼火に映じて何とも角とも言ひやうがない凄さを、チラと見たる惡漢は、有繁にも膽を消してキヤッと言ひさま兢く足を踏みめて、雲を霞と難波村の方角さして逃げ行きました、不意に振り放されたる彼の娘は、パッと燃へ立つ鬼火の光りに、異形の者を見るより、是れとてキヤッと言ひさま背へ仰け反り、ウーンと其儘打倒れました、却説明治の今日に於て斯る怪しからん講談を致しますと、諸君には馬鹿々々しいと愛召しませうが、實に此時には現に此娘なり、彼の惡漢は異形の者を認めましたので夫れは後日に彼の惡漢が捕縛になり、警察署にて白狀いたしました事實でございます、本編九條の小政は、生首お藤と題して、前年御愛讀を願ひましたる後編でございますから、前編生首お藤と併せて御愛讀を下さいましたら、前後相通じて事情が判然いたします只今は彼の娘の名前なり、及び異形の者の本性は暫時お預りと致しまして、此處は大阪を十里西方に當ります、港戸港でムいます、實に出入の滊船の黑煙は當港の繁昌を表したるものでありまして、又その神戸港の別世界と申し上げまするとは遊廓福原で御座ります、戀の波止場の船着にて、色海を渡る俱楽の船に、乘りに來る者輻輳致して、吳越の客に後朝の別れを惜む空涙に、引れて通ふ漂客の群に紛れて、當廓一二の大店なる、沛島樓の庭へ入り來りたる一人の紳士、張店の方には眼もくれず、ズット玄關にかゝります、豫て馴染と見へまして、若者「オヤ旦那……お久し振りでげーすナ、大變のお見限りで……、ヘヽヽヽヽ花魁が毎日の口舌には閉口いたしておつたので、ヘヽヽヽ、サア何か……お早く若い者の槌で庭掃く追從輕薄を、彼の紳士は聽き流しまして、若者「御案

内……」ト、庭の若者が掛けましたる、威勢よき聲にッカ〳〵と梯子を登りました、是れが懲の山でして、實に愉快なる場所であります、却説彼の紳士と申しますは、年齢は三十五六と申す事ですが顔一面に海疱瘡があります、チョッと色の小白イ、ノンベリとして居りますから、三十位しかより見へません、或ひは若く見へますは人間が紫痴を示して居るのかも知れません、眼付が變で俗に言ふ藪睨みと言ふのであります、是れは先祖が藪に損耗したことがありますから、今に遺恨が殘つてあります証跡で、十一屋と言ふ事が知れます、二階廻りの遣手やんを相手に、有るか無しかと言ふ樣な口髭草体の八家形の先を、左も勿体振つた風に捻りながら、遣手やんが差したる猪口を受け、波々とつがれたる温燗をば、口の方から持つて往て、少しすゝりて下に置き、又たもお髭が氣になりますか、白い絹洋巾で以て一遍拭ふて、紳士「デ……、今も言つた通り、實家内の格氣には閉口いたしておるが、何うも今以て放逐致して了ふと言ふことの、ならぬ實困難なる理由があるので、其處で當分この神戸に妾宅を設けておいて、彼女が望む所の商法でもさせて置きたいと思ふておるとや、僕も會社の用向なり、戯會に就て十の七八は當地に居るから、萬事好都合であると考へるのだ、遣手「ソラ花魁は眞實に幸福と言ふもんです、お國の方にも何彼と御不自由はありましよまいが、馴れた神戸の方が又た好いものでございます……、併し和國さんは一体何をして居るンでしよ、うの辯人を捕へて且那の惚氣の御相伴をさしてるんですヨ、此間から大變に待ち焦れて居たのですに子ー旦那……、人を自烈して居るンですヨ、ホントニ仕方のない女だ子ー」ト、少し紳士の顔面が、敵妓の姿が見へませんから變になってあるを察しまして、夫れとなしに場を繕ふておりますと折柄、廊下にバタ〳〵と、重草履の重ひ足音が聞へますと、遣手「アレは乾度和國さんですヨ、違ひありませんヨアノ足音は……、紳士「ツーム」、紳士は密と襟を正しております、彼の重ひ足音はバタと部屋の外に止り障子がスット開くと、女「オヤ旦那、能く被入やつて下さいました子ー、大變に待つて〳〵、何程郵便出しても片だより計り、こんなに焦

れて居る妾の氣もお察しなしに、能くも不實が出來ましたネー、エ、憎いじやありませんか、紳士「ア、痛イ〳〵、色氣なしに角ふ抓つちやヤ、堪らない、ア、痛い、甚い力量だネー、和國「甚い力量でせう、其筈でサ、妾は根が鈍百姓ですから、少度も色氣なしに抓りますヨ、紳士「オイ僕も丹波の百姓だ、お前も百姓なら、似た者夫婦で好いじやないか、和國「オヤ之れは失禮、併し丹波と言や、大江山と言ふ所で、昔時惡鬼が棲んで居つたと、お母に聞いたが、そんな恐ろしい國でコンナに柔しいお方が生れたとは、ホントに不思議でならないものだネー、お熊さん」、お熊と言ふたら遣手やんの名でございます、お熊「オホ、、、、、何を此お妓は、今旦那に怨みを言つてたがと思や、他愛のない事を言ふて居ることや、今も旦那の仰しやつたに、いよ〳〵お前さんを落籍して、今と言ふては罪ない奥さんを放逐と言ふ譯にもいかぬが、當分は此神戸で一軒構へさせて置いて、何かお前さんの望みの商法をさせておき、未來は正妻に直す心と、妾しにお咄なして被入しやつた所だに、ソンナに駄々をこねたら愛想をつか

されるヨ、サア旦那、この妓に貴夫のお盃を上げて下さいヨ」、彼の紳士は無言にて、ニタ〳〵氣味惡い笑ひを洩しながら、冷へきつた盃をグッと飲み干して、和國にさしますと、和國は半身を紳士の膝にもたせかけまして、彼の盃を是れも無言にて請けながら、ジッと愛らしい眼の、上眼で惚れ〴〵紳士の顏を見ながら、グッと彼の盃を飲み干して、和國「ホントにいよ〳〵落籍しておくんなさるのか、お熊「エ、此妓の疑ぐり深いにも程がある、何の旦那に限つて虚言を仰しやるものか子ト、つらい勤めも今夜限り、實に羨ましいことだヨ紳士「ソーだ、懷中に金の要意もいたして來たのだ、和國「ア、嬉しいネ！」此時廊下から、△「お熊さんチョト來ておくれヨ、阿茶々さんが歸ると言ふて困るから、お熊「エ、甚助チヤン〳〵か、」頻さいこと子！、和國「お熊さんチョッと耳を……、ナア……、賴んだヨ、お熊「チット合點だヨ」ト、お熊は、お熊旦那でしつぽり」ト、捨言葉を殘して廊下へ出て往きました、偖て此和國と申す花魁が、即ち前編に伺ひましたる、生首お藤の化たるものでありまして、同故に又たもや福原に於て、娼

奴隷さを至して居りますかは、回數を重ねますに隱つてお分りたひなります

第二席

和國はお熊が部家を出て往つたる後姿を見送り、彼の紳士の膝に猶も寄りかゝりながら、冷へ切つたる盃をグッと飲み干し差しながら左も惚れ〳〵としたる、愛らしい目で見詰めておりますと、紳士「和國何を僕の顔を見ておるのだ、和國「オホ、夫れでも余り嬉しいから、紳士夫れ程嬉しいか、併し當分は窮窟でも、此神戸に別宅して居るが可い、今に丹波一ッ國で森野家と言や、自慢じやないが人に知られた豪農だ、その森野の信太郎の正妻になるンだ、マア〳〵夫れを楽んで居るが好い、和國「ホントに斯んな嬉しい事はあゝはしないヨ、併し今夜金を持つて來ておくれだろ子！、信太「如才なしだ、ソラ百圓紙幣で三十枚、都合で三千圓、お前に預けておくから、仕舞つて置いてくれ和國「ハア……、人が見たら蛙になれと言ふて仕舞つて置くヨ、信太「馬鹿

な、ツンナ小さい魂性で森野家の奥樣になれるものか、和國「夫れじやこれで涕汁をかむヨ、信太「オヽ、如何なと隨意にするが好い、お前に遣つた金だから、和國「貰つたお金なら妾の勝手にするから、介つちや否ですヨ、信太「ブーンするが好い、併し夫れ丈け薩摩芋を買へば、食滯するから、注意をするが好いせ、和國「エ、此憎まれ口を……、信太「ア、是れ痛い〳〵、ヘイ〳〵モウ申し上げませぬから、何卒御勘弁を願ひます、和國「チト是れから妾が傍に居て、窮命してあげるからソー思つていらつしやいヨ、信太「如何も恐しい細君だ、夫れこそ森野は烏の昆布巻だと評を下すであろ、和國「エ、烏の昆布巻とは何の事、信太「サアかゝまかれと吐すと言ふ事だ、和國「エ、癪た憎らしい此口は……、信太「オッと抓くるは閉口〳〵、其折二階廻りの聲で、△「和國さん烏渡……和國「エイ何を……、旦那暫く辛抱して、且戴ナ、今夜限りの苦界の勤め、堪忍してヨ、今直に來るから廊下茶をせずと、温和しくしていらつしやいヨ」と、彼の參千圓の金子を懐中して、出て往ッて了ひました、此方には居留地二十八番館の主人で、本國は支那人でさい

ます、名は阿茶々と言ふて、在留清國商人の中にて、風指の金滿家の主人でムいます、今敵破の和國の妻が見へません所から、國は殘れど人情は同じでありますす、嫉妬心をおこしまして、遊客に在打のモウ去るくを極め込んで居ります、去ぬるくと言ふても、借て去ねと突き放されちや、去なれたものじやありません、阿茶「私しモウ去にます、和國さん妾チットも見せません、人を馬鹿にします、私し金澤山あります、外に未だくく美イ女買ひます、其處放すよろしい、私し歸へります、其所放すよろしい、お熊「貴郎何を言つて居なさるか、今に貴郎の奥さんになると言ふて、日頃から樂しんでいらつしやる花魁、貴所そんな事言つてはお可愛そうだから、何卒暫らく待つて上げて下さいな、何も花魁は氣も急ていらつしやるが、其處が苦界の勤め、儘にならぬ所に又た面白味のあるもの、子ー貴郎、其處を察して暫らく我慢をしておくんなさい、今和國さんを呼びにやりましたから、直きに來ますよ、耳、打をせずに貴郎を去したとあつては、後で如何なに妾に苦情を持ち込むか知れませんから、後生

です、暫らく待つて上げて下さいナ、エー阿茶々さん、阿茶「イヤです私しを余り踏み付けます、私馬鹿見ます、モウ歸ります〳〵、お熊「コンナにお止め申して居るに、强情にもお歸りになるなんて……、よろしいモウ仕方がありません、サアお歸りなさい、サア早ふお歸りなさヨ、强情にも程があります ヨ」、突き放されて阿茶々は、歸ると言ふても歸る氣は更に無いのでムいます、歸ると言ふ裏は止めて欲しいのでありますから、今お熊に歸れと突き放されて、チト案外に、阿茶「宜しい、私モウ歸ります、二度と此二階へ來ません、早く靴を出して下さい、お熊「知りませんヨ、此位に妾が頼んで居るに、妾は貴郎の靴は存じません、阿茶「靴出してくれねば、私徒足で去ねません お熊「貴郎徒足で去ぬる宜しい、妾知りません、子ー阿茶々さん、貴郎もそんなに强情張らずに、今に花魁が來ますから、暫らく待つて上げておくんなさい、エー阿茶々さん角ふしておくんなさい」、阿茶々もお熊に去ぬならお歸りと言はれて、我が胞中を是透れたる思ひに何だか尻こそばい思ひで、ジックリと座蒲團の上に戻りました、其

時廊下を重草履の音高く這入つて來たのは、お藤の和國であります
お熊は夫れと見るより、お熊「和國さん、阿茶々さんには困り切つたヨ
歸る〳〵と言つて子ー、和國「ソー貴郎何で歸るのです、アタ阿呆らし
い、人を是れ程までに氣を揉せて置いて、お熊さん、ホントに情な
しな阿茶々さんだヨ、お熊「夫れもサ、憎らしいとやありませんか、私
金澤山あります、金出したら花魁より、未だ〳〵美イ女買へます、
ナンテ、チト懲して〳〵おわげなさいヨ、アンナ憎手口を吐くのですヨ
和國「オヤ角ふ、サア阿茶々さん、お前さんはソンナに薄情なお心です
か、宜しい妾今此處で死んで了ひます、貴郎に見放されて何おめ〳〵
と活きていられるものですか、阿茶「私謝罪まります、貴女死ぬる止め
て下さい、外に女決して持ちません、謝罪ります〳〵、小熊「花魁アン
ナに謝罪つていらつしやるから、今夜は堪忍してあげて下さいヨ、
子ー阿茶々さん、阿茶「堪忍願ひます、お熊さん「謝罪つてくれる宜しい
お熊「宜しいヨ、妾謝罪つてわげます、オホ、、、、、強情張つてサ
和國「併しお熊さん、アノ唐變木を獨り部家に置いてあるから、又た騒

ぐと不可ないから、お前さん頼んだヨ、お熊「ハア呑み込んで居る」ト、
お熊は又も出て參りました、和國「阿茶々さんお前金持つて來ましたか
阿茶「持つて來ました、三千圓の大金此處に持つて居ます、和國「ソー嬉し
い子ー、出して見せて下さいヨ、阿茶「貴女私に金出させて、好いた人
とアバヨします、不可ません、亭主呼ぶ宜しい、金私しが渡して落
籍して連れて歸ります、和國「オヤ貴郎はソンナに水臭い魂性ですか、
宜しいモウ三千圓も入りませんヨ、現在女房の妾に金を、ソレも目
腐れの僅少三千圓を、懸念で手渡しが出來んとありや、モウ好ふで
ございます、金も何にもいりません、ア、殘念な、お前さんにまで、
コンナ賤しい勤めをして居るから、下卑しい心でも持つて居るかと
思はれたが妾しやロ惜しい、エ、日本の女はソンナ氣はありません
ヨ、イッソ眼前で死んで見せる、阿茶「ア、待つた、私が惡い、謝罪り
ます〳〵、金今渡します〳〵、和國「イーエモウ能ふございます、金いり
ません、妾死んで見せます貴郎への面當です、阿茶「鬼忍して下さい、
此後は決して疑ひませんから、和國「ソンナラ貴郎モウ疑ひませんか、

阿茶「以後疑ひません許して下され、和國「堪忍も何もありませんが、妾も言ひ過したこと堪忍へ」ト、和國が露の滴りそうな眼付で、ジーッと睨みながら、阿茶々の膝にもたれかゝりますと、阿茶々は鮹入道に海苔をかけたる如く、アニヤ〳〵になつて了ひました、和國は夫れより阿茶々をいろ〳〵と手管で嬉しがらせまして、途に彼の三千圓を預りまして、和國「子ー阿茶々さん、妾が此樓へ身を沈めたのも、ソリヤ僅小な金の爲め、夫れに今落籍すると言や、千の二千のと大枚の金高、是れから共白髪までも添ひ遂げたいと思ふお前さんに、コンナに大金を出させるが如何も氣の毒でならないから子、チョイと耳を御貸しヨ……、子ー斯ふすりや金は一文もいらずに、お前と自由に添へると言ふもの、万一違つて見付つたら、其時やお前と手に手を取つて、尾花薄におどろかされても、何が日本國ばかり日が照ると言じやなし、お前の本國へ落人と極め込み、四百餘州に誰れ遠慮なく、暮すが餘程好いじやないか、阿茶「貴女大變の知恵者あります私國の孔明徒足で逃げます、貴女私の細君になります、金一文もい

りません、和國「デハ今言つた通り今の所は素直に歸つて子ー、阿茶「宜しい〳〵、十二時の時計を合圖に、和國「淡川の土堤傳いに、乾度來ておくんなさいヨ」ト、夫れより何かコソ〳〵と示し合せまして、彼の淸國人の阿茶々は歸りました、庭まで送り出て歸つて來た和國は、我が部屋に歸るなり、其處に有り合したる爛德利の口から、グビリ〳〵と酒を呑んで居ります、背後に何時の間に這入つて參りましたか、年齡は四十相恰の遊人らしい男が、男「オイ少度大膽じやねへか、和國「オヤ小政さんじやないか、吃驚らしたヨ、併し愛想が盡きたか子ー

小政「アハ、、、、、愛想どころか鬼の女房に鬼神とやら、一層惚氣がさす子へ、和國「オヤ何處でか大分にお世辭の修業が積んだ子ー、憎らしい誰れのお仕込みだ、小政「誰れでもないじや子へか、此座に鎭座ましますお藤大明神さ、が、手前一人で呑なくつても、チト大きい盃で乃公に廻してくれても可じやないか、爵も當るめへ、和國「オヤお催促か、恐れ入つた子ー、小政「併しチット金銀は手に入つたか、和國「夫れでくさ〳〵して茶碗酒だヨ、小政「ソイつや詰らねへじや無いか、和國「併

し少し腕のおありなさるお藤さんだヨ、一方で目的が外れても、又た一方ではかけてあるヨ、又た耳を御貸しヨ、小政「又た耳を貸せと言つても、今が始めじやないか、和國「ナニサそりや此方の事だヨ、之れで三度だ文句を言はずに子ー、自烈体ナ……、分つたかチ、小政「フーン諾、夫れじやチヤン〳〵の跡を隨けて……、和國「その時ア、妾も辨天小僧を極め込んで、チヤン〳〵の荒膽を一つ潰してやるワサ、小政「フーン面白なつた、併し手前の魂性は思つたよりは、余程太い子ー

和國「フーン太いと言ふこと今漸々知つたのか、チト遲蒔じやないか、小政「オツトコリヤ乃公が一番謝罪つたヨ……」、

第三席

隨分ヒヨンな縁だ子ー、歓へて見りや一年前、横濱の並木町の端にて、小政「悪い車夫が普通の女と見て悔り、和國「訝に搦みかゝつた口説の文句、吉原仕込みの手管にかゝり、小政「コロりとさせた大の男二人り、両雄爭へば何れか全からざる道理、和國「終

局二人が掴み合ひ、小政「夫れを車臺に腰打ち掛け、笑つて見て居た胴胸の野太サ、和國「その時背後から聲かけられ、一時はギヨッとしたけれど、小政「此方も劣らぬ悪胴胸に、言葉交したが縁となり、和國「東京を跡に上方筋へ、泊り〳〵の旅籠屋で、小政「お半長右衛門じやないけれど、夜裏の風が旅枕に、和國「ゾッと引き込む戀の風、小政「五十男に若い手前、和國「縁は異なもの味なもの、小政「大阪九條で仇名をば、小政と呼れて、如何樣師、和國「本名は前原金次郎と、小政「眞面目臭つた家柔も出て來す、詰らぬ事に手を出して、和國「こさへた損の詰め合せに、昔時吉原の金瓶樓で、お藤にちなんだ由縁が成りの果、小政「乃公ゆへに此樓へ二度の勤め、和國「股に彫つた生首の入墨を、隠して其名も和國とて似合つた島田髷がお前に恥しいよ、小政「乃公の樣な老惚にかゝつて、手前の若いに可愛そうでならないヨ、和國「オヤ悪黨に似合ぬ弱い音を御吐きだ子ー、今に此生首で支那人を、小政「一杯喰してやることか、和國「少しや甘い汁も吸へるであろふ、その時や二人が榮耀榮花のしあきサ、誰れに遠慮もいらない夫婦の差向ひでやることだ、小政「夫婦ど

ところか手前と乃公との年を言や、九で親子程違つてあらア、和國「今夜は大變年を氣におしだ子ー、年に妾や惚れはしないヨ、小政「夫れじや何でかゝつて居るんだ、和國「お前の胴胸にサ、小政「乃公の胴胸より手前の方が餘程上手だ、和國「夫れで愛想がつきたかエー、小政「愛想どころか猶も惚れ氣がさすわい、和國「甘く言つてる子ー、小政「甘くで思ひ出した今夜の手筈を間違さないやうに、やつゝけねばならぬ、和國「爾ふサモウ時計も十一時半、小政「ボッ〳〵出掛けても好ろふ、和國「マア元氣に點い酒を引掛けてお出でヨ、小政「夫れも爾ふだナ」下、和國のお藤はポン〳〵と手を叩きまして、燃燭を取り寄せて茶碗でグビリ〳〵と引かけて、其勢氣に乘じて九條の小政は出て參りました、後姿を見送つてお藤は獨り言、小政「彼奴に二人の野呂間から卷き揚げた六千圓は、口に出さずにおいたも、少しや此方に目的のあること、是れから支那人を絞つたとこで千か二千が精々だが、夫れを手渡ししてやりア小政の野郎も嬉しがつていやがる、モウ此方も女郎はあきたから、今夜の馬鹿騒ぎを幸ひに、おさらばを一つ極めてやろか、丹波の土

堀りが後で胴體を抜れることだろ」下、其處でお藤は身仕度に及びまして、豫て豊間より準備がしてありましたか、裏の切戸より密と忍び出ましたは、浜川の土堤でございます、其時足音盜んで忍び寄つたる一人の支那人、是わ別人にあらず彼の二十八番館主の阿茶々でございます、雲間洩る月影に透し見て、阿茶「和國さんではありませんか、和國「阿茶々さんですか、ヨウ來て下さいました、サア人目にかゝらぬ其内にチットも早く、何處へ連れて往つておくんなさい、阿茶「オット合點、コー來る宜しい」下、阿茶々は和國の手を曳いて走らんとする往手に、何時の間に來ておつたか一人の車夫が、車夫「南京さん合乘でお送り申しませうか」、言れて阿茶々はギョッとして、阿茶「私人力車要りません、此處往來邪魔になります、早く退くよろしい、車夫「アハ、、、、ソンナ事言つて南京の國で通じるか知らねへが、此日本では通じ子へのだ、見れば女の風体と言ひ、何奴が睨んでもテッキリ足拔、乃公の人力車に乘つて來れりや夫れで好し、否と吐しやがり上げて、交番所へ突き出すから、爾ふ思へ、阿茶「イエ〳〵此女女郎

でありません、私のお神さんあります、お神さんの手を曳いて往來します、誰が故障があります、車夫「喧嘩と理窟を言つていやがる、オイ夫れ程明るい身体なら、一遍交番所までうせやがれ、阿茶「お前さん巡査でありません、私調べられる事はありません、車夫「エ、つべこべ吐かす、手前何だナ、此女を連れ出して上海あたりへ、密航する精神だナ、ソー日本の女を自由にされて堪るものか、サア來がれ、阿茶「イヤソンナ無茶あります」、両人の爭鬪を聞いておつた和國のお藤が、お藤「コレ旦那……チョイと」ト、阿茶々に耳打ちします、阿茶「フーン宜しい、コレ車夫サン、お上さんが言ひます、お前の人力車に乘ります、車夫「ジヤ乘つて下さいますか、實宵から不景氣ておりやしたものですから、ツイ無体を言ひやして堪忍しておくんなさい、阿茶「宜しい、二十八番館まで幾許で往りますか、車夫「ヘイ、お高いことは申しやせん、半銀貨だけ張込んでやつてください、阿茶「五十錢高くあります、二十錢ならよろしい、車夫「ソンナ無茶を仰しやるものじやありません、何卒せめて三十錢にしてや、夜分の事でございますから、

つておくんなさい、コンナに恐圖付いておる内に、追手にかゝつちや詮のないことでげすから、阿茶「私のお上さんあります、追手あります、車夫「ヘイ〳〵そりや乃公の口が上つたんですが、お上さんも大變お足も痛んである樣子、其處を何卒……、阿茶「よろしい二十五錢上げます、お前さん往くよろしい、車夫「エー仕方が無へ遣ります、サアお乘んなさい」ト、片傍より人力車を曳き來りまして、男女を乘せ膝隠しの毛布を覆せながら、車夫「旦那雨がポロついて來やした、布帆を降しやしよ、エ、濡れが利いて好がす」ト、捨臺白で曳き出します、後にヌツクと顯れ出ました一人の男、裙端打るなり彼の人力車の跡を追つ掛けて參りました、愛は居留地二十八番館の奥まりたる一室であります、支那風と日本流を折衷したる部家飾りで御座います、此一室の男女こそ今夜福原の浦島樓を足拔しましたる、お藤の和國と支那人の阿茶々であります、阿茶「モウ此處まで來る安心するよろしい、お藤「ハア是れで妾も大の安心でございます、阿茶「今日から娼妓の和國さんではありません、私のお上さんお藤さんあります、お藤「左樣貴

耶のお神さん、妾嬉しあります、阿茶「お前さん前刻の三千圓持つて居ますか、お蘭「ハイ此處に持つて居ります、阿茶「夫れ出す宜しい、お蘭「何故です、これ貴郎と妾夫婦であります、貴郎浮氣せぬ爲め預つておきます、其時召使の日本の女が來まして、女「旦那前刻の車夫が參りまして、何かお忘れものがありましたと申し、貴郎にお目にかゝつていないとお手渡が出來ないものだと申して居ります、阿茶「私何も忘れ物ありません、時計もあります」、弗入も持つて居ります、女「夫れでも是非お目にかゝつてお手渡せねばならぬと申しております、阿茶「ハテナ、何事でありませう、お蘭「旦那何事でも迚へば直ぐ解る事でせうから、コレ女中是車夫を爰へ通しておくんなさい、女「ヘイ畏りました」ト、程なく女中に案内されて這入て來たは、彼の車夫ばかりじやありません、一人の男、即ち淡川の土堤から隨て來ましたる所の、是れ別人ではありません、九條の小政で御座います、小政「旦那、オイ支那人、手前は圖太い野郎だナ、コー此女は乃公の女房だ、夫れを足拔させアがつて、何とさらす心算だ、サア何するンだ」、阿茶々は

ピク〳〵ものゝで、阿茶「コレ之れは私のお上さんあります、お前さん何を言ひます、小政「とぼける子ー支那人、此女は前にも言ふ通り、乃公の女房で浦島樓へ勤に出してあつたのだ、夫れに今夜逢ひに往きや姿が見へ子へから、段々内所で探つて見りや、手前が連れて逃たと言ふ見當を付け、此處へ向つて來る途中に、出逢つたは此男、淡川の土堤から手前等を乘せて來たのだ、サア如何するんだ此終局は、但しは警察へ訴へ出よか、オイ支那人何とか返事をし子へか、阿茶「ウーム小政「今警察へ出れては、二十八番館の山子の看板に障るだろ、オイ松……、松藏「オイ……、小政「手配りは好いかナ、松藏「モウ捕縛つて了つた」、何時の間にやら館内の男女を縛り上げて、聲を立てさせないやうに猿轡をはめてあります、小政「オイ阿茶々、モウ駄佛だ、聲を立てると之れがお見舞申すぞ」ト、小政が懷中より取り出したる拳銃を向けられて、アッと言つて逃げんとするを、背後に見て居つた松藏は、松藏「何處へ往くのだ」ト、雜髮を持つて引き戻す、引れてドッと尻餅付いたる所へ、飛びかゝつて縛り

で阿茶々を後手に縛り上げました、藤「聲を立てると生命が無いぞ、

阿茶「アブ〳〵、ヤッブ〳〵、小政「アハ、、、、、、唐人の寢言と言や此事だ」ト、夫れより阿茶々が腰にしておつた金庫の鍵を取つて、在金一万圓程を奪ひ取り、表面お藤の和國は同類でないやうに装ひまして、小政「此阿魔うせやがれ」ト、彼の相乘車に金と共に積み乘せて、何處共なく逃げ去りました、是れ衆て小政等と手筈を定めてあつたので、一つ違へばお藤も入墨をはり出して阿茶々に賠しをかける心算でありましたが、其當までに至らずして首尾よく大金を奪ひ取つたのでございます、又た車夫と云ふは傳法の松と言ふて、九條の小政が乾兒でありまして、之れとても手筈を定めて、淀川堤に待ち伏せまして、和國のお藤が首尾よく廻原を抜け出し、二十八番館へ入り込むをば、陰ながら保證しておつたので御座います、却説此當にお藤の爲めに馬鹿を見ましたのは、丹波の察度森野信太郎と、此二十八番館主阿茶々の兩人でございます、いよ〳〵講談を進めまして惡漢毒婦の如何に社會に毒を流すかを、一服致して申し上げます、

第四席

此處三軒家の紡績會社の横手に、一棟の新築長家があります、其一軒に住居つて居ります、親子三人の者、是れぞ神邊一郎が寓所で御座います、前編生首お藤に於きまして、雪中に大倉清造の爲めに、お藤が情夫と誤認されまして、短銃にて狙撃せられ打倒れました所へ、折よく巡回の査公に助けられ、萬年町なるお菊親子の住家へ歸りました、幸ひ彈丸は摺れて飛びましたから、大した事でありませんゆへ、程なく養生も叶ひ元の身体に復しましたが、お菊親子は申すに及ばず、彼の吉原金瓶樓の花魁矢車と名乘りました、一郎の今は女房になつて居ります、お千代なども俱々に稼いで居りましたが已れ青雲の志を得ぬ失望やら、受けた手疵の疲勞などが併發いたしたものでありますか、ヒタと病床に就きました、無い手元で種々手厚い介抱いたしますが、貧の病に迫れまして思ふ樣に良醫にかけて治療を受けることが出來ません、所からお千代は一度泥水に染みた

る身体なれば、今一度吉原へ身を沈めてと思ひましたが、如何も定夫が出來て、は娼妓と言ふては、心中に恥ぢますから、勤めして居る内に少し習ひ覺へました遊藝も御座いますから、一郎は餓死しても夫れでは濟ぬと、辞退するを無理に承知させまして、自分は遂に大阪は南地西川席の抱藝者となり、愛名を千代吉と改めて稼持つ事となりました、其處で些か得ました所の金子で、一郎の療治を致し一時治りましたが、今日此頃發病いたしたと言ふお菊よりの音信に千代の千代吉は大いに心を惱しまして、又もや些かの金子を調達して、旅費に送りて親子三人を大阪に呼び寄せ、此三軒家にて住居を致して、自分は時々暇を盗んでは介抱に來ります、又たお菊は紡績會社へ通ひまして世帶を助けながら、是れ又た兄の介抱に怠りは御座いません、斯く三人が手厚い看護に一郎の病氣も、日に〳〵快方に向ふてまゐりました、お高祖頭巾に顔を包みました藝妓風の一人の女、是れ別人ではありません藝妓の千代吉でございます、今路次口で帳場の車夫を歸らして、スッと路次を這入つて、ガタピシ

とする格子を開けて、千代「阿母サン……」ト聲をかけました、お國を矢張り母と立て居るのでムいます、マッチの箱張に餘念のなかつたお國は、お國「オヤお千代さん、ヨウ來られました子ー、マア〳〵此方へお揚りヨ、千代「ハイ貴女は何時もお達者で結構でございますナ、お菊さんはヤハリ會社へ……、お國「お菊さんも精出して會社へ通ふて居ります、千代「シテ一郎さんは何處へ往れたのでございます、お國「今日は天氣も晴し、一遍散歩して來ると前刻お出掛でしたが、モウお歸りになりましよ、千代「散歩でもしようと言ふ御氣分になられたとはモウ大丈夫でございますナ、お國「此調子ならスックリと今度は病氣拔がせられましよ、千代「ホントにお母サンなりお菊さんに、永い難義を御させ申しました、お國「何を妾等は何程の事が御座いましよ、貴女こそ浮川竹と申す辛い勤め、妾はお察し申しますわいナ、千代「何のマア原來馴れた身体、夫程苦勞にはなりませんが、併し阿母さん之れを何卒……、お國「貴女先日車夫さんに持して下さつたお金も、未だ大分殘つてありますに、御苦勞の中からの此お仕送り、實に勿体なふ存じ

ます、千代「何が勿体なふ御座いませう、當り前の妾しの勤めで御座います、何卒一郎さんなりお菊さんに、雞でも買ふて上げて下さいませ」、お國「折角のお志御辞退なしに頂いて置きます」、かゝる談話の所へ歸つて來ましたは神邊一郎でございます、お千代は、千代「オ、お歸りなさいませ、貴夫は大分元氣付いて來ました子ー、一郎「お前は能く來られた子ー、ウムお蔭で大分丈夫になつて來た、千代「マアコンナ嬉しい事は御座いません」、夫れより三人は睦間じく食事など致して、お千代は、千代「夫れは爾ふと、此間の新聞に、赤手拭のお稲荷さんで、何だが惡漢に出遇つて一人の娘が難義をして居る所へ、怪しい物が出たとやらで、其惡漢は驚いて逃て了ひ、娘さんは氣絶しておつたを、通り合せたお人が助けて、幸町の交番所まで連れて往つたとか掲載ありましたが、其の住所が三軒家とあり、名もお菊さんとしてありましたから、萬一内のお菊さんではなかろうかと、大變氣を揉んで居りましたが、違つてございましたか、お國「サアそのお菊と言ふは内のお菊さんの事で御座いますが、此間一郎サンの御病氣が御本服

するやうにと、野道傳ひに赤手拭のお稲荷さんへ、お參詣をなすつた歸り道、一人の惡漢に出逢ひ、已に難義の其折から、見れば地藏堂の後から、パッと立つた鬼火と共に、顯れたは幽靈、御當時柄に幽靈お化のお噺も、何だか開けぬ事ですが、現にお菊さんが眼前見られたとのこと、夫れで如何な惡漢も驚いて逃げ出しましたが、お菊さんも餘りの恐しさに、アッと氣絶しられたを、通り掛りのお方に助けられ、幸町のお巡査さんの御厄介になつて、御歸宅になりましたが、今に其事を噺して恐しがつてゝございます、千代「アヽ左樣でございますか、併し何處もお怪我がなくッて……、お國「ハイお蔭で何處にもお怪我はありませんが、ホントに恐しい事でございます、千代「マアヽ御怪我がなくつて何より結構で御座いました、ナア申し幽靈なンて實際にあるものでせうか、ねへ貴夫……」、一郎は笑ひながら、一郎「ソンナ馬鹿氣た事が、當時あり得べき事實でない、何か恐しい懼いの神經に何物かの映じたのであろふ、夫れは爾ふと、其時助けられたるは南地の瓢兵衛とか言ふ男藝者と言ふ事、ソンナ藝者は

あるかへ、千代「瓢兵衛さんなら、何日も一座をすることがありますがアノ瓢兵衛さんに助られたのでございますか、一郎「爾ふだ、一度禮狀でも差出したいと思つても、唯だ南地と申すより存せぬ故、其儘になつてあるが、お前の知人とあれば何よりの幸ひだ、逢ふたら厚く禮を言つて置いてくれ、千代「承知しました……」ト、三人が物語の折しも、會社の氣笛がピユーと鳴りましたから、千代「阿母サンありや、五時の笛でございます子ー、遲くなつては不可ませんから、妾はモウ御暇を致します、お國「折角のお出に何の御愛想もなしに、千代「何の愛想がいりませう、參るにお土産も持つて參らずに子ー併し斯ふやつて書さんとお咄するが、何よりの樂みで御座います、が、お菊さんが毎時もおいでゝない丈が心殘りでなりません、何卒お歸宅になつたら宜しく……、お國「ハイ申し傳へます、貴女も何卒お座敷で、無理酒などを飲ぬやうに、お身を大切にして下さいまし、千代「ハイ有り難ふございます、何分共に彼の人の御世話を願ひます、貴夫モウ歸りますから、情願身体を大事になすつて下さいませ、一郎「ア、僕の都は案

じるに及びません、千代「左樣なら阿母サン お國「ハイお愛想なしで……併し貴女人力車を言ひませう、千代「イーエ夫れは勿体なふ過ぎます、四辻まで往けば數多おりますから、勝手に乘ります、左樣ならお菊さんへ宜しく」ト、お千代の千代吉は心殘して歸りました、途ある四辻にて客待なせる人力車に飛び乘りまして南地へと急します、其時通り合しましたる一人の男、大きやかなる鞄を提げて居ります、商人ではなし官吏でもなしと云ふ風体でございますが、不圖千代吉の顏を見て大變驚いたる体でありましたが、千代吉が人力車に乘りますを見るなり何角傍に之れも客待いたして居ります車夫に耳打いたし、自分も急ぎ人力車に飛び乘り、千代吉の跡をつけさせました兩人の人力車は砂煙を跡に殘して駈け出しました、程なく難波新地一番町なる家形へ、千代吉は歸りましたから、車夫を夫れより歸しました、之れ千代吉の自分一己の家形でありません、未だ小形の抱へでありますから、抱主の宅でございます、ズット道入つた妾をば彼のつけて來たりたる男は見すかし、男「フーン……大抵同ふたら知れ

ぬこともなかろふ、オイ車夫何程やろふ、車夫「ヘイ何卒五拾錢丈おやり下さいまし」男「エー五十錢、戸惚て居やし子へか、三軒家からだせ、五十錢テ途方もない事を言ふな、普通六錢の所だが十錢丈張り込んでやる、車夫「旦那ソンナ殺生なことを、ソレが……旦那飛び乘りでじや、十錢なら充分だ、車夫「ソリヤ餘りひどふ御座います、せめて三十錢でも……、男「高イ〳〵、じや乃公も五錢張込んでやるから、十五錢やる、車夫「ヘイ……何も、男「何も糞もあるものか、夫れで結構だト、車夫に十五錢を拂ひましして、其儘九郎右衛門町へ彼の男は出まして、梅屋と書いてある軒行燈のかゝつたる家へ這入りました、暫らく致しますと此梅屋から小婢が駈つて出ました、往く所は同町の西川席でございます、又すぐに西川席より出ましたは一人の男衆、直ぐに一番町の千代吉と標札を打つたる家形へ參りました、男衆「千代吉サンおこしらへ」當家の主人らしいデップリと肥へたる五十五六の女が、臺所の火鉢の側に座つて居ながら、女主「お茶屋は何處……、

男衆「ヘイ梅屋です、女主「ソー……千代吉さん、歸り早々だがお座敷だヨ、チョット着替を早くしてネー、千代「ハイ……」ト、折柄隣りの小形に見習子が復習へて居ります、端唄の文句は、唄「涙で汚すおしろいの、其顏かくす無理な酒」、千代吉は唄の文句に聞き惚れて、我が身に引きくらべて一滴、掌にのせたる白粉の中へ、ポトリと落ちる涙で解いております、火鉢の側で主人は、女主「千代吉さん何して居るんだヨ、衣裳はモウ出させてありますよ、早くおしヨ」ト言れまして、千代吉は泣顏をかくして、賣物に花を飾りまして、鹽花に身を清めて、男衆に送られ、梅屋へと急き往きます、偖て梅屋へ這入りましたは一体何者で御座いませうか、善か惡かはチョット休息いたしまして……

第五席

○「お客さんは二階の裏の間だよ、千代「左樣大きに……」ト、梅屋の女將に言葉をかけまして、段梯子を登るも針の山の思ひなる千代吉は、

商賣柄に作り笑顔に、教へられたる間の襖を開き、千代「大きに……」ト、普通の挨拶をいたしまして、如何なる客は人物であるかと、床柱によりかゝりある、客の顔見て吃驚り、千代「ヤア貴郎は……」客「アハ、、、、お千代サン久し振だ子！、マア好いた所へ座るが好いわサ」抑も此客人と言ふは前席に伺ひましたる、三軒家より千代吉の人力車の跡をつけて參りましたる、商人でもなし官吏でもなしと言ふ、一風變つたる人物でございます、して此客は何者なるやと申すに、前編生首お藤にて伺ひましたる、此千代吉のお千代が、未だ吉原へ娼妓に身を賣ります以前であります、西區は北堀江通り六丁目三宅と言ふ、下宿屋の裏に住つて居りました時分に、新町南通三丁目で尾崎儀兵衛と言ふ、慾張の高利貸に二十五圓の金子を借り受けて夫れも此お千代が尾崎の目的物でありましたので、金から持ち込んで色に引き入れる心算が、神邊一郎が三宅に下宿を致しておつて、此有様を見るに見兼ねて、首より大切なる金子二十五圓を惜んで、尾崎の急場を救つて遣つた事があります、即ち其尾崎儀兵衛が、途中三軒家にて千代吉を見掛けて、其儘跡を隨けて家形を突き詰め、此梅家は豫て馴染の茶屋であります、當家で聞合して西川席の千代吉と言ふ事を知り、藝者と言へども當時は娼妓も同然、生娘とは違つて金で諾と言はせぬ事もなかろと、早速返事を出したので御座います、お千代の千代吉は嫌氣な奴に出遇したと、心中には思つて居りましても、當家へ對して歸らしてくれとも、義理でも言へませんから、針の席の思ひで儀兵衛とは、火鉢を中に座を締めますと儀兵何もお前が此南地で藝者になつて居るとは知らなんだ、併し大變見違へる程美イ女になつたナ」ト、盃を差しながら、儀兵「娘の時分から、マア言つちや失禮だが、阿母と喰ふや喰ずにおつてネー、兄の何とか言つたナ、爾ふ〳〵留太郎と言ふたネー、仕方の無い野郎で困つて居つたが、其時私が二十五圓と言ふ大金を貸して遣つた事がある ネー、夫れもサ、何もアンナ留公見たいナ、冷飯大工を目的に貸す野良は無いが、皆なお前が目的サ、夫れも何とか言ふ書生が出くさつて、此方の思わくは滅茶々々、五圓から溜つておつた利息も酒れ

て了つたが、夫れも何れお前と言ふ目的があつたからだよ、夫れにお前の姿は見へなくなる、實に殘念に思つて居つたが、盞せぬ縁の今日の巡り合ひ、何も慣くはあろまいがネー、千代「マア〳〵昔しの棚おろしは、庚申の晩にでも聞きませうが、何だかお座敷が淋しい樣ですから、誰れかお馴染に招聘を出しては何です、妾の席に儀太夫で面白い妓が出ましたから、その妓でも聘してあげなさいナ、儀兵「オツト爾ふ積み上げ給ふな、藝妓一枚呼べば、一本に付十何錢の金が掛るから、ナカ〳〵今日の金貸では爾ふ利足が這入ないからネー、今日斯く君を呼んだと言ふは、些か所存あつて件の如くだから、千代「オホ、、、、大變六ケ敷條件付きですネ、一ツ陽氣に……、儀兵「アハ、、、、ナカ〳〵君も喰へない口前になつた子ー、マア好わサ、三味線なんぞを持なくつてサ、千代「夫れでは冥加が惡過ぎますから、マア〳〵熱い酒でもお酌き申しませう儀兵「酒か……、マア君も一杯呑み給へ、少し素面では咽がなり慣いから、今冥加が惡いと言ふたが、私がお前の兄貴が難義から、二十

五圓と言ふ大金を貸してやつた事を覺へて居るだろふネー、夫れも度々足を運ばせた上で、無利息で返濟とはチト非道いじや無いか、アノ時の證文面は、エート、萬一返濟出來ない時は、妹千代をば身賣してゝも御返濟申す、お千代は貴殿の御意にさせますと言ふ證文面じやろ、千代「夫れは爾ふで御座いますが、アノ時神遊さんと言ふお方が……、儀兵「夫れは皆まで言ずとも、此尾崎も承知致して居るじや無い彼の時貧乏書生が皆納致したと言ふだろが、ソリヤ元金だけじや無いか、今日金貸渡世をして居つて、無利息の金を貸して居つては、此尾崎はコンナに肥へては居られないせ、遂に乾物になつて了なけりやならない、が、此尾崎も六尺はゞめて居らぬが、チト肥て居るから四尺の御はゞめて居るから、今日に至つて利息なんかと歡々たる事は言ない、夫れも魚心あつて水心、元より乃公の胸の内は承知の筈、此儀兵衛は今に無妻じや、ナお千代さん、オツト千代吉さん皆まで言ずに子ー、諾と言つて貰ひたいんだ」、酒が言しますか、酒飲本性逸すで、本氣の沙汰でありますか、前刻よりの尾崎儀兵衛

が余りの無体の挙動に、有繋愛嬌商賣の千代吉もムッと致して、千代「尾崎さん、御酒の上で仰しやいますのかは知りませんが、彼のお借り申したお金の一件は、アノ時埒が明いたものじやありませんか、夫れに今更思圖々々と置いて貰ひませうわい、又たソンナ事は一昨日でも承りませう」ト、千代吉も堪へ兼ねましたかズット座を起ちますと、傳兵「千代吉さん待ちなさい、乃公が線香を買つて居る内は、煮て喰ふと焚いて喰はふと自由のものだ、爾ふ自儘に座は起せないから、爾ふ思ふで貰ふかい、千代「オヤ利いた風な事を仰しやいます子へ賣物買物愛嬌の商賣でも、たとへお前さんが金貨を山の如に積み上げなすつても、此方も意氣地じや、賣る氣がなけりや賣らないのですから爾ふ思ふて居ておくんなさい、傳兵「賣らないと言や、たつて此方も買ひ度くはねへが、利足の一件は貴樣如何する心算だ、千代「オホ、、、そりや一時落着になつた事じやありませんか、又夫れとも此處はお茶屋の二階、ソンナお咄しがありますなら此千代吉は逃げも隠れも致しません、屋形へお出になれば、何時でも御談しを致しませう、ドリヤお暇を……」ト、千代吉は座敷の外へ出んとする、傳兵「爾ふはさゝぬ」ト、尾崎が止めます拍子に、千代吉の手がピシヤリと尾崎の禿天窓にあたりました、傳兵「ウヌ乃公を打つたナ、千代「打たのではありません、拍子に當つたのですヨ、傳兵「ナーニ男子の面体を打つやがつて……」ト、尾崎は慾の叶はぬ無念の上に、酒氣にかられて怒色はげしく、今は前後の差別なく千代吉に喰つてかゝらん勢力に、洗石は女の恐氣つきまして、千代「アーレ誰れか來て……」ト叫けびました今や尾崎は勢氣に狩られて、千代吉を無体にも手込めになさんとする其時しも、合の襖間をガラリと引き明け、突然尾崎傳兵衛の茶瓶天窓をば、鐵拳を固めて打なぐつた者が御座います、千代吉は地獄で佛に逢ふたが如き思ひにて、誰が出て助けてくれたのかと、其者の顔見て吃驚り、千代「ヤアお前は兄さん……」、彼の男こそ千代吉が見て驚いたも道理、數年間相見なかつた所の我が兄の大工の留太郎で御座います、留太「お千代……」、委細の事なり手前に謝罪は、後刻にゆつくりするから……」ト言ひながら、不意を喰つて茶瓶天窓を撫な

から、苦々しく起き直つた所の尾崎に向ひ、留太「コラ……因業老爺……やイ茶瓶野郎、全体其貸金一件の本像は此留太郎だ、之れから乃公が相手になつてやるワイ、恐圏々々さらすと殴り殺すゾ、儀兵「如何も亂暴きわまる、殴り殺されて堪るものかい、留太「手前の様な強慾野郎は、此世の中の爲めに捻り潰して了つても介意ない奴だ、今も隣りの座敷で聞いて居りや、利息を何とか吐したナ、ソリヤ何時離れが借りた金の利息だ、乃公の借りた金は、三宅に下宿して居つた書生さんが、仕拂つてくれたじやねへか、儀兵「ソリヤ判然と承知して居るが、彼の時には元金よりしか請取ない、利息と言ふものは鐚一文も貰つてない、だから貴君の妹君たる此お千代さんに、今日途中にて出遇たから、當家へ招いて談判を始めて居る折しも、お前が横合から飛び出して、亂暴にも僕……我輩を殴打したのだ、君は即ち殴打傷罪であることは、今日の刑法上明らかであるから、僕は是れから、警察へ告訴する、又だ借りた金に對する、利子を支拂さるに於ては、民事の訴へを起すから、ソウ思ふて貰ふかい、留太「よし、殴打

であろふが損傷であろと、警察へなり何處へでも訴へ出るが好い、現に乃公の妹に無体の所業をさらしたから、兄の乃公が飛び出して打殴つたのだ、又た利子々々と大相らしく吐すが、手前の方に證文があるかい、儀兵「ウーその證書は……、留太「サア滅多に手前の方にあつて堪るかい、アノ時に利息を支拂さるも、示談によつて落着してあるワイ、だから手前が出たい所へ勝手に出るが好いワイ、儀兵「よし法庭で並んで黒白を定めてくれる、その時泣面かくナ、留太「ヘエン、

そんな御心配は御無用にさらせ、全体昔時の留太郎なら、手前の茶瓶頭の欠を拵さす所だが、今日は許してやるから、足元の明い内にサッサと歸りやがれ、儀兵「歸るに手前の世話にやならないワイ」下、逃腰ながら負惜を言ひつゝ、彼の捲を後生大事と抱へて天頭だかへて歸り去りました、千代吉のお千代は久し振で兄に逢て、夢に夢見た心地で御座います、千代「兄さん好い所へ出て下さいまして……、而して何から咄しをしようやら、頓と妾には……、留太「乃公も手前が此南地で、藝妓をして居るとは夢にも知なかつた、お千代手前には今

までいろんな苦勞をさせたが、此留太郎も昔しの留太郎とは違つて居る、少しは眞面目の人間になつて居るから、でウ是れからは案ヒなさんな、實去年であつた、乃公も永々と外國へ往つて居つて、歸朝つて來るなり、手前の事が氣になつて堪らないから、早速東京の金瓶樓へ書狀を出したが、何でも年季を無事に明けたとやら、又た落籍されたとかで、サッパリ手前の踪跡が解らねへから、ア、乃公の心の持ち樣が惡かつた計りに、跡にも先にも唯た一人の妹の、踪跡を知らねへやうになつたと、大變悔んで見ても後の祭り、暮冬にも或る旦那と仕事の都合で東京へ上つたから、早速吉原へ出掛け、手前の事を尋ねて見たが、皆無索線がないので落膽として、大阪へ歸つて來た次第ヨ、夫れに今日は此樓で出遇ふとは、コンナ事ア滅多にありアしねへナ」……と、留太郎も流石兄妹の愛着心、お千代の面打ち眺めて、ホロリと一滴こぼしました、

第六席

却説話題が以前に戻りまして、大工留太郎が經歷を少々爰で申上げて置きます、留太郎も北堀江に住居いたして居りまして、父の大工の留が、急劇の病氣で死去いたしましたる後は、已れ一人の天下であります、其上に酒を飲む勝負を好むと言ふ、向岸なる松島の安女郎に凝り、三拍子まで揃つた持餘者でして、其際に妹とお千代云々と書き入れたる證書にて、尾崎儀兵衛より烏金と言ふ、實に鬼より恐しい所の金子を借りましたので、夫れも彼の神邊一郎が義俠心に依つて、急場は逃れましたものゝ、御本人には少しも改心の樣子がなく、倍々亂暴をして親や妹を泣せて居りましたが、母のおうのは夫が發病の基となり、秋の桐一ト葉と敢果なくなつた、夫れでも悔ることなく、途に妹を吉原へ娼妓に賣り飛して了つたのであります、併し猶も職業を怠りたるより首も廻らぬ所から、借錢は山の如くになり、南洋殖民會社の募集に應じて渡海いたしましたが、さまゝの辛酸を嘗めますに就ても、跡にも先にも唯た一人の妹を、昔界の勤めに沈めたる事、又母親おうのゝ死去も、自分の品行が治ら

ざりしを苦に病だが基であると、所でムいます、不圖氣が注きましてから、翻然品行を改め、何でも妹の身代金丈にても働き溜め、歸國の上は一日でも妹に安樂をさせてやらねば、兄たる身が恥しひと、夫れより晝夜眞黑になつて立働きました、原來才氣もあり腕の達者なる留太郎の事でありますから同島居留民の内にて、伊谷貿易商會主の伊谷維之と云ふ紳士の愛顧を受けるやうになりました、又た此伊谷と言ふ紳士はナカ〳〵の人物で御座いまして、大阪の地に日の出造船會社と言ふを創立しておつて、自分が社長の位置に立ち、日本海國の事業を盛大に致して居ります、そこで岩崎留太郎は將來見込ある奴と思はれ、伊谷が歸朝の折に連れ歸られ、此造船所にて重きに任せられて、今は岩崎組と名けて、自分一己で土木業の棟梁になりました、夫れも皆な伊谷維之が資本主でありますから、留太郎は歸朝の後は、妹お千代の事が氣になりますから、早速金瓶樓へ手紙で以て問合せましたが、お千代の矢車は年季を無事に明けて、同樓を出た後の事でありますから、サ

ツパリ行衛が知れも、大變失望致しました、其の後も伊谷と事業に就て上京いたした事があります、其時も自分に吉原へ出掛けて、いろ〳〵とお千代の踪跡を尋ねましたが、早や萬年町も引拂ひまして大阪へ參つた後でありましたから、是れ又た索線を失ふて心ならずも其儘に日を過して居りましたが、今日は仲間の宴會に招れて往たが、少し不快な事があつたものですから當家は豫ての馴染茶屋でありますゆへ、一杯飲み直さんと立ち寄り、藝妓が出來る間と、表座敷で仲居を相手に突出の鍋で一杯やつておると、裏座敷に當りて藝妓と遊客が、何角聲高に爭つて居る樣子に、唯事でないと性來の義俠心に狩れて、仲裁でもしてやらんと、樣子立聽きますと前條の次第でありましたから、直ぐ飛び込んで尾崎に鉄拳を喰したのでございます、偖てお千代も身の上を物語り、悲し涙、嬉し涙に袖を絞つております、留太郎は、留太「お千代、モウ何にも案じるには及ばぬから、マア〳〵今日は及公が花を買ふから、表座敷へ來るが好い、久し振りで兄妹で一杯やろう、千代「ハイ、ホントニ妾は夢の樣で御座い

ます」ト、咄ず折しも隣り座敷で、儀太夫の鈍調聲で、「嬉しう御座いますと取りすがり、十三年目の對面に、親子袖を絞りける……」、デンデン……、留太「エイ何奴ヒや喧ましい」、隣の座敷に招してあつた藝妓等が、出て來たものゝ此場の仕義、出るに出られず立閉ておつて、俱に貰ひ泣をしておつたので御座います、藝乙「千代吉サン眞誠に嬉しい事でせう子ー」、藝丙「併し岩崎さん、貴夫も殺生なお方やおまへんか、現在妹御のお千代サンを……、留太「イヤ皆聞かれたか、夫れでは此岩崎も天窓が上らない、ば……、

「今から行儀あらためて……」ト、日吉のお政ヒやないが、此岩崎も今日から心を入れ替へて、鉄を孝行にするから、マア許してくれい

千代「何のマア兄さん、そのお言葉は千萬無量……、併しお母さんが此世にござつたらば、留太「エ、又たそんな事を言ふて泣せてくれる、此留太郎は何處ぞ穴あらば這入りたくなるワイ、マア〳〵そんな事は止にして、皆さん陽氣に一杯やろふ、オイ御吉さん等、是れ迄よりは一層、此妓を引立てくれヨ、御吉「そらもふお互ひの事で御座いま

す、千代「鶴吉姉はんには何時とても御世話になつて子ー」ト、夫れよりはワアワと陽氣に騒いでおりました、偖て又も話題は變りまして、彼の九條の小政でございます、神戸福原の唱妓和國、本名は淺ふぢ、即ち生首お藤と横濱並木町に住まして、不圖した所から赤繩を結びまして、夫より種々の流轉があつて、又たもやお藤と計りまして、支那商人阿茶々を欺き和國と足抜をさせまして、直に二十八番館へ乘り込んで强談に及び、其場で强盜に化て阿茶々を嚇し付けて一萬圓近くの金圓を奪ひ取り、其場を三人逃走して、東京にて紳士然と裝つて、榮曜榮華に暮しておりました、偖てしもお藤は福原に置きまして、森野又は阿茶々より、身代金として欺き取つたる六千圓の金、之れは小政に隱し持つておりましたが、又もや本性を顯しまして、俳優狂ひと淫酒に耽つて居りました、今日此頃は隅田の櫻時、雅俗男女は群り見物に出掛け、瓢簞酒に顔を櫻色にさせて居りまする、お藤は取巻の髮結のお品と言ふを連れまして、或る小料理屋に誰れを待ち合し居ります、酒落りとした小鉢物で、何か噛な

がら飲んで居りましたが、風に當る心でお藤が顔を突き出したを、折柄通り合せた一人の書生、帽子眞深に冠つて色眼鏡をかけて居りますから、何者なりやと言ふ事は分りませんが、美い年增だ子ーと でも思つたか、お藤を見揚げて大變に驚いたる風情にて、何か小首を傾け思案をして居りましたが、ズット料理屋へ這入りました、女入つしやいまし」ト、女中が言葉を掛けましたものゝ、薄汚ねへ書生の風体でありますから、余り愛想好も致しませんが、彼の書生は敢て細介意ず段梯子をドン〳〵と、登り、彼のお藤等が飲んで居ります、る、隣り座敷へ座をめましした、女中が座蒲團と火鉢を持つて來て

女中「何か御注文が……、書生「ハアー……、何でも好いから見繕つて子ー、夫れで酒を熱して早く頼むヨ、女中「ヘイ畏まりました」ト、女中は降て往きます、彼の書生は隣室へ耳を傾けておりましたが、程なくお跳へが出來ましたから、ボッ〳〵獨酌で呑んで居ります、隣り座敷ではソンナ事に氣も付ず、お品「夫れでも奥さんのお身体は、妾なんか羨しいのだ子ー、お藤「何が羨しいしくつてなりませんヨ、お藤「夫れでも貴女さ

んの樣な身上に、妾がなつたら、オホ、、、、そんな事には夢にもありませんが、萬が一なつたら、夫れはして〳〵やろと思ひますに

お藤「オホ、、、、何をして〳〵やるつもりだ子ー、お品「夫れがサ浮氣をですヨ、コンナ胴多福の上に甲斐性なしと來て居ますから、誰れも相手になつてはくれません、奥さんなんかは、斯ふ申すと大相か世辭のやうに聽へますが、御容貌と言つたらコノ廣い東京に、マアお二人とはありますまいし、其上旦那がアンナお方ですから、お金はザク〳〵言ふ程御自由になりますし、實に結構なお身の上ですヨ

お藤「何を御言ひだヨ、此方から苦勞したいと思ふはならず、九で親子程年の違つたアノ人の、機嫌を取て居るも隨分仲なものだヨ、お品「オホ、夫れで時々のお口直しでございますか、夫れでも旦那は御親切でいらつしやるじやありませんか、亭主は老人に限ると申しますからネー、お藤「何が親切……、却つて煩くつて困るヨ、自分の年の事を言ずに、嫉妬やでクサ〳〵するから子ー、併しお前氣の毒だがチョット耳をお貸し……、子ー、早くと言つて來ておくれヨ、お品「へ

イ〳〵提まりました、一走り往つて來りますから、お淋しくつても暫時く待つていらつしやいませ、お藤「ハア……チットも早く頼むヨ、お品「ヘイ直で御座います、一走りさへすりや……、お藤「是れで人力車に乘つて往つてお出ヨ」ト、幾許か紙に包んでやりますと、お品は、お品「何です子ー奥さん、こんなものをサ、貴女先刻頂いたのもあります、お人力車賃なんテ貴女……、お藤「マア好いわ子へ、何れ今日の骨折代は歸宅つてからするけれど、夫れで人力車に乘つて早く往つて來ておくれヨ、お品「デハお辭儀なしに頂いて參ります」ト、お品は何事か知りませんが、とつかわは急ぎ出て往きます、毒婦のお藤は床柱にもたれながら、其處に有合したる三味線手に取り爪彈で以て黒文字口にしながら低い調子で……、「鎗は錆びても心は錆びぬ……」、隣室に此樣子を伺つて居りましたる彼の書生は、お品の出て往きまして、邪魔物の無いを見透しまして、間の襖紙を細目に開けて、お藤が擧動に注目いたし居りましたが、此時、書生「昔し忘れぬ落しざし……」、座敷の内ではお藤は流石にも足に疵持つ胴胸にこたへ、お藤「エ

イ……」ト驚き、寄りかゝりし床柱を放れてキッとなりますと、此方は襖間をガラリと引き開て、書生「昔し忘れぬ落ざし……、お藤さんチッとは僕の事は忘れずに居てくれたか子ー」と、遠慮なくズッと這入つて參りました、偖て此書生は何者でございませうか、一服致した上で申し上ます、

第七席

エ、引續き御機嫌に伺ひますは、生首お藤の後編九條の小政で御座います、本編は九條の小政と題して伺つて居りますが、ヤハリ主人公は生首お藤でありまして、前編は話題が取擴がつた所で、終局と致したものですから、如何しても本編は夫れを取纏めてまゐり、いよ〳〵目出度々々と打出と相成りますのですから、話題が彼方此方へと飛び〳〵いたして、定めて御讀み困しからんと恐縮いたしますが、前編生首お藤と通じて御覽下さいますれば、事休が一徹いたして能くお分りに相成りますから、共に御愛顧を願行所さんに

代つてお願ひ申し上げます、却説前席に於ましては、宮本氏の筆に依りまして、毒婦お藤が鎗鋲の爪彈の所へ、ズット這入て來た彼の游汚ねへ書生が、書生「お藤さんチッとは、僕の事は忘れずに居てくれたか子！」と、言葉を掛けた所まで伺つたのでありますが、抑も此書生は何者でげせうか、流石毒婦のお藤も一時はギョッと、驚きやしたが、彼の書生が破帽を取つて、眼鏡を外したる顔見て吃驚り、お藤「オヤ二郎サン……、二郎「久し振りでお藤サン……と、横柳お富が玄冶店の興三の文句染みるが、お釋迦でも御存じの無へ再會……、見りや大分御盛んな樣子だ子！、お藤「マアそんな事は如何でも好いが、お前横濱の一件の時如何おしだつた子！、二郎「サア其時の事も叫しもしたし、又聞きたい事もあるが、お差支がなくつちや隣りの座敷を引拂つて、一座になつちや如何だ子！、お藤「何の差支があるものか子へ……」、其時銚子を持つて來た女中を呼んで、二郎「姉さんソレを此座敷へ一所にして下さい、女中「オヤお連樣でムいましたか、二郎「トンダ廻り合だ……アハ、、、、、、、お藤「夫れで看も大分荒てあるから、何か甘い肴と子！……、二郎「そうだ〳〵、貧乏書生はコンナ時に充分飲つけておかねば、又たとコンナ好機會はないからネー、ドシ〳〵と持て來てくれ、會計掛は此奥さんだから子！、女中「オホ、、、御戯談者で……」ト、女中は怪しみながら下て往きました、偖て華族の二郎は彼の横濱の急場をば、如何にして逃れましたかと申しますに、特務に追ひ詰められましたる所へ、四辻にて車夫「旦那是れにお乘んなさい」ト、一人の車夫が人力車の揖棒を持つて參りましたから、ハテ何者と車夫の顔見れば同類の者でありましたから、此奴究竟と無言の儘に飛び乘りましたら、彼の車夫は此る場合には馴れた奴と見へまして、ガラ〳〵と人込へ引き込み、首尾よく探偵を蒔いて了ひました、二郎もお藤から預つておつた大金は懷中して居りましたから、燈臺下暗しの假令もあれば、半月程は彼の車夫の宅に隱匿れて居りまして少し柴張の氣の弛んだを考へ、妾を變じて上方筋へと志ざしました此間にいろ〳〵手を廻して、お藤の事を如何にせしかと聞き合すと首尾よく逃れた樣子に先は安心して、暫らく餘燃を京阪地方に醒し

其間にもコソ〳〵と惡事を働いて居りましたが、天運のあるにや未だ一度も天網に羅らず、四五日前に此東京へ舞生に化け、又もや入り込んで來て、今日計らずもお藤の姿を表から認めたから、斯くの次第と物語りました、お藤も別れて後の事をば、有ること無い事誠しやかに苦勞をしたと物語り、お藤「ホントに今日此處で、出逢ふとは夢のやうだよ、二郎「爾ふだ實に不思議と言ふても可い位だ、作し前刻に から隣室で聞いて居つたが、如何やら又た好い鳥を喰へ込んで居る 樣子だナ、コン舞生め、お藤「何だよ舞生なんて、うゝや喰ひ殺さに一 匹半匹の野郎は引掛て居るが、元木に勝る裏木とやら、昔し思ひ出 さない日は無いヨ、併しお前此頃は何處に潛んで居るのだ、二郎「乃公 か未だ東京へ來てから四五日より經ないから、何處と定めてないん だ、今日まで天笠浪人だから、チット不便と思つてくれ、お藤「氣に 哀ばく下からお出だ子ー、マア久し振だ、お酌でもさしておくれヨ 二郎「アハ、〳〵、二度とお前の酌で酒が呑めるとは思はなかつた、ア 、久振で甘へヨ、お藤「お世辭でも嬉しい子へ、したがお前は是れから

如何する精神だ子ー、二郎「如何する精神だと尋ねる丈が野暮だ、太く 短く若しかけた乃公の身体だ、如何して眞面目にいけるものか、お藤「 ソリヤ爾ふだ、妾かて両股に汚した生首の木の空にかけられなきや 身体の汚点も清くはならないんだから、一ッ此處で太い仕事をやろ ふじやないか、二郎「ソリヤ此方も望む所だが、シテ其仕事と言ふワ…… 、お藤「太きい聲では言へないが」ト、夫れより何乎二人がコソ〳〵と 相談いたして居る所へ、使ひに往つたる髮結のお品が、ガラリと開 の襖紙を開けて、此場の体裁を見て、お品「オヤ……、奥さん、お藤「オ、 御苦勞でした、ア、何も大事のない人だヨ、チョット耳を……、お品「 ヘイ……、お藤「子ー、斯ふ云ふお人だから、何分とも宜しく子ー、お品「 爾でムいます、存せぬ事として失禮を……、旦那何分共にお引立を 、二郎「イヤ此方こそ御別懇に願ひたいんです」ト、其處で三鼎にな つて酒宴となりました、偖ても集散離合、人間の行末と云ふものは 走馬燈の如きもので御座います、元より淫婦のお藤で御座いますか ら、老人の九條の小政だけでは物足らぬ心地の折柄、華族の二郎に

出會ましたから、燒抗の燃へ易き通り、小政の眼を忍びて二郎を愛結のお品の宅に潜せ置き、不義の快樂に耽つておりましたお品が宅の二階に睦間じく酒酌み交し居る男女は、之れ別人ではありません お藤と二郎で御座います、二郎「だが手前を人の花としてあると思や、何程お心好の乃公でも、滿更好い心持ちでもないじやないか、お藤「そりや妾かて同じ事だヨ、妾がコンナに苦勞するお前だから又外の女もと思ひ出したら、矢も楯も堪らぬじやないか、夫れに宅へ歸つたらアンナお父さんの樣な男の、機嫌を取つてゆかねばならぬ妾の身体だ、實にクサ〳〵するヨ、だから何でも一思ひの事をやつ付やうと思ふんだヨ、二郎「一思ひの事タ如何する心算だ、お藤「妾の思ふにはアノ宅には未だ一万程の金は持つて居るから、こゝ四五日すりや宅の老爺は、上州の方へ稼ぎに往くから子！、其の留主に家財一式賣り却して、お前と手に手を鳥の吾妻を跡にして、上方筋へでも出掛やうと思ふんだ、二郎「ソリヤ好い工夫だ、乃公も東京へ出掛て來たものゝ思しい仕事もありやしないし、未だ北海道一件が氣になつてならな

いから、京阪地方が暮しよいかと思ふて居るんだから、至急やつ付けたら如何だ、お藤「此方も氣ばかり急つて居るが、爾ふ言ふ譯にもゆかないもの、其内に好い音信をするから、時節を待つて居るが好いオヤ大變談語に浮れて折角飲んだ酒が醒めたやうだ、二郎「さん之れに酌いでおくれよ、二郎「何だい杯洗じやねへか、緊氣にも止しねへ、酔拂つちや不可ねへから、お藤「何サ酔拂つてもお前に介抱して貰ふから、大丈夫だヨ」、偖て此お品の宅の西隣が永らくの明店でありましたを、二三日前に轉宅て來たので、何を職業にする人間かお品も知らない位で御座います、之れは遊人仲間で御座いまして、彼の九條の小政の手先に遣れて居りまする、傳法の松とは至つて心易くいた す所から、今日傳法松が訪ねて參り、今日轉宅祝ひにと、此家の主人と一杯遣り、傳法松は大變酔拂つた所から、抱卷に卷れて二階でグッスリ一睡やらかし、咽喉の渴きに眼が覺めて、長家建築の粗末な建方であります、隣家なるお品方の二階で、二郎お藤が巫山戯て居りますか、手に取るやうに聽へますから、傳法「コン畜生……、

壁一重に傳法松樣がお出になるに違ひなく、大概にさらして置やがれ」ト、岡燒半分壁の破れから覗いて見て、傳法「オヤ〳〵お藤さんのやうだぜ、オヤ〳〵巫山戲た眞似をやつてやがる、ソリヤ若へ女の身一空で、那な爺に抱寢されて居るんだがら子ー、口直しが入るは無理じやねへが……、併し小哥が先達小當やつ遣けたら、手ひどい鉄砲を喰しやがつたが、面白いナ、一ッ爰は親分に忠義を立てゝ戀の川はぬ意趣晴し……、フン乃公何でも色氣離れた政役だワイ」ト、傳法松は此家を其儘飛出まして、遣て來たは九條の小政の宅で御座いす、傳法松は四方に人氣ないを見澄して、傳法「大哥……、今日は姉さんは何處へ……、小政「フーン淺草へ往て來るつて……、やがつて留守だが、傳法「爾ふでせう、淺草とは結構な穴だ……、正午から出掛留守に洗濯ッテ……、小政「ウーフ何だイ松、訪しな笑いやうじやねへか、傳法「へ、、寶大兄の顏に泥が附着いて居やすから……、小政「何が……、そんな譯がねへがト、小政は自分の顏を撫ます、傳法「何程撫たて仕樣がありません、小政「訪ふに吐すナへ、傳法「大兄年は取たへ子へナ町内で知らぬは亭主ばかりなりッ、へ、、、、、小政「此奴益々人を戲やがるナ、人を馬鹿に……、傳法「小哥が馬鹿にしなくつても、モウ大哥は馬鹿にされてるんだ、小政「何で乃公が、何を馬鹿にされてるんだ傳法「御存じないからだ……實に斯々で……、小政「フーム お藤が……巫山戲た眞似をして居やがると……、フーン相手は誰だ……、傳法「ソリヤ知らねへんです、小政「何を吐すんだ、相手が分らぬナンて、胡散な事を言ふない、傳法「此道ばかりは如何程年を取ても變りはないものだ成程相手の名前を知らねへと言ては、小哥の前活に逆へはねへが、今現に壁の破目から見て來たのですじや、斯しなさい、大哥は上州行を繰り上げて、今夜になさいヨ、何でも十日も掛るつて言つて、慣嫌能ふ出て往くんです、すると鬼の留守の間に生命の洗濯と、野耶を呼び寄せてちん〳〵鳴々、小鍋立て巫山戲て居やしよから、裏から忍んで、間夫見付たと飛び込んで、四つに成敗してやらア好いじやありませんか、小哥の言つた丈で疑んなさるなら、爾ふしなさい、小政「ウーム……、傳法「大哥迂鳴つちやいけねへヨ、

第八席

傳法の松は猶言葉を續で……、傳法「未だ忘れてゐやした、何でも大哥が留守になつたら、此宅家、財屋財一式を賣却して、エ、何とか言つたけ……、お前と手に手を鳥の吾妻を跡にして、京阪地方で好いた世帶をするとか言つて居やしたせ、小政「爾ふか……、じや今夜でも上州に立とし」ト、夫れより何かコソ〳〵と示し合しまして、傳法の松は立ち歸りました、後で九條の小政は旅裝束をして居る所へ、何事も神ならぬ身の知るよしなきお藤は夕景に立歸りて、お藤「大居遲刻なりまして……、小政「オヽ、お藤か……、實は乃公の上州行が至急になつて、今から發程ことになつたから……、お藤「オヤ爾ふ……、ソリヤ餘り性急じやありませんか、せめて明日の朝にでもなすつちや如何です、小政「イヤ爾じやない、思ひ立つたが吉日だ、何も長い旅行と言ふじやなし、總か十日位で歸つて來んだから、淋しくつても留守をして居るが可い、お藤「ハア……、用事の都合じや致方がないが、何だ

か、不意じや……、心細くつて不可ねへからだヨ」、何角と言つて居りますが、お藤の心中には上首尾々々と舌を出して居ります、彼是して居る内に小政は、留守の事を何角と言殘して、お藤が、お藤「御機嫌能ふ……」の言葉に送られて出て往つて了ひました、後でお藤は獨り言、お藤「ア、物事も調子能く往きかけると、トン〳〵拍子に往くものだ子ー、此間二郎サンに隅田の花見に會てから、老爺の機嫌取も大儀でならなかつたが、今夜はゆつくり呼び寄せて、一仕事やつ付けて、好いた浮世で暮そうかい」ト、夫より手紙を認めまして、早速お品の宅へ持せて遣りますと、華族の二郎は程なく遣て參りました格子戸ガラリと引開けて、二郎「御免下さい……、お藤「ハイ……」ト返事しながら、奥から出て來たお藤は、お藤「何だ子御免下さい……何かテ、誰かゝ來たのかと思つたヨ、二郎「誰かゝつて二郎サンが御入來だ、お人樣の御宅へ來るに、御免なせへと言葉を掛たが、別段不思議がねへ筈じや、お藤「何だい巫山戯た理屈を言つてサ、二郎「併し首尾は……、お藤「上々だ……、早くお揚りヨ」ト、豫て近所の小料理屋に言付けて

ありましたか、程なく仕出を持つて來ります、両人は誰に遠慮なく差向ひで酒を飲み始め、何かコソ〳〵と相談を致して居ります、却説此方の九條は小政でございます、傳法松と途わる小料理家にて落逢まして、時刻を延して立出で、小政「モウ時刻は好いだろ、傳法「モウ好うがす、ボッ〳〵往きや、併し大哥如何してやる心算です、四ッにしますか、小政「四ッ……、傳法「ヘイ、小政「野郎は突然捕縛つて、聲を立ない樣にして置いて、裏の池へでも投り込んで了やあ、夫れ切だ爾しろ、傳法「ヘイ宜がすが、大哥……姐公の方は何なるんです、小政「おふぢか……、傳法「爾ふです、小政「彼女ぢやテ……、だから野郎を殺害して了つたら、夫れで好いじやないか、傳法「ソリヤ分つてるんです野郎の方は……、だが子ー姐公の方を如何するんです、小政「エイ分らねへ奴だナ、野郎せへやつちまつたら、相手の無へ狂氣も狂ぬじやないか、其處だ……、お藤が如何程不義をしたくつて相手がなけりや出來ねへからナ、傳法「ナールル程、今日は好いお天氣で……仰尤とも樣で……結構な事で、小政「オイ鼻の下に二本の指を當て馬鹿

にさらす子へ、傳法「ハア、、、、、コリヤ自分の鼻の下を測捉してるんです、小政「馬鹿にさらすナ、傳法「大哥、餘程盛が可いと見へますナ」、程なく我が宅の裏手へ來ましたから、勝手知つたる裏垣を破つて、両人は身を潜せて居りました、神ならぬ身の両人は、鬼が留守と言ふに氣を許して飲んで居ります、二郎「お品は大變遅いじやないか、一足前へ往つてくれ直に往くからと言つたが、お藤「何、粹を利して居るんだワ子ー、二郎「だが善は急げ明日やつて了ふ心算か、お藤「爾ふよ、嫌と思つたら顔見るも、吐水が逆上るようだから、片時も早く遣つて好いた直似をしようじやないか、オヤ〳〵お前好い氣になつて、人の膝を枕にして、眠つてるとは氣樂だ子ー、二郎「ア、久振で氣を緩して飲んだら、大變に酔ふた、モウお品も遣ては來めへから、寢るとしようか、お藤「オホ他愛のない、サア寢間を取つて上るから」ト、他愛のない痴話狂ひをば、現に眼の前に見たる所の九條の小政は、怒氣心頭に發して、傳法松に相圖して不意に障子蹴破り飛込み樣、ウヌ不貞腐れ如何するか見やがれ」ト言ひ樣、小政はお藤に、傳法松は寢

族の二郎に取つて掛りました、此方の男女は事の不意に言葉さへ得出さず、猶更十二分に酔て居りますから、抵抗も得せず、オメ〳〵と縛り上られました、小政「何だい此様は……、コン蓄生巫山戯やがつてオイ松酒があるか、傳法「米だ大分あるやす、小政「じや之れに酌いでくれ……コラ蓄生……、太イ奴等だ、コンナ事だろと思つて、上州へ往く つて、油斷させて置いたのだ、傳法「モウ仕方が無へやナ、猪喰た報ひと觀念しなさい、大哥野郎を先刻言つた通りにやりませうか、小政「フーン、道つて了へ……、人に見付ると不味いから」此時お藤は流石に も恥しそうに、小政の傍へ縛られながらにじり寄り、お藤「小政さん、賊にツイした出來心で濟ない譯ですが、如何か今日の所は免してお くんなさい、實の所は今更斯んな事を言つては濟ないが子ー、お前さんとコンナに成る前、アノ並木町端で出會つた時は、此二郎さん と逃走る所が、少し手筈が違つてアンナ場合になつたんだから子ー向後は妾も心を入れ代へて、コンナ巫山戯た眞似は二度としないから、今夜の處は免して下さいな、エ、痛つてならないから、後生に

此縄だけなと解いておくれヨ、エ、……小政「喧しいワイ、巫山戯た其似をさらした報ひだ、夫れ丈の辛抱さらせ、お藤「デも子ー、妾が何處までも惡いから、コンナに謝罪つてるじやないか、夫れもサ、ツイ昔時の義理でコンナに濟ん事をして居つたが、お前の眼前で面晴しをするから、何卒今日の所は免しておくれヨ、エ、小政サン……」トジット秋波で眺めながら、眼に涙の露を持ちながら哀を乞ふ風情、小政も元より惚れ切つてる女、傳法「松から不義の次第を聞いても、相手の野郎が惡いんだ、お藤は成ふ事なら助けて、相變らず女房に持ちてへ、若くつて容貌か美つて、コンナに腕のある女と言つては又と二人ありやしねへ、福原から足拔して、清國人の阿茶々の一件なんかは、腕分乃公の爲になつてるから、如何も殺害してしまふは惜いものだ、相手の野郎さへ片付けて了や、お藤の品行も漸次に直る道理だと、惚れた慾目で思つてる矢先へ、哀つぽく子ー小政さん何卒免しておくんなさいと遣られたものですから、小政「オイ松、お藤の縄を解いてやれ、傳法「畑公の縄をですか、如何するんです、小政「如何

するんてマア可いわい、乃公の胸に思案があるから、傳法「ヘエン……
ヒヤ解きますが子！、隨分讀れてる子！、小政「何を愚圖々々言つてや
がるんだ、サアお藤、今までの不義は忘れて遣るが、此乃公の顏へ
泥を塗つた面晴に、乃公の言ふ事はドンナ事でもするか、お藤「ハイ何
んな事でもしますから、今度の事は免しておくんなさい、小政「屹度す
るか……」ト、小政はお藤に駄目を押まして、懷中より取り出しまし
たは短銃で御座います、小政「オイお藤サア此短銃でアノ野郎を打て、
お藤「エ、アノ二郎さんを……、小政「オ、二郎と吐すか、何と言ふか知
らねへが、乃公への面晴にズドンと一發打て、手前が拵寢した男だ
夫れせへ手前の手で打つて殺せば、乃公は忘れてやるわい、お藤「如何
にも打ちましよ、小政「見事打つて見せるか、お藤「ハイお前への謝罪の証
據に、見事打つて見せます、小政「夫れで乃公の女房じや……、オイ二
郎とか吐す野郎、如何せ主ある女と不義をさらすからは、コンナ目
に遇ふとは覺悟だろふ、捕縛つて俄藥師として、裏の池に水雜炊喰
もてやろと思つて居たが、今お藤が改心の上、乃公へ面晴をすると

言ふから、可愛いとか何とか吐して抱き寢さらした、此お藤の手で
往生させてやるワイ、ナンダノ〳〵、睨むねへ、今更睨んでも吠へても
近所隣りを離れた此家、堪へることじやあるやしねへ、オイ松、其
奴をアノ松の木にスツと起せて、縛り付けろ、夫れで好し、サア
お藤、彼奴の胸部を狙つて討て……、お藤「ハイ……」ト返事と共に、ス
ツクとお藤は起ち揚りました、今が今の先まで、可愛いとしいと抱
きめておつた男を、我が手で無慘にも打ち殺すんですから、短銃
持つ手もしびれる思ひでせうが、其處が毒婦の本性でげして、眼に
一滴の露も持ず、グツと袖まくりして、入墨なしたる雪より白き腕
を顯し、短銃の口を掌旅の二郎が胸部へ狙ひを付けました、此時總
に三間程しかございません、二郎の生命は風前の燈火と申しませう
か、實に危き一刹那でございます、爾ふでせうかお藤が引金を一つ
曳くが最期、一ツの息永く絶て、無慘血汐に恨みを飲ねばならぬ場
合で御座います、お藤「コレ二郎サン、お前も男ならモウ觀念おしよ、
何も昔しの義理がおればこそ、亭主の目を忍んでまで裾重ね、夫れ

も斯ふ殺覺て了つては、お前よりは此身が大事、小政さんへの面晴に、見事に妾の手で殺してあげるから、恨みを殘さを往生おしよ、何れお前も木の空に、憂恥晒さねばならぬ身体じやないか、左すれば可愛いと思つた女の手に掛り、此世の暇を取らば、閻魔の廳へ行つても、立派に通れると言ふものじやねへか、サア今引導を渡して上るから、尋常に往生するが可い、小政「オイ〳〵、管々と何にも言ふに及ばねへワナ、スッパリと早く殺つて了ひねへ、野郎の血をすゝらなけりゃ、此胸が晴々しねへのだ、左様「ハイ合點だヨ……」

第九席

流石華族の二郎は悪徒で御座います、我が運命の盡たる所と觀念して、前刻より一言も發せを觀念の眼を閉ぢて居りましたが、今生首お藤が一言に、ハタッと睨め付けて、眼中に薄情阿魔めと恨むが如く、一物凄く光しましたも其儘又たも閉ぢました、小政は心地好氣に「早く打て……」ト促す言葉お藤は二郎の胸部狙つてズドンと一發

放しました、天地に轟く銃聲と、黑煙の内にアワヤ二郎の魂魄は、永く天に歸したりと思ひの外、二郎は依然木に縛られて居りますが傍に見て居つた傳法の松は、血反吐をついて倒れました、此有樣にアッと驚く九條の小政、夫れに眼もくれずお藤は、馳寄つて二郎が縛めの繩を、一生懸命ですプッツリと嚙み切りました、今まで天運の盡きと觀念なしたる二郎は、大いに悅び涙中なしたる匕首を、手に抜き取り、小政双寄らば斬つて捨んと身構へたり、事の不意に少しは狼狽なしたれども、流石の九條の小政、お藤に飛び掛り來たる、悲しい哉得物は敵に奪れて、無手でございます、此時お藤はアワヤと狙ひ定めず打つ短銃に、一發小政にあたりたるものか、アッと背後に倒れました、偖て此時不思議や、火失か放火かは判然致しませんが、此宅の二階からパッと揚つた火の光り、敵も味方も驚く間もありません、西風に煽られて火勢はたくましき毒舌を吐て、家も人も皆め盡さん有樣に、お藤は敵の小政を捨て、二郎の袖を曳き、早く此場を逃ろと無言の合圖、二郎も察しましたかお藤の手を曳き、

裏の垣を破つて一町ばかり逃延びました時に、早や四方に聞へる半鐘と共に、大勢は駈け付け來たる有樣、人に見られ怪まれてはと、早速二郎は匕首を懷中に隱しながら、背後に振り返り見ると、早や火勢天へ高く上り、大變の物音と共に無慘屋根は拔け落ました、お藤「如何したのでせう、此火は、二郎「不思議でならねへ、併し生命あつての物種だ、早く逃ろ」ト言ふ背後から、「オーイ〳〵」ト女の呼び聲、足に疵持つ兩人、キッと身搆へに及ぶ所へ、息を切して駈來つたる一人の女、女「待つて下さい、奥さん……、お藤「爾言ふ聲はお品さんじやないか、お品「アヽ辛度……、サア人が出て來て怪れちや不可ねへから、チッとも早く妾しの宅までお出なさい、今夜の委しい樣子は、歸つてからします」ト、三人は火事の混雜にまぎれてお品の宅まで落ち延ました、此明る日三人はコッ〳〵咄し、お品「實お前さんが手紙で、宿六は今上州へ發程たから、直ぐに來いとの首尾の報知に、其時妾は少々用事があつたから、二郎サンを前に遣つて置き、妾や手間が取れて大層遲くなつて出掛て見りや、家内にや旦突の吐鳴聲、此奴失敗

たと、ソッと忍んで立聽けば、二郎さんは松の木に縛られて居る樣子、又たお前さんは短銃で何とか角とか、文句のあるらしいから、夫れより二階へ忍び込み、マッチで我樂多へ火を放けて、燃へ上つた騒ぎに助け出そうと思案をしておつたら、アノ短銃の音だ、ホントに妾はアノ時は、お前が二郎サンを打つたかと、大變に膽を冷したか知れねへッナ、お藤「お品さん、如何程妾も毒婦でも、何して可愛い男が短銃で試れるものか、ヨク物を積つて御覽ヨ、お品「マアマア〳〵お互ひに無事で結構だつた、併し老爺は燒死だろか子ー、お藤「盲目滅法に二發まで放した短銃に、慥か一發は的中てある手答へ、屹度燒死んだに違ひはないヨ、之れで厄病免れた、二郎「厄病免れでもあるめへ一度でも抱寢をした亭主だ、念佛の一遍でも唱へてやれ、お藤「何を馬鹿らしい、何の罰で念佛所かい、お品「コレ〳〵此場の仕義、夫婦喧嘩所でもあるまい、マア〳〵止たが好い、二郎「アヘヽヽヽ、此奴飛んだ仲裁だ、併しお品さんお前も昨夜の踊で見ると、ナカ〳〵唯だの鼠じやないナ、お品「オホヽ、問れて名乘るも恥しい譯だが、妾の生地は

木更津にて、十五六の歳から男に狂ひ、好んで品川の女郎となり、口と前とで男を誑かし、二郎サンの前じやあるけれど、男と言ふものは、女にかけちや弱音を吐もので、見くびを付てから、段々と惡事が增長し、手先の曲んだ働きも、二度三度と警察の、門を潛ると共に叢胴胸まで太くなり、重ひ處刑に輕いお尻で、今は眞面目に女髮結と、餘る表面は女らしいが、內面は男に劣らない、木更津お品と二ツ名の、惡戲阿婆でござんすわいナ、お藤「爾ふ名乘を聞いた上から、何せ眞面目で人生の、五十の夢は見られぬ妾等、片腕になつておくんなせへ、お品「夫れこそ此方も望む所ですから、御二人さんお見捨のない樣にお願ひ申しやす、二郎「ヤア此方から願ふ所だ、併し此後は如何したものだろ、お藤「サア今夜の一件で警察でも目を付けるだろから、三人で京阪地方へ往つて、一稼ぎやろじやないか、お品「夫れも可いが何れ横濱から蒸滊船で……、二郎「イヤ蒸滊船には二人とも惡々くして居るから、新橋から滊笛一聲、殘る黑煙りに未練を殘さず、お藤「一ツ雲夜に地を馳めて縮るも好い工夫だ」ト、其處で三人は相談いたして、二郎は紳士お藤は夫人、お品はお付と云ふ風体に假裝しまして新橋より滊車にて大阪へ乘り込んで參りました、話頭變りまして九條の小政で御座います、生首お藤が放つた短銃の彈丸が、足に的中てアッと打倒れた時に、不意の火災であります、夫れが爲に姦夫姦婦は踪跡を晦しましたから、己れ憎い奴と跡追ふて出は出ましたものゝ、足の痛手に撲地と倒れ、エ、殘念なと見やる背後に早屋根裏に火が傳ひ、ドット燒け落ちましたゆへ、止むを得ず其場は一時逃れて、同類の宅にて一月餘り兩人の行術を探りましたが、皆無手掛がありません、モウ東京で仕事をするも、警察の目が邪かいから、關西地方へ氣を替へて出掛けんと、足の疵が早や癒へましたから、商人風に假裝しまして、横濱より蒸氣に乘り込みまして、程なく着致したは神戸港で御座います、此航海中に馴染みになりましたは、是れも一人の商人風の男、東京の人じやと言ふ事ですが、年齡は四十五六で御座います、海岸通りの廣田屋と言ふ旅宿に泊りますを、跡跟けて往つた九條の小政は、之れも何喰ぬ顏して同じ廣田屋に泊

り込みました、襖間一重隔て座敷を取つて居りましたが、小政は夕飯の膳の上で一杯遣り〳〵、隣り座敷の客も膳の上にて、一杯飲みながら、鞄の内から何角取り出し調べて居る様子に、ジーッと襖間の側に摺り寄つて、間より覗き見れば金の高は千圓余り、チヤンと勘定しましてソッと道棚の内へ隠し鞄は其儘床の間に置いて、又たも頻りと酒を飲んでおります、小政「ハアン此奴賊難を恐やがつて、どんだ所へ隠して置やがる、鬼より恐しいお方が此所から睨んで御座るとも、御存じない所が佛さまだ」ト時刻の來るを待つて居りました、此商人風の男とは誰れで御座いませう、之れはお藤と計つて、華族岸野道一を騙し、一万圓からの大金を取り出させた、大倉清造で御座います、其夜も早や十二時過ぎ世間が寂といたしてあります頃、密と寢間を抜け出ましたは九條の小政で御座います、合の襖間をば音させぬ様に開けまして、フッと行燈の火を吹き消し、豫て見て置いたる道ひ棚に、抜足差足覗ひ寄りました、

爰で九條の小政の不運でありますか、前頃お藤に打たれ

彈痕が癒へたと申しながら、未た少々は痛んで居りましたので、ソッと盗み足で暗み出したる際に、筋でも強く引張つたと見へて、我れにもあらず「ヒヤめく拍子に、大倉を蹴倒したから堪らない、大倉は眼を覺すなり、清造「おのれ盗賊……」ト組み付きました、小政「失策つたり解かんと急がうましても、大倉清造も左るもの確かと組み敷て動さず、清造「賊だ々々……出會へ〳〵……」ト呼び立ましたから宿屋の上下は俄かの騒動、巡査派出所へ急告いたしたものと見へて早速巡査が駈け付け參り、大倉清造が組み敷いております、九條の小政に繩を打ちまして、いろ〳〵と取調べて其儘警察署へと拘引になり、大倉清造は幸ひにも賊難を免れました、却説明る一日は大倉にも、警察への手續等に日を暮しまして、其翌日廣田屋をば未明に出まして、張場の人力車に打ち乘り、「御機嫌能ふ」と、宿の下女が言葉を朝風に聞き流して、急き參りましたは神戸停車場で御座います、大阪往き二等の切符を車夫に買せまして、待つ間程なく發車報せの鈴に、急き乘り込みますと、車長がピューと合圖の笛と共に、

氣笛を短く吹いて幾百千の人を乘せて、長蛇の如き姿勢で駆け出しました、此中等室には大倉清造と、モウ一人の乘組人が御座いましたが、其人は新聞紙を頻りに讀んで居りましたから、清造「お氣の毒ですが、お明きになつて居ります方をチヨト拜借を願れませんか、乘客「サア〳〵お讀みなさいませ」大倉清造は附錄の雜報を讀みながら、清造「ヤア逃やがつたナ……」ト、余り消魂しい聲に乘客も、新聞讀む手を止めて、乘客「何がです……、珍しい事でも出ておりますか、清造「珍しいと言ふ記事ではありませんが、此處に出てあります、『宿屋の賊』と云ふのは、私が賊難に罹り、其場にて捕縛して警官に手渡しを致したのであります、其賊が昨日の午後に警察署の留置場を脫走したそうです、然も豈の白中に大膽な奴とやありませんが、乘客「何ふですナ、併し貴君には何かお盜られになつたんですか、清道「ナーニ早く眼を覺したものですから、賊の片足をすくつてやつたのです、すると賊も不意を喰つて倒れる奴を乘り掛り、幸いと手に掛つた細帶で縛り上げましたが、其内に下の者も起きて來て、早速交番所へ訴へ出

たもんですから、警官も出張になり手渡いたしましたが、ヤハリ昨日一日は手續に日を暮して逗留しました、之れが盜人に追錢でございます、乘客「併し夫れはお手柄な事でしたナ……」ト物語の折しも次の停車場に着いたしましたか、ジーッと停車いたしました、車長は車長「住吉……住吉……、乘客「爰で失敬します、清道「ア、是れでお降です か、では御免……」ト、一人の乘客は住吉驛で下車致しました、後に殘つたは大倉清造一人と相成りました、

第十席

却説列車は住吉驛を發車いたしました時分は、未だ夜が明け切ては居りませんから、薄暗い東雲に、田舍の雞犬の聲が聞へる中をばドシ〳〵と駈け拔けて來ります、大倉清造は中等の一室を自分一人に て買ひ切つたも同前、咱相手はなし致しますから、昨夜來の何角と賊難一件で疲れたものと見へ、乘客のないにコクリ〳〵と居眠を始めました、其時何時の間にか次の腰掛の下に潛んで居りましたか一

人の男、頬冠を致して面を包み、スックと起て清造の背後まで忍び足で進みました、頬冠りを取りますと、是れぞ九條の小政であります、彼の頬冠の手拭をしごくが早いか、大倉清造の頸部に巻くなり早く、グッと一締めしましたから、何乎は以て堪るべき、清造はウーンと計りに虚空を掴み、其儘息は絶へました、小政は清造の口へ手を當て見て、息氣絶へたるを見澄して、小政「ヘエン……、昨夜は強い目に會しやがつたナ、併しコシナ工合に首尾よく一ッ車に乗り込ひとは、借ても生命冥加の盗きた野郎だ……」ト、早速大倉清造の絶から目星い物を奪ひ取り、中等切符までも盗みて、死骸は床几の下へ押遣り、チヤンと準備が出來た時分には、早や西の宮驛へ着致しましたから、小用に降りたる如く見せかけ、未明を幸ひに柵を越へて何處ともなく、朝霧が朝日に消ゆるごとく逃げ去りました、如何して九條の小政が此列車に潜んで居つたかと言ふに、廣田屋にて取り押へられ、警官の手に渡されましてから、直ちに神戸署に拘引と なり、一時警部の取調べがありまして、拘留所へ下げられましたが

何處を如何しましたか、畫日中に脱走いたし、其日は所々に潜伏いたして、一先大阪へ落延びんと思ひましたが、停車場其外人込の場所は、警察の網張が殿重なに相違ないと考へ、一番發車は薄暗であるを幸ひに、鐵道局の柵を乗り越へ、驛員の目を忍んで二等列車の床几の下に潜んで居りましたら、折好くも大倉清造も乗り込み來り住吉驛から只一人となりたるを見澄して、兇行を逞しくしたのであります、能く〳〵大倉清造は小政の手に死すべき運命であつたに相違ありません、却説又たもお話は變りますが、お藤二郎お品の三人で御座います、首尾よく大阪に着致して、二郎がコソ〳〵と夜盗を働きまして、榮曜榮花に其日を送つて居りましたが、ナカ〳〵警察の注意嚴しい爲に、甘い汁も吸ふ事も出來ませんから、お品が發案で北區曾根崎にて、小奇麗な家を借り受けまして、暖昧屋即ち待合の暗い行燈を軒に掛けて、お藤を餌鳥に何彼好い鳥を引掛んと待受けて居りました、今日は月の二十五日天満の天神様の御祭日で御座います、お品お藤の兩女は信心は付けたり、夜店茶見きにブラ〳〵

と點燈頃から出掛ました、丁度此處は表門筋石の鳥居を少し南へ入つた所に、石鹸の露店が出て居ります、其前に鼻下に八字髭を貯へて居ります一人の紳士、指輪、時計のキラ〳〵して居る鹽梅、風体は偖て置いて一角の金目な物であります、此方の両女は流石商賣柄ですから、紳士を見るとはなし眼を注ぎましたが、お藤は何か見覚へありますかハツと驚きまして、お品を小暗き所へ無言で袖を曳て連れて來ますから、お品も去るものお藤が何ぞ好い鳥でも見付けたものと察しまして、是れ又た無言で連れられて參りました、アノ石鹸店で買物をしてる婦子！、お藤「ハア〳〵大分價める風だ子！、お藤「アレハナ……」と、側に居ても聞へぬ位な小聲で、併も口早にお藤はお品に語りております、其内として少しも紳士に眼を放しません、お藤「今言ふた通りだから、未だ少々は絞れるだろから、お前の口車に乘せて曳いて歸つておくれヨ、お品「飲み込んで居るから、乾度曳いて歸るから、萬事準備をして待つて居ておくれヨ、お藤「ハア……、妾は前へ歸るから……」ト、お藤は急き足で立ち去りました、跡に殘りしお品

は紳士に目を注けて居ります、ツ〳〵と彼の紳士は北へさして往きかけますと、お品は背後から追ひ縋つて、お品「モウシ旦那……卒爾で御座いますが、貴郎樣は丹波の森野の旦那じや御座いませんか、彼の紳士は實に森野信太郎で御座います、途中で見も知らぬ女中に我が名を呼れて、不審相にお品を眺めて、イト勿体振つて有か無かの鼻下の八字髭を捻りながら、信太「如何にも僕は森野信太郎であるが、如何もお前さんは一度も見た事のない御婦人だが……、お品「オホ、〳〵、唐突の事で嘸ぞ御不審は御有理で御座いますが、妾しは下原で紫野と云ふ待合をして居る者で御座いますが、貴郎さまと未だ一度も御目にかゝろました事はありませんが、實今是れに連れ立て居りましたお女が、貴郎が石鹸を買つて居らつしやるを見て、彼の旦那に少し用事があるから、是非遇れ立て歸つてくれ、妾は前に歸つて待つて居るからと申して居りましたから、夫れで失禮ながらお呼び止め申しましたので御座います、お手間は取りませんから、チヨツト妾の宅までお立寄を願ひます、

信太「フーン僕をば婦人が……」フーント、森野信太郎は性來の好色家で御座いますから、婦人が何卒連れて來て呉と待つて居ると聞いて少々自惚根性の助倍心を發して居ります、お品は側から、お品「旦那少し隔つて居りますから、今人力車を分付ますから、何であろともお出になれば直ぐ分る事で御座いますから、人力車夫さん……、信太「オイ〳〵鳥渡待つてくれ、其婦人と言ふは藝娼妓か素人か、お品「マア何でも好いじやありませんか、サア旦那お車が參りました、お乘なさいまし、信太「コレ〳〵何も事情が分らぬじやないか、お品「事情も糸瓜もありません、サア車夫さん遣つておくれヨ、車夫「ヘイ何方まで……、お品「チョッ……氣の利ねへ下原までだヨ、車夫「ヘイでんさい……」ト、一人乘り二輛、西方に向つて鳥居前の人込を縫ふて駈出しました、車上の森野は煙りに卷れたる思ひ、車上動搖れながら夢中に駈け出されました、程なく下原の紫野と軒行燈に記してある門口へ二輛の人力車の梶棒が下ますと、後の車よりお品は飛んで降り、お品「サワ旦那悪しう御座いますが、ズッとお通り下さいまし、森野は呆氣に取

れてお品が案内をします儘、登り慣い細い段梯子を登りますと、豫て準備をしてありましたもの か、四疊半の小座敷で御座いますが、段通を一面に敷き詰めてあります、床には安物の軸を掛け、花瓶に掴み差しの草花も、却つて趣きあるやうに思れます、一貼の座蒲團はチャンと主人を待ち顔で火鉢を前に控へて、待つて居ります、

お品「サア旦那、マアお蒲團の上へ……、信太「ハア……一体誰が僕を待つちよるんか、お品「マア好いじやありませんか、貴郎も坊ふなつたからは度胸をお据へなさいませ、信太「サア度胸を据へてジックリして居るものゝ、何だか氣味が悪くつて子ー、お品「何も貴郎氣味が悪いつて……鬼が棲んでも居りませんから御安心なさいまし、信太「イヤ此邊は白鬼の棲家が多いと聞いて居るから、油斷がならない、お品「オヤ旦那のお口の悪いこと……」ト、お品は笑ひながら階下へ降りて、早速に銚瓶に茶道具を提げて登り來り、茶を入れて又た降りて參ります森野信太郎は後に両手を拱き獨り言、信太「一体如何したんだろ、コンナ宅に乃公を待つて居るなんて、アノ小猫かしらん、でもない珍子

か知れん、彼奴木元の樓上で雜魚寐した時、十分出來てあつたんだが、舞妓の彼奴は何とか言つたけ、爾ふだ小豆、小豆が寐て居たから子し、班子が、アラ小豆さんが未だ起て居るからと吐した、ろの盥乃公もツイ醉つて居つて、其儘グツスリ寐込んで今度眼が覺めたら、モウ十二時だつて、アンナ惜い事をした事がない、夫れから二三度も招聘を出しても、毎時も折が惡くつて出來ないが、乾度夫れに違ひない、木元ではイヤ何とか彼とか、表向だとか吐すから、ソツト此宅で……、彼妓もナカ〳〵喰へぬテ、ト思ふが豈夫小猫の方じやあるまい、彼妓は甚い鐵砲を喰しやがつたからナ、今度班子と出來たなら、一つ小猫に是れ見よがしにしてやらねばならぬテ、オヤ〳〵未だ誰れが何の用で此宅へ連れ込んだか知れないに、我れなから馬鹿々〳〵しい、併し階下で何をして居んだろ、大變に待すな、オヤ〳〵料理でも呼付けたと見へて、今へ毎度大きに有難ございますと言つて歸つたは、仕出屋の若い者に違ひない、が、此宅の今の女、商賣柄でヤハリ据膳がして、何處となくサツパリして居るナ、

モウ十年若けりや無償では通せぬ女だ、ア、大層待しやがるナ」ト、森野の信太郎は詰らぬ想像を起して居ります所へ、下ではチリン〳〵と盃洗の音と共に、ギク〳〵と段梯子を登り來る足音が聞へました から、森野は急に勿体振つて八字髯を捻つて居ります、登つて來たはお品で御座いまして、廣蓋に二品三品の肴と銚子を乘せて、信太郎の前に置き、お品「旦那、コンナ肴お口に適ひませうまいが、ホンの田舍で何を言つて遣つても、不意氣出來ないのですヨ、マア御辛棒なすつて、サア一杯お上り下さい、信太「コラ何も早や御融走になるんだ子！、シテ僕に逢ひたいと言ふ人は……、お品「サア夫れが鳥渡旦那が素面ではお逢ひ申し憎いと言ふので、最前から下においでゝすが恥しがつて上つてお出ヒやないのです、マアそんな事を言はずに、お盃を御重ねなさいませ、信太「でも酒を呑んでも何だか落付ない樣だから、その本人に逢ずとも行前少なと聞せてくれ、お品「マア何事も聞ぬまでが花ですから、夫れをお楽みにお重ねなさいまし、信太「コリヤ五里霧中に迷ふて居るやうだ、お品「アノ女を夢中になつて居ますから

子ー、信太「何が……、お品「マア可いじやありませんか、オホ、、、、、、」、信太郎は心中に、テッキリ班子に違ひはないと、獨りニタ〳〵と笑ながら、盃の數を知らず〳〵重ねて居りました、チヨト一服いたしてお樂みの所は、次席でゆる〳〵と言上に及びます

第十一席

引き續き伺ひまする九條の小政も、餘程話頭が入り組で參りましたが、今や森野の信太郎に於ましては、お世辭上手飲し上手に煽られまして、知らず〳〵重ねましたる酒盃に、今は餘程酩酊の容子で御座います、信太「何卒早く本像を拜してくれ給へ、何だか氣になつて折角の御馳走も落付ないから、後生だから詳だか名前丈なと問せてくれお品「オホ、、、、大變お焦れの樣でございますから、夫れじや今直ぐに連れて來ますから、併し旦那、信太「ナ、、何だ……」、モウ少し呂列に狂ひが出て居ります、お品は仕濟したりと心中思つて居りますが、ソンナ毛振は色にも出さず、お品「アノ前以て願つて置きます

が子ー、實に今お目に懸りたいと言つてますお女がネー、旦那に一遍大層濟ん事をしたそうです、だからお目に懸り憎いんですが子ー何もお謝罪をせんければ心ならんものですから、今夜天神さんでお見掛申した所から、段々妾へ泣き付いてお謝罪をしてくれと頼みましたから、御無禮ながら御用もおありでせうに、コンナ陋くるしい宅へ御無体にお連れ申した次第で御座いますから、ドンナ事がありましても、今までの事は免して上げて下さいますか、夫れが前以てお聞き申したいんで御座います、信太「イヤハヤ大變な條件付きだナ、ムーン宜しい、森野信太郎も男子であります、過去はとがめない、讖悔をすれば其罪は消へて了ひますから、お品「爾ふ貴郎が聞けて下さいますと、猶更アノ女も恥しう思ひませう、ソンナラ連れて參りますから」ト、お品は其儘階下へ降りますと程なく、お品「何だ子ー、アノ位人に骨を折して置いて、今更恥しなんて氣の弱い、サアキリ〳〵おいでよ、妾も側に居て倶々お話を申して上げるから……」ト、お品の聲が聞へますと、今度はギシ〳〵と二人連れ立て登り來る段梯子

の音に、信太郎は今更に胸がドキ付く思ひ、初心な樣ながコッリと仰向になりまして、置床を枕に狸寐入、誰れであろふと糊目に明けて居りますと、お品の背後から、恥しいか隱れる樣にして來る一人の美人、何者とも鑑定か付きません、絹のすれる音が足を運ぶ度に聞へて、得も言はれぬ蘭麝の香りが鼻を撲て、信太郎の精神は是れ丈でも、天外に飛び去て居ります、するとお品が、お品「何を未だ恐縮々々して居るのだ、サア早く旦那のお側へ往つて、チヤットお謝罪をおしと言ふに、○「夫れでも姉さん……妾恥しいもの……、お品「エイ未遂娘じやあるまいし、テモ世話の燒ける女だ子ー」ト、お品は背後に恥しがつてすくんで居る女を、無理に手を取つて、信太郎の側へ突き遣りますと、彼の女は信太郎の寐て居る上へ倒れる樣に座つて、○「旦那堪忍しておくんなさい、妾が惡かつたので御座いますからト言ふ聲はコレ福原浦島樓の和國、即ち生首お藤でございます、信太「ヤア和女や和國……、お藤「情深旦那お腹も立ませうが、堪忍しておくんなさい」ト、信太郎の寐て居る顏へバラ〳〵と涙を溢して拭ふ音ふ工

合にしがみ付きましたから、お藤の前髪がバラリと、酒で熱してある顏へヒヤと當つた時には、信太郎は電氣に感じた如くに、身体をブル〳〵と震して、信太「マア和國……、何でも好い、爾ふ天窓から泣いてかゝつてくれては、理も非も分らぬじやないか、マア〳〵一遍起してくれ」、お藤は柔しい手で信太郎を抱き起して、チョイと秋波で見て、其盃盤に喰ひ付いてサメ〳〵と泣いて居ります、此秋波と言ふ奴が曲者で御座います、一日私が席を終ましして宿へ歸ろとしますと、一人の婦人と後になり前になり歩んで居りますと、其婦人と申すは左したる美人と申す程でも御座いませんが、又滿更捨た容貌でもありません、チョッと十人並と申しますので、所が其婦人が頻りと私に秋波を遣ふじやありませんか、元より御婦人に惚れられた事のない私ですから、隨分初心なところがあります、テッキリお出たと嬉しいのと恥しいのと、顏を上氣させて胸ドキ〳〵と、能く見ましたら、ソノ女は藪睨で御座いました、閑話休題と致しまして、お藤の毒舌は如何云ふ工合に、森野信太郎を取込み、浦島樓

にての三千圓の事を胡麻化したか、其翌る日森野信太郎は紫野から根場の人力車にゆられながら、北濱の定宿へ歸る姿を認めましたが夫れより毎日々々信太郎は、此紫野へ通ふ姿が見へぬ日とては殆座いませなんだ、却説一日の事でありました、此待合紫野の奥座敷で男一人女二人が、車座になつて酒を飲んで居りますが、大分に廻つてある樣子、之れ別人ではない、二郎お藤お品の三人で御座います

二郎「お藤、大分甘い汁も吸つたやうであるから、モウ好い加減にしちや如何だ、何だか手前を人に自由にされるかと思ふや、稼業と思ふても寢覺に氣持ちが能くねへからナ、お藤「オヤ〳〵嫉妬か大根にしておくが好い、併し今日あたり丹波の山奥から歸つて來るだろふ、お品「御留守中は慥かに此姉の品が預つたお藤さん、たとへ牡猫たりとも側へ寄せ付けられないんだが、猫に經節の二郎サンを置くとは、險呑でならないよ、お藤「違ひなしヨ、早く千と二千とかためて卷き上げモウおさらばを極めても好いネヘ、アノのつべらとした面で、乙に嫌味を言れる度に、身内がゾクゾクするやうだヨ、お品「ソリヤ好いた

二郎サンを抱て寢て居るやうな譯にはいかないヨ、だか今度丹波へ歸つたは、銀行とかを設立るに就て、二千か三千金が入用で、夫れを取りに歸つたのだから、今度歸つて來たら、金を持つて居るかを慥めたる上で、一つ狂言を書くとしちや如何だ、二郎「ソレが好いト三人は猶も酒を流行らして居りましたが、愛に森野信太郎は、大阪に斯く滯在致して居りますは、一の私立銀行設立の計畫があつたから、で御座います、就ては今度丹波へ歸りましたは、些か設計に就て金子の入要を生じまして、金策に歸國致したのであります、信太郎は萬事捗りましたと見へて、其夕景人力車を急せて紫野へ來りましたガタンと車夫が梶棒を投る音を聞き付けて、駈け出たお品、お品「オヤお歸り……、信太「ハイ豫想とならば大變遲くなつて……、お藤は居ますか、お品「ハイ只今チョットお湯へ參りましたが、直に歸つて來ませうマア〳〵二階へお上りなさいませ」下、下では二郎が居つて都合が悪くありますから、二階へ通し置き、自分は早速火鉢に炭火を埋けて持つて上り、程なく大きな鞄を提げて、二郎お藤等の前へ來り、お品「

今夜狂言を書くべしですヨ、野郎今此鞄には二千五百程入つてあるから、下で大事に仕舞て置いてくれと言つてたからネー、お藤「フーン少し足りない様だが、モウ好い見切時だろから、今暁あたり幕を切つて落し、辨天小僧の役割と出掛てやろかねへ、二郎「夫れが好い……併し大丈夫かネ這入つてあるか、能くすると出子黒紬士にや新聞の反古を紙幣にする事があるから、お藤「夫れも爾ふサ一つ調べて見ゝや好いじやないか、お品「デモ鍵がないじや仕方がない、二郎「アハ、、、、お品さんでは未だ修業が足つて居ないナ、チヨツト其火箸を一本お貸しヨ……、お品「如何するんだヨ……、二郎「細工は流々仕上を御覧ヨ」ト、二郎は彼の鞄の鍵穴へ火箸の端を突き込み、鳥渡捻つたかと思ひますと、ピンと鍵が明きました、お品「オヤ〳〵……、二郎「然いたか之れが本職だからヨ……、フーンあるヨ、一ツ……二ツ……、たしかに二千八百はある、お藤「それ丈では少度不足だが追付けて了ふかネー、お品「オヤ〳〵之れで少ないとは、慾に限りがないじやないか、マア是れで我慢をしておくが好い、二郎「じやお品さん、お前は早く二

階へ往つて綾鈔てゝくれ、萬事は二人が手筈をして置くから、お品「ハア好し今お藤さんは浴湯に往つてると言ふてあるから、余り遅くならないやうに子ー、都合しておくれヨ、お藤「承知だヨ」ト、お品は有合せの淺草海苔を小鉢に入れ、酒の燗をして二階へ持つて登ります、下では毒婦悪漢は何か密談に及んで居ります、却説二階にて森野が獨りシガーを燻らして居ります所へお品は、戻り來り、お品「旦那今お藤さんが浴湯に往つて、私一人で使がないんですから、マアコンナ者ですが口取りにお上り下さいまし、歸つて來たら直ぐ何か言つて來ますから子ー、信太「ナーニ酒さへあれば肴はいらないヨ、お品「でも酒は肴に美女と申しますから……、信太「茲に美い奴を控へて居るから、夫れで大丈夫だ、お品「オヤ此婆々を御覽りなさいますな、妹が聞いたら怒りますから、信太「アハ、、、、そりや爾ふと、妹とお藤とお前は言ふけれど、少しも似たないじやないか、お品「オホ、、、、旦那は戸籍撿査とお出掛です子ー、實アノ女とは母違ひの姉妹でありますが、永々と音信不通でおつたので御座いますヨ、夫が不圖した所から廻り

逢つて、斯ふ兄弟一ッ所に暮すことが出來る次第で御座います、信太「成程夫れで解せたが、お藤が蘭原に出てた時分に、ソンナ事は少しも咄しもしなかつたからネー、お品「爾ふで御座いませう、斯ふ姉妹が廻り會つたに就ては、いろんなスキ入り組んだお噺が御座いますから、信太「ソリヤ好い肴だ……一ッ聞してくれないか、お品「オホ、、、、コンナ事を御耳にしちや、姉妹の恥辱ですから御免下さいナ、併し彼の女は一ッ体何して居るンでせう、全体長湯の上に今日あたりは、旦那のお歸りたろと、虫が知らして化粧に念が入つて居るので御座いませう、信太「違ひなしだ……、お品「旦那アノ駒下駄の音は、乾度アノ妹ですヨ、オヤ〳〵、慌らしい往き過ぎつて了つたヨ、ホントに呆れ返つた長湯だ子ー、信太「アハ、、、、何にも案じるにや及ばぬヒやないか、幼女と言ふでもなし、迷兒になる心配はないからナ、お品「オホ、、、、分りませんヨ、旦那にかゝつて近頃は呆然して居ますから迷子の札を付けねばなりませんヨ、信太「何を言ふのだ、アハ、、、、

第十二席

お藤に二郎は互ひに示し合せまして、却説今浴湯から歸つたと言ふ体裁にて、お藤は薄化粧をなして二階を登り往きますと、二郎はボイと表へ身をかわしました、お藤「旦那お歸ンなさい、お品「オヤ旦那お歸んなさいもあるもんかねへ、今然を作へてお湯へ迎ひに往ふと思ふて居たに、ヨウ迷子にならずに歸つてお出だつたチー、お藤「アラ姉さんの口の惡いこと……、お品「併し妾は何かお肴を見に往つて來るからお前旦那のお酌をして上げておくれヨ、お藤「ハア姉さん……、肴を見に往くんなら、ソレ子ー彼れを買つて來ておくれヨ、お品「ソレネー彼れを言つちやお薩をかへ、お藤「アラ賤しい事を姉さんが……、信太「コテ好く出來た、蒸し立を一貫目程買つて來て遣てくれ、お藤「旦那まで」が同じに……姉さんお薩じやないヨ、毎時も旦那のお好きなソレ……、お品「オホ、、、、分つてるヨ、旦那のお好きなものまで覺へて了つて、お藤「ソリヤもふ始終は何れお側に居る妾じやもの、お品「オヤ此妹

は姉にまで自惚を聞してからに、何かお驕りヨ、信太「お藤を張込むと言つておつた、お藤「アラ旦那未だ暗らしい、信太「アヽ痛い、甚い力だ子ー」、お品は此場を透しました後で、お藤「アノ旦那今度は無時までも、當地に御出で御座いますか、信太「イヤ一月程は銀行の事務で當地に滞在して居るが、又暫らく國へ歸つて來ないと少度都合が悪いから、

お藤「又た御歸になりますと、夫れじや一人當地に殘つて居りますと淋しくつて不可ませんから、信太「夫れじや國へ一所に來ないか、お藤「でもお國には歴然とした奥さんがお在じやありませんか、信太「ナーニ其なんか放り出して了ふから、介意ない、お藤「ソンナ不實な事が出來ますものか」、コンナにして居りますと、眞にお藤が擧動と言ふものは處女の如くであります、夜は寢と更けて申すと、十二時過ぎの樣でありますが、未だ枕元に置たる懐中時計の短針は、十一時を指して居る時刻であります、所柄として世間は寢といたして居ります森野信太郎はお藤が上手な酌に盛り潰され、蒲團の中へ入れられたるも夢うつゝの境で御座いましたか、喉の渴きに不圖眼を覺し、枕

元に冷水やあると見ますと、今夜はお品が注意を怠つたものと見へてありません、チョッと信太郎は舌打をしながら、手を叩かんかと思ひましたが、下のお品も能く寢入つて居るか、寂としておりますゝ、側に寢て居るお藤を起して、薄暗き行燈の灯影に、お藤の寢姿を見て、信太郎はギョッとせし体にて、飛び起きて枕元にチャンと座り、恐ろしうに又もお藤の寢姿をジット見て居りました、信太郎が驚いたるも無理はありません、お藤は信太郎を酔す爲めに共に酔つたものでありますか、女のあられもない片肌抜きになつての寢像の悪さ、夫れが併も雪の如き眞白き美しい肌に、色彩美くしい青刹がしてありますので、今までも信太郎は抱き寢をしながら知らなんだから余りの事にギョッとして飛び起きたので御座います、お藤も不圖眼を覺して、驚き呆れて居る信太郎の体裁を、寢ながらギョッリと見て、別に恥たる色も見へず、クルリと腹這に伏して、枕下の煙草盆を引き寄せて、埋火掻き立て、莨四五服スパ〳〵と吹しながら、煩悶そうに髮の後れ毛を

指で掻き上げ、猶も莫スバ〳〵吹しなから、物凄い上眼で信太郎をヂロリと見ました、今お藤は蒲團より半身を顯して居りますが、背中一面に鬼若丸が鯉魚を押へて居りますす圖で、又た右の腕より肩へかけて鬼の面が彫つてあります、お藤「旦那……」、呼れて信太郎は咽喉に詰るやうな返辭、信太「ウーン……、お藤「コノ醜体を御覽になつちや、嫌ゼ愛想が盡きやしたろネへ、オホ、、、、、そんなに恐氣るに及びませんよ、妾の身体は未だ此ッぱかしじやありませんヨ、旦那之れを御覽なせへト、左右の股に彫たるは男女の生首、夫れが玉つて凄く出來ております、お藤「両股に彫れた青割から、結名を取つた生首お藤、旦那……今が先まで可愛とか言つて抱寝なすつた女じやありませんか、何にも是式の青割に恐けて、顔の色を変へて震へて居るやうじや、男子の恥辱であります、そんなに恐氣て小さくなり、片隅に震へて居ずとも、此生首は喰つてかゝりもしやしねへ、生命だけは助けて上げるから、サア此方へお覓なせへ、妾の腕を枕として、絞れる丈絞つてあげるよ」ト、寝ながら手を延しまして、信

太郎の手先を握り、蒲團の中へグッと引き込みますと、信太「コラお藤何をするか、お藤「何をするかも糸瓜もありますか、可愛がつて上るんだヨ」、此時物音烈しく段梯子を登つて來たのは華族の二郎で御座います、此体を見たお藤は飛んで起きます、信太郎は猶も慌き立上らんとする時、飛び込み來たる華族の二郎は、二郎「サア間男さらして乃公の面へ塗つた泥の面晴に、男女を重ねて置いて四つにするから爾ふ思へト、信太郎が襟首取つて動さす、右手に夏猶寒き匕首を引き抜き、両人を睨んで起つたる此有様に、森野信太郎は魂魄を天外に飛して了つて、言句も出ばこそ呆れ返つて居ります、お藤は怖ル氣色もなく二郎の前に膝を進せ、お藤「お前の眼を恐んで、旦那と斯ふやつて寝て居る所を押へられては、今更野暮に辯解もしないから、昔しから御定りの重ねて置いて、四ッに打ち切つておくれヨ、妾も好いた好れた旦那と、俱に死んだら女冥加に適つたと言ふもの、サア何處からなりとスッパリと、男らしう斬つておくれヨ、ネー森野の旦那、お前さんも胴胸を定めておくれヨ、斯なつちやお互ひに仕

方がないわネ！、今までコンナ亭主のあることを、お前さんに隠して言なかつたが妾が悪いんだから、因縁づくだとあきらめてお了ひなさい、お前と妾と六道の辻も三途の川も、二人手に手を取て行けば、死出の山路も怖くはなかろふ、地獄へ往くか極楽へ、往生するか知らねへが、コンナ煩悶せへ娑婆世界、二人さし向ひの新世帯、何程楽しいか知れやしねへ、サア森野の旦那、サア此方へお寄んなせへ、二人並んで合掌して、念佛諸共四ッにして貰つちや可いじやありませんか、何をピク〳〵して居なさるんだ、男らしくおしヨ」ト言へど信太郎は唯だ脇向き無言であります、二亟「オヽ野太くもお藤能く言つた、亭主の顔へ泥を塗り、姦通ひろいた上からは、四ツにされるは初めからの覚悟だろ、ヨシ、男の方から斯ふしてやる」ト、信太郎の襟首押へて白刃を振りかざすと、信太「アヽコレまあ待つて下さい、實に今更何と言つても言譯らしいが、此お藤は有夫の女と知らず、斯ふなつたが僕の過失、如何な難題を持込れても一句も出ないが、今お前さんが僕を殺したからつて仕方もなかろふし、爰は物は

相談だが、殺さずに我慢をして欲しい、お前の面晴に望む通りするから、生命丈は助けて下さい」ト、ポロ〳〵涙をこぼして頼みますから、元より其方が望みの二郎、二亟「成程たとへ姦通にもしろ人一人殺害したなら、乃公の生命の無へは豫ての覚悟だが、此方の望む通りの面晴をするから、生命丈は許してくれとは、兎角當世だ、諸、二人の首代を爰に積みなせへ、生命丈は助けてやるヨ、信太「首代丈さへ出せば許してくだされるか、シテ其金高は……、二亟「七両二分とは昔しの間男代、今とや物事騰貴の折柄だ、マア一萬圓なら負けてあげるヨ、信太「エ！……アノ一萬圓……、二亟「高へと吐すのか、高けりやおきやアがれ、此方は金は望ねいのだ、元より好む二人の生命……、サア覺悟さらせ」、スパ〳〵と莫を輪に吹きながら、聞いて居つたお藤は、お藤「ネー旦那、一萬圓とは餘り高いじやありませんか、夫れより二人蓮の臺で新世帯しようじやありませんか」ト、嘲弄します、森野は耳にかけず二郎に向ひ、信太「何も……ハヤ、では丁度此處に持合が二千七百圓あまりありますが、これを差上げるから、何卒夫れで勘

辨してください、二郎「二千七百……、チット不足だが、爾ふ大丸商會にもいかぬから、不肖だが負けて、夫れで男女の首はついでやるアキリ〳〵早く其金を出せ、信太「承諾下されて忝けない、其金は下のお品に……」、段梯子の口から首を出して居つたお品は、お品「オット皆さま仰せられな、預つた鞄はソレ此處にあるから、撿めて請取つて下さいヨ」、其處で信太郎は鞄の中から二千七百四餘、八百圓近ひ大金を二郎の前に差出しますと、二郎「念の爲めだ數を調べて受取るから……オイ〳〵金を入れる物がないから其鞄をよこせ、信太「足れには銀行の書類が……、二郎「書類は此方にや入らないから返してやるわいト、鞄を引奪つて、二郎「サアもふ用かないから、サッサと出て往け」ト二郎は信太郎を掴み出すやうにして、二郎「オ、未だ忘れ物がアラ、慈女房を如何するんだ」、お藤は其言葉尻について、お藤「旦那……妾を拾て往くとは不實じやありませんか、オホ、、、、、オヤ暖んで居るよ、二郎「エ、猪口才な何さらす」ト、ウーンと言ふ程横頬を打れて、信太「アッ……」ト云ひながら、森野信太郎は戸口へ投り出され、暗にまぎ

れて逃る如く首尾わるく立去りました、後で三人眼と眼を見合せ、お品「首尾能ふいつたネー、併し此儘永居して居つて、警察へでも訴へやがつたら面倒だ、二郎「そうだ今から立退くとしよ、お品「道具と言や附物だし、金さへ持てば氣の殘るものはありやしねへ、お藤「爾ふだが併し立退き場所は……、二郎「扨りがないヨ、チャンとこさへてあるヨ、お品「サア早く往うか」ト、三人は、下原を夜逃して除跡をくらましてアヒました

第十三席

演じ續きますは九條の小政、却説も氣車の進行中に於ましして、大倉清造を縊り殺して、西宮驛より逃走致しました る九條の小政の前原金次郎は、其儘大阪へ忍び來り、餘燃のさめるまで暫し何處にか潜匿んで居りました、却説又た前席に於ましして、兄岩崎留太郎と九郎右衛門町の梅屋に於て出逢ました る所の、西川席の藝妓千代吉本名お千代は、兄留太郎が如何にも妹に、是れまでの苦勞をばさせて仮

いて、今又た藝妓になつて居るを知りながら、兄として知らぬ顔もしては居られぬから、是非落籍をしてやつてと思ひますが、留太郎も無資本より岩崎組と言ふ、土木請負業をして居るも、皆な伊谷と言ふ銀主があるからです、ソリヤ當時留太郎の手元で二百や三百おあり千代の身代金位は融通ならぬ事ありませんが、此節宮の建築物を請負ふて居り、ナカ〳〵大金を振り廻さねばならず、又た二百三百の事ですから、伊谷に事情を打明けたら融通のつかぬ事もありませんが、今言ふ請負に大變の出金を仰ひで居る次第であるから、口に頻張つて言ひ憎い譯なれば、お千代に前條の次第を物語り、兄として妹の藝妓勤めして居るを見ながら、夫れも自分の放蕩から拵る職業に堕入れたのであるから、是非とも直面目にしてやらねば、明に済ぬ義理ではあるが、情願茲に暫らく辛棒してくれと、段々と涙をこぼして依頼ますから、氣質の温和なるお千代は、「兄さんソンナ心配は御無用にしておくんなさい、唯だそのお言葉が何より妾が爲には嬉しう御座います、妾も勃ふやつて勤めて居りますれば、馴れた事

でもあり、別段辛ひとも思ひませず、何や彼やと言ふて居る内には一日は一日と前借金の方を返してゆきますし、又今度藝者勤めを致しましたは、原夫神邊一郎さんの病氣を助けん爲めであります成程一郎さんには渡邊儀兵衛に借りた金子に就て、恩義はあります が、アンナに義固い夫の事なれば、兄さんの御心配に預つては、却つて夫も心配いたす道理ゆへ、唯だ此上は兄妹の情誼に訪ひ音れて一郎さまの便りになつて上て下さいまし、神邊一郎の事は廻り合た時に、留太郎に打明けてあつたものですから、夫より互ひに音信を通じて、世話になりなられて居りました、又た神邊一郎も身体は舊に復して壯健になりましたから、近々に辯護士の試驗を受んものと熱心に下調べに勉强致して居りました、偖て大阪に來りて忍んで居りました九條の小政は、警察の目も少しは弛んで來た樣子ではあり懷中には氣車中にて、大倉清造より奪ひ取つたる大金があります から、紀州新宮の材木問屋の主人で、名は岡嶋清兵衛と云ふ布合出に て、南地へソロ〳〵と浮れ出して、馴染茶屋紀の國屋にて、增井席

の娼妓小金と言ふを招びましたが、好色家の小政であります、小金の接待振が大變氣に入りまして、三日に上ず通つて惚氣て居りました、此小金と言ふ女は、海に千年山に千年、又里に千年と、三千年の効を經ました恐しい魔物で御座います、小政も小金に惚氣て居ると言へども、心中生首お藤の事を忘れ兼ね、モウ一度此方の心に靡かすか、又た兎や角吐すに於ては、男と共に殺害して恨みを晴さんと、常々心懸ておりました、今日は月の卯の日、住る吉神社の祭日で御座います、阪堺鐵道今日では南海鐵道となつて居りますが、うの鐵道の便を借りて參詣する者が澤山御座います、小政も信心するやうな奴ではありませんが、首尾よくは流車中にて一仕事をしてる日當にするし、ブラ〳〵氣保養の散歩がてらと、野太い根性から變詣いたしたので御座います、先參詣を終りまして、丸太格子で杯一を極め、麥藁細工に薩摩芋が當所の名物で御座います、夫おを土産に提げて又も流車に乗り込みました、祭日の事でありますから、三等室は乗客が混雜致して居りますが、一等は九條の小政一人、他に

乗合もありません、今や車長が發車號令の小笛を吹んと致します折突然此車へ飛び込んで來ました、一人の藝者がございます、供に連れた箱屋に是れも例の麥藁細工と芋の籠とを提させて居ります、

箱屋「既ての事に乗遅れる所でしたネー、藝妓「ハア……好い都合だつた大變停車場の人が早く〳〵テ喧しく言ふものだから、一生懸命に駆つて息がはづんでならないヨ」ト、言ひながら帯の間から女持の莫入を取り出しました、好色の九條の小政は、此藝妓の風采をジロ〳〵見て居りましたが、心中に、「ア、好い女も世にあるものだナア、コリヤ藝妓に違ひがない、南地だろか、新町か知らぬテ、一つ席と名が出たいものだナ、小金なんどは好い女だが、根が娼妓だから何處となしに賤しいが、此妓は上品で……、コンナ妓を一番口説落していナ」、助倍根性を發して居ります、ソンナ事は氣が付きません此方の藝妓は、煙管の雁首に莫を詰めて、藝妓「松ドンお前摺附木を持てお在かへ、松「オヤ仕舞た……、持つて置たんですが、松朴で……、藝妓「御念が入つてるネ！、置忘れとは……、松「如何も濟ません……」ト言

ひつゝ、小政がノーシヨンの烟管で、ジガーを吹して居るを見て、

松「へエ、、、、旦那、誠にお氣の毒で御座いますが、摺附木を御持ではお御座いませんか、持ておいでなさいますなら、何卒鳥渡拝借を願ひ度いもので……、へエ、、、、、、小政「有ります、サア御遠慮なしにお使ひなさい」ト、袂から蛭摺附木を出してやると、松「これは有難ふ御座います」、彼の藝妓は完爾と笑ッて、藝妓「旦那有難ふ御座います」ト一禮述べて、白魚の樣な指先に金無垢の小さい煙管を持つて莨をスパ〳〵と喫んで居ります、今此藝妓が莞爾と笑つて一禮述ました、其莞爾と云ふ奴が、好色家の小政の腦髓へ、電氣でもかけられたかの樣に、ガーンと感じました、「一体何處の妓供だろ、名前丈なと聞きたいナ、男衆に聽くも何だか外見が悪し、一つ難波で下車たら後を跟けてやろか知らん」、幾歳何歳に相成りましても此道ばかりは變らぬもので御座います、斯く小政が氣を揉んで居ります内に氣車はドン〳〵進行致しまして、早や天下茶屋も後にして、今宮の入口で鳴す氣笛が薄らぐと共に、難波驛にと着致しました、藝妓「旦那

有難ふ御座いました、お先へ御免……」、流石愛嬌商賣で御座います摺附木を借つた計り、之れ丈の會釋を殘して下車致しました、小政は殘り惜しう思ひましても、待てと言ふ譯にもいかず、自分も續いて下車しようと思ひ、フト足下に落てあるものがありますから、何だろと能く見ると合財袋で御座います、早速拾ひ上げて、小政「コラ今の藝妓が落して往つたのだナ、呼んで手渡をしてやろ」ト、急ぎプラットホームに出ましたが、早や藝妓の姿は人込に隱れて了つて居ります、小政「小政も詮方なく、中に何が入つてあるかと思つたが、人中から、停車場を出て直ぐに前の、待合茶家で見るも何だか氣が咎めます、女中「入つしやいへ飛び込みました、奥が閑靜として御座いますズット奥の座敷の座蒲團の上へ座りますと、頓て女中は火鉢に火を入れ、硝子の菓子皿に羊羹を五切程上せたると、土瓶に茶を入れたるを持つて來て、茶碗につぎながら、女中「茶一ッおあがり……、今日は吉さまへ御參詣で御座りますか、小政「卯の日だから鳥渡お參りをして來ました、女中「今日は大變の參詣人で御座いました、小政「何分時候

が好いもんだから……併し姉さんビールを一本拔いて、肴と云ふてはなかろから、煮拔でも持つて來てくれ、女中「ビールは朝日に致しませうか……、小政「ブーン朝日で好いから、程なく女中はビールの栓を拔き、煮拔玉子を小鉢に盛て持つて參り、其儘店へ往つて了ひました、硝子盞に小政はビールを泡立せてつき、グッと一息に呑み干して、懐中より彼の合財袋を取り出し、氣になりますから中を檢めて見ますと、藝者の一の道具、辨慶じやありませんが七ッ道具と、花撰樣小形の名刺が五六枚入つてあります、小政「西川席千代吉……、是れさへあれば川席千代吉としてあります、大願成就か、アハ、、、、此奴アー番運が向いて來たワイ……何か外に這入つてないか知らん、コレ御籤か、十八番大吉……チュッと鼠瞞がしたい樣だネー、外に逢狀が二三枚……、何だ手紙か入つてあらア……叢燒けに焼けるナ、旦那が情夫から寄越したのだろ、何が書いてある……オヤ女の手跡だ……一筆染しまゐらせ候さてとやか……お定り文句は拔きにして、何々……先日御願し申し置候通り、

兄さまが此度御試驗にいよ〳〵御及第遊ばし候に就ては……エ、手紙の文句で言つて居ります、永々しく相成りますが、詰り何しても お金が五十圓程入用であるが、御苦勞の中の姉さまに、コンナ事をば御聞せ申すじやないが、兄の一身上には是れが浮沈の境界であるから、妾は遊藝は少々習ふてあれば、姉さん見たいに藝妓になりたい、たとへ娼妓の賤しい勤めでも文事ないから、何處へなりと世話してくれとの文言でありまして、奥に……姉さま參る……きくより……としてある、表書には、南區難波新地一番町……小畑きみ樣裏書には、三軒家……神邊内きくより……と認め御内お千代樣……、

めてあります、小政「五十圓……、フーン此金を仕組みに一番狂言を書いてやろ、好い物が手に入つたワイ」ト、ソコ〳〵にビールを呑み終りまして、早速當家の勘定を致して、一二町の所人力車でもあるまいと、フラ〳〵歩きで、珍て馴染茶屋なる紀の國屋へ參りますと、仲居が早くも見付けて、仲居「オヤ岡鰕の旦那……、貴郎住吉樣へ御參詣でしたのか、情のないお方ですな、道寄して誘つてもおくれでな

いのですか、妾は兎もあれ小金さんが恨みますせ、小金「アハ、、、此年をしてゾロ〳〵女郎を連れて歩けるものかい、サアコリヤ土産だ……」ト、臺所火鉢の前へ座を占めました、偖ても流車中にて小政か出會ひました藝妓は、申し上げずとも御存じでせうが、お千代の千代吉であります

第十四席

仲居「旦那……マアお二階へ……、今小金さんを席へ出しに遣りましたから」、ア、失敗つたと心中に小政は思つたが、モウ仕方がない、

小政「ア、今日は小金を招らすじやないんだ、仲居「オヤ小金さんじやないなんで、外で浮氣の種を見付けて來たのじやありませんか、可愛相に今朝から小金さんは三遍來てよすせ、貴郎今日で三日お顔を御見せでないもんですから、如何したんたろテ焦れて〳〵……、小政「アハ、、、、旨く言ふネー、焦れる筋の小金じやないわい、仲居「オヤお口の惡イ……ト言つてる所へ、小婢が小金さんは今日他所往きで妾

が見へぬと、席からの返辭ですから、仲居「オヤ如何しませう旦那……

小政「如何しよと言ふて都合が好いじやないか、仲居「未だ旦那アンナ事を……、シテ小金さんの妾が見へたら、耳に入れてくれと言ふておく賃だつたろネー、小婢「ハイ……爾ふ席の吉ドンに言ふておきました、

小政「コレ〳〵實……實際今日は少し外に思案があるんだから、小金の出來ぬが却つて僥倖、マア酒の燗なとしてくれ、仲居「オヤ爾ですかマアそんな所に在つしやらすと、二階へ……、小政「邪魔になるだろ、ドッヤ二階へ、仲居「イーヱ……爾ふじや……、小政「マア好いわイ……」ト小政は二階へ揚りますと跡から仲居が、小婢に不性箱廣蓋に突き出しと運して、自分は酒の燗をして持て揚り、夫れより暫らく酒盃がありまして、小政が何か仲居に咄しますと、仲居「旦那あんまり浮氣じやありませんか、小金さんに聽へたら……、小政「オイ〳〵何も好色根性じやねへが、今も言つた通りの次第だから、仲居「何も言譯なさるに及んじやありませんか、白狀して了ひなさいナ、オホ、、、、、小政「爾ふ訝しい邪推を廻されては迷惑だ、仲居「夫れでも何だか訝しい

からです、併し千代吉さんは柔和しいお妓ですヨ、小政「爾ふか、此樓へ花に來る事があるか、仲居「時々聘します、ソレ去月でした羅座敷で清元を唄つてたお妓がありましたろ、其時旦那がアヽ美い聲の妓だネーと仰しやつた事がありませう、アノお妓ですヨ、小政「爾ふか何は兎もあれ廊へ往つて貰ふか、仲居「直に今走らします、彼是と小政は仲居を相手に酒を呑んで居りますと、カラコロと柔しい駒下駄の音が聞へまして、臺所でお世辞を振り蒔いて段梯子を登つて來たは千代吉で御座います、二階の踊場の所へ手を支て、千代「ヘー今晩は……」ト挨拶しながら、ドヤナお客だろと天窓を擡げて見てオヤッ……、千代「旦那不思議の御縁ですネー、小政「一河の流れ一樹の蔭……、仲居「ハテ摺附木を貸たが縁の初め、テモ不思議な再會よやナ……と言ひたいやうですネー」、其内に千代吉は燭臺の影に座を占めますと、小政「お近付に一盞……、千代「有り難ふ……」ト盞を受けながら、千代「旦那ホントに不思議な御縁ですネー、併し滝車中では失禮を致しまして、小政「ソラ兎んだ、痛み入る御挨拶だ……、併し性急な樣だが、お前何か滝車中

で落したものは無いか、千代「落し物……、別に心付きませんが、千代「心付きませんではチト呆氣で、黒人には一の道具……之れに覺へがあるか、千代「オヤ此合財を貴夫が……、小政「オヽお前さんと摺附木が縁となり、言葉を交した其時に、アヽ世に美い女もあればあるものと思つても、名前を尋ねるも失敬と扣へて居つたが、お前さんが滝車を下車た後に落ちてあつたは、此合財袋、中の名刺で西川店の花妓千代吉さんと知つたから、合財を屆がてら、お近付になるに來たのだ袖摺り合ふも他生の縁、蹉跌く石も何とやら、之れも佛說で言へば前世の御縁とも言ふものであろかい、千代「オホヽそうや此方の申す事情願之れを御縁として、不意氣な妓ですが御愛顧に願ひます、仲居「旦那の口前はナカ〳〵女殺しですから、旨く言つても迂活に千代吉さん乘つては不覺ですヨ、深いのもありますから、千代「オヤ爾ふですかソリヤ何程思つても駄目ですネー、小政「オイ詰らねへ事を言ふものしやねへ、仲居「旦那は普通の鼠じやありませんから子ー、ドロンと一つ太鼓が這入つたら、淺黄の頭巾が取れて大百になると云ふ、女に隔

係ちや悪黨ですヨ、小政は可厭な事を言やがると思ひながら、小政「成
談は放て置いて、合財は慥かに届けますゾ、千代「如何も忘れは有り
ふでございました、小政も爰は程の賣り所と、程好い所で切り揚げ千
代吉を歸しました、其内に敵妓の小金も歸つて來たりたれば、其夜
は紀の國屋に一泊いたして居りました、借て其翌る日の事であり
す、千代吉には家形の二階の自分の部家にて、鏡臺の前に座つて獨
り言、しかも目には涙の露、千代「ア、儘にならぬは浮世と言へど、昨
日三軒家のお菊さんがお越しになつた文で見ると、夫一郎様が今度
は御出世の足掛、爾れに就て五十圓のお金が要るから、お菊さんが
藝妓か女郎になつても、其金が調達へたいからとのお願み、妻の
妾が居ながらお菊さんに、ソンナ賤しい奉公させられず、と言ふて
妾も今は、子飼の身体の事、五十圓の半額は借て置いて、十圓のお金
の工面もならぬ不甲斐なさ、月々世帶の足にと送る文でも精一杯、
ソリヤ兄さんに事情を打明けたら、五十圓位はこさへて下さろが、
聞けば今度の請負は、ナカ〳〵御自身の荷が勝つてあるから、出來

る丈の融通をして居ると、此間見へた時の御咄、ソンナ中へ又心配
させられた義理でなし、ア、金が欲しい」ト、思案投け首、昨日小政
から届けてくれた合財袋に、お菊から届いたる手紙が入れてありま
すから、他へ直さんものと取り出し、讀むとなしに小口から讀んで
行くと、ハラ〳〵と手紙に巻き込んであつたか、十圓紙幣で五枚……
……、千代「アーラ此お金は……」ト、呆氣に取られて居ります所へ、階
下から下婢の聲で、下女「千代吉サン……、三軒家から妹さんが來てい
やはりますせ」ト、大阪言葉での報せに、千代吉は彼の金をグサ〳〵
と合財袋へ突き込み置き、千代「アヽ爾ふ……何卒此方へお揚げ申して
おくれ……程なく段梯子を登つて來たはお菊で御座います、お菊「姉さ
ん……今日は……、千代「オヽ、よう來て下さいました、サア此方へ……
ホントに取り散してありますから、借てお菊は何の要事でお千代を
訪れましたは、爰で管々しく申し上げずとも、御推察で御座いまし
よ、暫らく致しましてお千代は、常服のまゝに急いで家形を出まし
て、出て來りましたは紀の國家で御座います、千代「姐公……昨晩は大

さに……、女將「オヽ、千代吉サン何方……、マアお掛ろ、千代「ハイ有難ふ……」ト、火鉢の前に座り、千代「姐公昨夕の岡鳴さんとか言ふお客さんの、お宿は何處で御座いますか、女將「岡鳴さんの御宿は西横堀ですが何やら、お宿を聞いたりして、所しい風やないか、千代「ソンナ事情でもありませんが、チトお目にかゝりたい事があつて、夫れで……、女將「オヤもふ何ソお約束でもしたのか、素早いお妓だネー、千代「姐公そんな事ではありませんが、至急に……、女將「至急にお目にかゝりたいとお言ひのか、ソリヤ何か驕りなさいヨ敎へても上げるし、又今直ぐに遇せても上げるから、千代「情願敎へておくんなさい、乾度驕りますから、女將「ホヽヽヽ、大變執心だ子ー、寅未だ旦那は宅にお在だが今馴染の娼妓さんと御酒飲つてお在だから、チヨツトお呼び申し上げるから」ト、仲居に耳打しますと、程なく小政の岡鳴清兵衛は下てまゐり、離れの小座敷で差向ひ、千代「旦那樣、昨晩は御親切にお屆け下さいました合財袋の内に、コンナ物が這入つておりましたから、お戻しに參りました」ト、彼の五拾圓の金を差出しますと、小政「イヤこ

りや如何も恐れ入つた、私も明地に事情を言つてお前に上よかとも思つたが、夫れも何だか恩に被せがましいから、實は無言つて入れて居いたのだ、コレ思はぬ事から近付になるも、夜前も言ふ通り何角の縁、實濟ないがその合財を拾つた時、何か索線もと思ふた所から、袋の中を調べて見たのサ、すると名刺が入つてあつたから、マアお前さんの事と言ふ事は分つたが、ソノ次の隱に入れてあつた文、何れ嬉しい慈中と、羨し半分妬さ半分に讀んで見たら、お前には義理に迫つた金の……、サア皆まで言わぬもの事だ、兄の一身の浮沈になること、ア、氣の毒と思つてした、無禮、マア千代吉さん許しておくんなさい、千代「何をマア貴郎勿体ない、初めて御目にかゝつた貴夫に、コンナ御心配に預りましては誠に濟みませんから……小政「イヤ爾ふお前が義理、固ふ出ると、勤人と申しては失禮だが此社會のお方に似合ぬ固くるしい氣質、猶私は慕しくなりました、お前さんも兄の浮沈に關る金、何か納めて置て下さい、千代吉は夫れでは義理が濟ぬと、いろ〳〵辭退に及びましたかなれど、九條の

小政の心中には一の計畫のある事ですから、之れ又たいろ〳〵なだめすかして納めさそうと致さず、千代吉に於ましても、今お菊が出て來ての物語り、マア如何とかしますと、出來ぬと承知で一時の氣休言ふて歸したのであります、此五拾圓の金子があれば、夫も助りまして、又た義理あるお菊に賤しい勤をさゝなくつても濟むことであります、今は跡先を考へる間もなく、貰ふと言ふも異なものなれば暫時借りる事にしまして、千代吉より借用の一冊を差入れました、小政「マアこんな物は要らないが、お前の氣休に預つて置くが、併しお前の兄は何を勉強して居られるんだ」、兄と問れてハッと顏を赤めましたが、千代「ハイ法律を少々學んで居りますので、小政「爾ふかソリヤ何より結構だ……」、其時誰れかは知らず襖の外に立ち聞いておつたものが御座います、之れよりも千代吉は思はぬ難義に出遇ふところですが、チョット一服いたしてから申し上げます、何卒お樂みに引續き御愛顧を願ひ上げます

第十五席

千代吉は九條の小政の情に依りまして、思はずも五拾圓の金を借りまして大いに悅び、早速三軒家へ人力車で駈け附け、一時も早く此金を手渡し致し、人々に安心させんと思ふ心は矢竹でありますが、紀の國屋を出て家形へ歸りますと、折も折とて席から出しに來ておりましたから、行くに往れぬは小飼の悲しさ、苦界の是れが習ひで御座います、止むを得ず千代吉は鏡臺の前で、化粧する間を盜んで端書へ走り書、下婢に賴んで郵便箱へ投げ込して、自分はお花に往つて了ひました、偖て其端書が三軒家の神邊方へ着しましたは翌日の夕景前、勿論行違ひの爲め延着で御座います、お國「一邦様只今お千代様から端書が參りました、一邦「爾ふですか、何……、金の都合が出來たから、持て行きたいがお客があつて行けぬから、誰れかに取に來てくれとの文言です、お國「エ、アノ金が調ひましたとナ、一邦「旁勞の中にて如何都合してくれたか、調金したとの此端書であります、お國「ろりや何より結構なこと、併し妾でも一走り往つて參りませう、一邦「イヤお前さんは持病で腰が痛かろ、難波新地までが大分の道程

もありますから、止になるが宜し、爾云ふて僕がアンナ遊廓へ出掛行くも、何だか背後を見らるゝ感じもありますから、お菊さんが程なく會社から歸つて來ましたら、波れて居ましよが一走り往つて貰ひませう、次手に心齋橋順慶町北へ入つた所に、此村欽英堂と云ふ書林があります、其處へ寄つて買物もして貰ひたいから、爾ふすが宜しひ、其内にお菊が會社から歸つて參りましたから、お千代からの端書を見せますと、お菊は涙翻して大いに悅び、流石女のたしなみに鳥渡着替て、お菊「兄さん鳥渡往つて參ります、一郎「オ、御苦勞ですナ」ト、イソ〳〵と三軒家より野道を斜めに、難波新地へ急き參りました、丁度千代吉は家形に居りましたから、早速自分の二階の部家に通しました、千代「妾がネー昨日に直ぐ持て往ふと思つたんですが、折の悪いにお座敷がありましたから、何でも早くお聞せ申して御安心させようと、直ぐに端書を出しましたのですよ、お菊「左樣でしたか、實昨日來つて、姉さんにはお勤めの身体、他から見へない御苦勞のあるなかに、アンナ事を御聞せ申し猶御苦勞を增せて、嚴に

濟ぬとは存じて居りましたが、何分兄の一身の浮沈に關ります事であればせめて、此身を娼妓に賣つてもと、思案を定めて手紙で本公口を御依頼申し上げましたが、何にも未だ安心がなりませんから、兄にも母にも内密で昨日參り、御相談を致しましたが、如何とかして見樣とのお言葉にて、安心致して待つて居りましたら、早速御聞達下されましたとのこと、兄さんも悅んで居られますし、妾もコンナ嬉しい事は御座りませぬ、千代「サイナ彼れから妾も大層最負にして下さるお客が見へて、事情を打ち明けて御頼み申したら、夫式の事易い事と、早速に懷中から出して貸して下さいましたが、ホンに在る所には有るもので御座います、併しお返し申す仕方は又た妾の胸にでさんすから、何卒貴女も又た一郎樣も御案じなさいませぬやうト義理の中にも眞實の姉妹の樣に物語いたして居りました、千代「妾も鈍な、モウ御夕飯の時刻、貴女何處へ御飯喰べに來りませう、お菊「イエー姉さん妾は宅を出る時頂いて參りましたから、ソンナ御心配を……、千代「ナーニ妾も喰べたいと思ふて居りますので、遲くもなりま

せんから、お附合なさいまし」ト、夫れより近所の鶏肉屋へ往き、時間せく二女夕飯を喰べまして、千代吉は一郎及びおくにへの土産物を、買ひ事傳まして、人力車に乗つてお歸へりと言ふを阿菊は、お菊イエ是れから順慶町の欽英堂と申す書林へ買物に寄らねばなりませぬから、千代「夫れなら御用が濟みましたら、人力車でお歸へりなさいヨト、人力車賃までも心付けまして、千代吉は家形へ歸へりました、お菊はお千代に別れて、順慶町心齋橋北へ入る、書林此村欽英堂へ參り、兄一郎が望みの書籍を買ふて居ります、其時お菊の背後に、幅子具深に冠り色眼鏡を掛て居りますから、誰れとも確とは分りませんが、お菊が書籍代を支拂ひ居ります、財布の内をちらと見て、一端北へ往き過ぎましたが、お菊を暫し見詰めて居りましたが、二三軒にて立止り、用事濟して南順慶町を西へ曲るを見て、四五間背後から何思つたか、密かに跟けて參ります、お菊は背後に跟けて來る人ありとは、神ならぬ身の知るよしもなく、一時も早く立ち歸へり、急き來りましたは、來山の句兄と母とに金見せて悅ばさんものと、

に、『涼しさに四ツ橋を四ツ渡りけり』ト、あります、四ツ橋の一ツ吉野橋は詰ので參りますと、背後よりお菊に突き當りました、お菊「アーレ……カ〳〵と足早になつて、ドンとお菊に突き當りました、男「コテ何も失禮を……、何卒御免下さいまし……」ト、詫びながらソコ〳〵行衛知れずなりました、お菊「オ、慾りした粗相なお人……」ト、不圖氣付きましては懷中の大金、急に手を差入れ探し見ましたが、財布の儘落したか拘られたものか、あればこそ、ハッとお菊は、往來も打ち忘れまして、泣くに泣れぬ狼狽の体でありました、お菊「オ、今突き當つたお人が盜つたに相違ない、未だ遠くは往くまい、跡追かけて……」ト、狂氣の如く駈け出しました、早や十一時の紡績會社の氣笛も前刻に鳴りまして、月はあれどもドンヨリと、雲に隱れつ顯はれつ、我身の上を哀れとや、鳴くや雲井に吐血鳥、八千八聲も血を吐く音、腸斷る苦しき思ひに、何處を何處やら兄元も、トボ〳〵歩む影さへも、早や元に歸りし魂魄の、身体離れしものなるや、死地を探して我れ知らず、來かゝる此處は尻無の、堤も

長き苦痛をば、我れは一人死んだなら、お菊「ア、助かるであろふなれど、跡に殘りし義理ある母さま、實の兄さんのお歎きが目の前で見るやうな、定めて姉さんが、文字で書いても苦界と言ふ、その辛ひ苦しい川竹の、勤めの中でお覺して下さつたお金を、妾の油斷から掏られて了ひ、兄の身の之れが爲めに、一生浮世に沈めて了ねばならぬと思へば、死ぬる此身は厭ねど、兄さんと姉さんのお恨みなさるが、何程切ないか知れはせぬ、又た母さまと言へば、義理の中からの御養育、其海山の御恩も送りもせず、先立ちます不孝の罪、御許しなされて下さりませ」ト、掻き口説きつゝ泣くづおれて居りますは、お菊でありまして、四ッ橋にて金を掏られましたる所より、思ひ迫つて死ぬ氣になり、迷ひ迷ふて尻無川の堤まで迷ひ來たのであります、お菊「ア、思へば今日宅を出しなに、兄さんなり母さんのお顏を見たが、此世ではモウ見ることも叶はぬか、モウシ兄さん、定めて不甲斐ない妹とおさげしみも御座いませうが、冥途に御座る父さまや母さまに、お詫をして貰ひますから、情願御堪忍遊ばされて下さりまし」ト、我が家と思ふ方角を伏し拜み、お菊「ア、未練なり」ト、お菊は涙打ち拂ひ、四方手探り小石をば、袂に入れて重りとなして、南無阿彌陀佛と御唱名と共に、ザンブと尻無の川の藻屑となりました、

南は、實に哀れな事で御座いました、却説話頭は變りまして、生首お藤、華族の二郎、木更津お品の三人は、曾根崎に於て森野信太郎を殺し、人局にかけて、贓して取つた二千八百圓の金があります、暫らく警察の眼を忍んで、尻無の川下泉尾新田に、貸別荘があります、したから、或る京都の華族の新夫婦が保養と世間体を見せて、此別荘を借り受けて世間を忍んで居りましたが、二郎は此頃少し慎中が温つた所から、遊里へでも足を向け出しましたか、今日も遊過から出て留守であります、お藤お品の兩人は、毎時も死んだ魚の料理で酒飲むは面白くないから、是れから舟で天保山へ漕ぎ出して、一杯飲んだら、瞞ぞ甘味かろと言ふので、其場で料理して居る魚で、早速小舟を雇ひ、船頭二人を乘せて、川下へ〳〵と漕ぎ出させ、彼方此方と漕ぎ廻し、終に渚傳ひに住吉の浦に出で、夫れ

に上陸いたして遊び暮し、太陽が西方の地平線に入る時分に興も尽たれば漕ぎ戻し、尻無を上つて参りまして、早や我が家の近くへ帰り來りたる時に、ドスンと舟に當つたものが御座います、船頭は、

船甲「音よ……、何だ〳〵何が當つたんだ……」、音と呼ばれたる船頭は雲間洩る月光りに透し見て、船乙「ヒヤッ……土左や……土左的だ」ト、早腰を抜して居ります、船甲「何だ土左だ……、土左衛門なら突き遣れ」

船乙「乃公アでは如何も……、船甲「エ、仕方のない野郎だ、何が怖しいんだ」ト、櫂を取つて突き遣らんとするを、流石毒婦でも人の情ある

お藤「船頭さん入水かゝ子ー、モウ助らないか子ー、船甲「ヘイ来お藤です、

だ間がないやうです、お藤「ジヤ助るものなら救つて遣りたいネー、一ッ骨折つて下さい、夫れ丈の事は吃度するから、船甲「ヘイ宜ふございます、出來る丈け骨折つて見ませう、音……手を貸せ、船乙「手を貸せて手だけ持つて往く譯には往す、貴樣から取りに來て呉れ、船甲「馬鹿なソンナ事が出來るものかい、如何さらしたのだ、船乙「如何さらしたつて、腰が……、船甲「抜たのか、仕方がねへナ意氣地のねへには、じや

乃公獨りでやつ付けるわへ、お品「女か……男か……、船甲「ヘイ素敵滅法な上玉の娘です、船乙「ナーニ美い娘だ……、ア、腰が立つた、船甲「女と聞いたら彼の通りだ、助倍野郎……、早く手を貸せ、船乙「オット合點だ」ト、兩人いたして入水者を舟に引き揚げ、早速胸先へ手を當て見ますと、未だ十分に温味があります、船甲「奥さん未だ大丈夫……胞先に温味が御座います、お藤「そうかへ、夫れでは甲斐があると言ふもの、早く宅まで舟を漕つておくれヨ、介抱して見るから」ト、舟を急せ別荘の下岸へと着けさせました、

第十六席

却説今お藤が救ひ揚ました娘と言ふは、即ちお菊でございます、今入水した所であります、餘り多量に水も呑んで居ませなんだから漸くに息氣吹き返しました、お藤「コレお女中心を健にお持ちなさいヨ夢心地であつたお菊は、今お藤の言葉が耳に通じて、フト眼を見開きますと、結構な夜具の中にて、丸髷姿の婦人兩人に介抱されて居

りましたから、ハッと思ふて起き揚らんとしますを、お藤「ア、是れ今身体を動しちや悪イ、其儘御に寢て居なさい」ト、お藤は今まで何の氣も注きませなんだが、丸眞洋燈の光りに娘の顔を能く見れば、如何やら見覺へのあるやうに思はれ、ック〳〵打ち詠め、お藤「ヤアッ……お前は東京の岸野におつた、上女中のお菊じやないか」ト、お菊は我が昔を言はれて不審と、之れも見て吃驚り、お菊「ハアッ……貴さま、お恥しう御座います、お品「お藤サンお前の知る娘かへ、お藤「ハアー岸野と言ふ華族に居つた時に、使つた女中でお菊と言ふ娘だヨ、お品「爾ふかへ不思議だ子ー」、お菊は恥かしさに夜着の襟に顔を隠して居りますを、差覗くやうにして、お藤「コレお菊、お前一体如何おしで、入水するやうな氣におなりだつたへ、サア知らぬ顔と言ふでは なし、事情をスッカリお明しヨ」、及ばぬながらも相談相手になつてあげるヨ」、親切なるお藤の言葉に、お菊は蒲團の上に起き直りまして、涙ながらに岸野家にて、神邊一郎と不義の濡衣を着せられて於遂になりたるより說き起しまして、神邊一郎は我が實の兄であつた

事、又た兄がピストルにて打たれ、夫れが爲めに近頃まで患ひたる事、一郎の妻千代が當地で藝妓勤めをなし、此度一郎一身上に付き金の要ることあつて、姉の千代が才覺してくれたを、自分が不甲斐なさから掏り盜られ、夫れが爲めに死んで言譯せんと決心なしたるまで、洩れなく物語りましたが、金瓶樓の花魁矢車が今の一郎の女房お千代であることは、此場で必要もありませんから別段喋しませんだ、何程蛇の如なる毒氣あるお藤でも、此お菊等兄妹が岸野家にて不義の汚名を着て、言譯すべき餘文のあつたにも拘らず、其場は一身に罪を引請け、オメ〳〵放逐されたも、是れ自分が一郎の無骨なる中にも、犯すべからざる所あるに感想して、餘文したるが原因であります、又た一郎がピストルで以て雪中に打れましたも、自分の所業と言ふても然りなんでありますから、同情に打れて涙を流して聞いて居りました、之れが談に鬼の眼に涙と言ふので御座います、お藤「ホントにお菊さん、お前は大變苦勞をおしだッたネー、シテ一郎サンとお前とが兄妹だつたとは、實に奇遇だつたネー、アッた大

れで一郎さんと一ツ宅にお住居かへ、お蔦「ハイ三軒屋に共に住居を致して居ります、お蔦「嫌ふかへ、三軒家と言へば遠からぬ遠くもない所、マアく、お前も案じるには及ばないヨ、盗れたお金の事も、明朝妾が一郎さんに御目にかゝつて、乾度お詫もしてあげるし、又た御相談申すこともあるから、今夜は此宅へゆつくり身体を休めて居るが好い、夫れで兄さんも嘸ぞお案じであるから、丁度幸ひ船頭が来だ臺所で酒を飲んで居るから、妾から一筆書いて安心しなさるやうに言ふて遣つて置くから」ト、何から何まで洩れなき親切に、お菊は娘心のお藤の毒氣ある事は知りませんから、唯だ嬉し涙に夜着の襟を濕す計りであります、却説又た話頭は前席に歸りまして、難波新地にてお菊と別れましたお千代は、家形へ歸りましたものゝ、虫が報すと申すのですか、何だか胸騒ぎがしてなりませんから、「アー此間からの心配で、ヤレ〳〵と肩の荷を下した積か、何だか氣持が悪い、肩でも凝てあるんか知れんから、今幸ひ何處も御座敷はなし、浴湯へ一ツ遍這入つて來たら、又た氣も精々するかも知れない」ト、早

速鏡臺の上にある眞鍮の金盥へ、手拭糖袋石鹸と御化粧の七ツ道具を一つに纏めまして、近傍の浴湯へ參り湯槽の側で、一生懸命にお化粧をして居りました、偖て浮世風呂にも其情が穿つてあります通り入込み湯と申すものは、ナカ〳〵混雑なものでありまして、浮世雑談の持つて寄り場所で御座います、湯槽の片隅に御念佛交りに、我が嫁の惡口を言ふて居ります老婆サンがありますと、我が生み子に此餓鬼奴等と駆つて居る、裏長家の癇癪があります、況しや花柳の洗湯は、人を屁とも思はす客を尻に敷ておる藝娼妓が入分であるから、賄々と喋ることは夜明の軒雀よりも喧しくあります、○「アノネー布袋子ハン、昨晩は定めて……布袋「賄吉サン何ですエ、昨晩は定めてい跡は、、、、、、では分らんやないか、賄吉「廣花へ花にお出だつたろ、布袋「ハアー往きましたが、夫れが何としました、賄吉「オヤ爾ふ……眞面目に切り込れては、何とも言ひ様がないが、昨晩花においでた所は廣花であつて、夫れで昨日結なさつた訳が、今朝席へ歸つてお在た時には、臺なしになつてあつたから、夫れでチヨト尋て見

たのですヨ、布袋「訝しい事を尋ねるお妓だヨ、妾が廣花へ往くが何がソンナ訝しいんだろ、喇吉「定めて久太郎町の番頭サンだつたろう、妾思ふて居たからサ、布袋「オヤお察しが能い子ー、ソンナに屢々お光來だと、お身の毒だからと女房の妾から云つておるから子ー、此頃は足遠だヨ、喇吉「此妓は好い氣で聞いて居りや增長して、自惚の御相伴とは安くはない世、布袋「安くないかも知れぬがマア聞いておくれヨ、ソレ唄の文句にもある通り、主も妾も得心づくで、暫らく逢ぬとつた今、言ふて別れて又た今宵、如何やら妾しが負そうなで、實一昨の晩に廣花で逢た時に、毎晩逢ひたいはソリヤお互ひの事たが、夫れではお前のお身の毒でもあり、新内の明がらすの、親がゝらなら勘當受け、親方持なら足袋屋の看板だからと、言ふて朝別れた又た昨晩、何やらホントに此方が負そうに思つて居た所へ、廣花から出じやないか、テッキリ夫れと嬉しいと甲斐ないで腹立まされに、勢力込んで往つて見たら、御目的違ひ、髪のムシヤクシヤする知らぬ一現客、チット察しておくれヨ、喇吉「長々の御聴聞……有り難ふ御

ざいます、駄賃に肩でも流しておくれヨ」ト、ガヤ〳〵客評聞は彼等社會の常で御座います、千代吉は心に思ひの斷へぬ身であるますから、ソコ〳〵に上り身体を拭ふて、衣類を着んと襦袢をパッとさばきました柏子に、平倒りなから妾見の大鏡にて、髪を解きつけて居りぬ位に、此方は温和しい氣から、千代「アヽ何も失禮を……」ト、言ふ顔を下からジロ〳〵と無言で見詰めて居つた、彼の魔性、足れ增井席の娼妓小金で御座います、千代吉の顔を見るようムッと顔、小金「何たイ、人に汚しい着物の裾を當て置きながら、コレは何も失禮でもあるものか、コノ生盗人奴……」ト、姫御前のあられもない、傍にあつた石鹸入を發矢と、千代吉目掛て投げ付けました、千代吉、慧いて躱をかわしましたが、轉し損じて小髮の邊りに當つて、薄い眞鍮の石鹸入れでありますから、其角が當つてチョと疵か付きましたから雪なす顔に時ならぬ血汐の紅葉、千代「アヽ痛た……、ソリヤ貴女余り御無体ナ……小金「何が妾しが無体だヨ、コノ活盗人奴、泥棒阿魔奴が

流石の千代吉も洗湯の大勢人の居る場場で以て、活盗人……泥棒阿魔と呼れ、況して小髮に血のにじる程の疵を負ざれ、何程温和しひ慎しみ深ひ千代吉でも、生れは此浪花の淀河の水に産湯を遣つたと言ひながら、多年江戸の生粋、吉原の意氣地場所の水で腸を洗つて來た氣質ですから、今は堪忍袋の紐をプツリと切し、千代「此方に紐相あればこそ、失禮でしたとお詫して居るじやありませんか、夫れに乱暴な石鹸箱を投るばかりか、活盗人……泥棒阿魔とは余りじやありませんか、何時妾しが何をお前さんの物を盗みました、ハイ泥棒いたしました、何處のお妓か知らぬが、余りの口お明きでなひヨ」、此千代吉には小金が岡嶋清兵衛とは假名、九條の小政とは情婦であると言ふ事は、微塵知らぬことでありますが、小金に詫きまして、昨日紀の國屋の座敷にて、千代吉が小政から金五十圓を貰つた事をは、襖の外で立聞き致して、偖ては千代吉と小政の間に、既に出來てあると邪推を廻しまして、別に小金には生命までもと打込んで居る、九條の小政ではありませんが、彼れ等の祖會の意氣地とし

て、一度招れた客をば他人に取られると、仲間の恥辱の涙に思ふて居りますから、威達ひしての嫉妬騒きで御座います、小金「何だ泥棒し た覺えない、エヘン此方で言つて聞すよりお前の心に聞いたら、直ぐ解る事だ、未だ愚圖々々言つてると、斯ふしてやるゾ……」ト、女と言へど多年曲輪廻りして、脊中に鱗が三枚も生へてあろふかと言ふ魔性でありますから、人中であるから恥しいの、或ひは何じやの と言ふ樣ふな奴では御座いません、傍にあつたる帶押取て、千代吉目掛て打て蒐ります、花の顏紅葉を散して落花狼藉に、前刻よりは事の本末は知りませんが、互ひに顏も知り合ふて居る人も、傍に來て居りますが、「マア〳〵待つた……危ない」ト、双方をなだめすかして、千代吉には何だか事情が分らぬまゝ、千代「何に分共に皆さま宜しくお頼み申します」ト、素直に挨拶を致して、仲裁は時の氏神さまであります、その盛家形へ引き取りました、此方の小金も、相手ない喧嘩は獨り出來ず、千代吉の惡口散々言ひ散して、之れも席へと立ち歸りました、跡は大浪の退いた樣で御座います、千代吉は前に

申し述べました通り、小政と小金の關係は夢にも知らぬ事であります、トンダ乱暴女に出會ひ思はぬ災難とあきらめて、我身も恥しひものでありますから、家形の女將には微塵咄しもせず、機嫌能く二階で化粧にかゝつて居りますと、席から千代吉を出しに來ました、往くお茶屋は何處と尋ねましたら、紀の國屋で御座います、

第十七席

紀の國屋の奥二階に、三味線は繼いだまゝに箱に立てかけてあります、燭臺の灯もドンヨりと暗く、客は少し眼を立て居るか、額口に青筋が二本ばかりも出て居よふかと言ふ、焦呑にコップに酌ぎながらガブリ〳〵と呑て居る、差向に座をめて居ります一人の藝妓、俯向ひて洋布にて涙を拭ふて居ります、此塲の体裁は水に油を交た樣であります、之れは九條の小政と藝妓千代吉であります、小政は故意と言葉を和げて、「マア能く物を積つても見るが好い、見す知らずの女に、大枚の金子を此辛ひ世の中に、何の目的もなしに貸す

奴があるものか、藝妓と言つても當世は兎角尻を賣るか智ひだ、南地にも多勢ある藝妓の中で、お前の樣に固ひ事を言つてる妓もあるまい、可厭と言ふ者無理にとは言はぬが、マアそんな理屈じやない、千代「ソリヤもう貴郎の仰しやるは、重々御最もでは御座いますが か、妾には言ふに言へない義理がございまして、情願此事ばかりは御免なすつて下さりませ、又お金の所は何とか工夫を致しまして、御返濟致しますから、何卒御慈悲で御座ります、九條の小政は藝妓に似合ぬ千代吉の堅固なる精神に、コリヤなか〳〵普通の口說方では、ウーンと言す事は六ケ敷て、急に手をかへて、ハアハ、、、と打笑ひ、小政「千代吉サン、何卒堪忍してくれ、コンナ年船をして今迄の樣に、淫らしい言を云ふたも、皆なお前の心を引くため、トサ、言へば何だか口說て、肱鉄銃を喰ふた所から、岡島清兵衛は負惜みで言ふ樣に聞へるが、實お前の合財を拾つた時、アノ妹から來て置つた手紙を見て、アヽ、世に稀なる義を蹈んでる姉妹もあるものだ、夫れが高等な教育を受けて居る家の娘と言ふとやなし、一人の妹は世に

も賤しい藝妓勤め、如何にも珍しい所の姉妹である、私もコンナ年齢をして、何時が何時までも、色里の酒に腸を染せて居るでもなかろ、モー色里へ足の蹈み込み終ひに、一つコンナ珍らしい妓に肩を入れてと、言はゝ好奇心から、ソットお前の合財に五拾圓入れて戻したら、案の條直に返しに來たばかりか、段々事情を言つて納めたら、ソンナラ證書をと言つたので、ホントにこんな稼業柄に似合ぬ妓と、實は存根お前の精神に惚れ込んだ、何でも世話をして見んものと、未だ疑ふじやないが、色に事よせ口說いて見たら、私の察し通り益々手堅い身の品行、感心しました、サアもふ安心するが好い、岡島も一己の男子だ、コー何も角も打ち明て咄すからは、及ばすながらお前の力にもなろふから、厄介な老爺の親類がふへたと思ふて下さい、千代「何のマア勿体ない、いろ〳〵とお世話になりました貴郎さま……、小政「爾ふ堅く出すに、碎げてゆわくり一杯呑むが好い夫れで私の赤心を見せる爲めに、マア斯ふして置く」ト、懐中より取出しましたる、以前千代吉より差入れたる五十圓の証文、傍の火鉢

にくべて一片の煙りとして了ひました、小政「斯ふして了へば、何も殘らぬと言ふもの、サア千代吉さん酌をしておくれヨ、千代「旦那樣何にも言ひません、有り難ふ御座ります、小政「有り難いも何もあるものかコーなりやお前と親類筋の私に、何の遠慮もあるものか、サア〳〵機嫌を直して、一杯呑むが好い、一つ乃公が酌いでやろ、ヤレ〳〵始めて笑ひ顔を見せて貰つた、千代「如何も濟ません、涙なんぞを見せまして、小政「モウ何も案じる事はないから、其時階下でバタ〳〵ガヤ〳〵と叫び聲が聞へて、二階へ上つて來た樣子に、此方の兩人は何事と手に持つ盃宙に、兩人顏を見合す所へ、當家の女將の聲として、女將「コレ小金サン、お前亂暴に吉さんと、一所に御酒は呑つて居なさるが、夫れには段々と深い事情のあること、マア氣を飲めてお聽きと言ふに、小金「マア女將さん捨て置いておくんなさい、その深い事情が妾の腑に落ちぬのですから、岡島さんに妾が聞きたい事があるのですヨ」ト、女將を突き退けて合の襖をガラリと開て、座をゝめて、小金「旦那……お樂しみです

子！、小政「何だ騒々しい、女に似合ぬ亂暴を働いて……、小金「ハイ亂暴者ですヨ……、夫れで愛嬌をつかされたんですから」ト千代吉を睨み付けて、小金「姐公……、千代吉さんとやら、お前さんはナカ〳〵藝妓さんとしては、呆れ返つた腕利だ子！、ヨウも妾の鼻を明しておくれた子！」ト、言れて千代吉は譯も分らずに呆れて居りますが、小金の顏見て吃驚り、千代「ヤアお前は先刻浴湯にて……、小金「活盗人……泥棒阿魔と言つたが、マー証據を押へられたら、グッとも言へはしよまい、千代「ア、これ何をお言ひだへ、妾は此岡島の旦那と、何も別段に……、小金「エ、怪しい事がないとお言ひのかへ、ソンナに辯解しても儘に見屆けてあるのだから、エ、もふ腹の立つ……斯ふしてくれる」ト、餘程手の早い女に違ひありません、其處に有合せる三味線振り揚げて、千代吉を打んとしますから、今まで無言つて見て居つた九條の小政は、小政「コレ小金、手前亂暴するにも程がある、ソリヤ何たる事をするのだ、コレ千代吉さん、お前が此場に居つては不可ぬから、サア早く彼方へおいで……」と、女將に自分の意を含せて、

千代吉を階下へ避けさせました、女將と火鉢を中に千代吉、千代「姐公如何したんです、女將「サアお前さんも大變吃驚りおしだつたろ、アノ小金さんは旦那の敵娼で……、千代「姐公夫れで思ひ當つた事があうまスヨ」ト、前刻風呂屋にての間違ひを物語りまして、千代「妾はサッパリと事情が分りませんなんだが、アノ小金さんが旦那の敵娼と聞いて始めて讀めました、姐公見ておくれヨ此小髮の疵を、女將「オヤ貴物の花顏に疵なぞ付けて、ホントに無茶をする妓だ子！、實アノ妓は別に流行る妓じやないから、今では岡島の旦那を一人便りにしてるから向見ずになつて了つたんだろ、マア旦那に免じてお前も堪忍しておくが好いわいナ、千代「ハイ……旦那は親切にいらつしやるから、アノ小金さんもヤキ〳〵するのですヨ、女將「千代吉さんが賞める所を見るも、只の鼠じやない、前刻にからの差向ひで、何ぞ約束したのじやないか、千代「阿呆らしい、旦那に限つてソンナ事を……、女將「無いとも言へぬ、旦那は大分目尻の下つてある方だから、千代「アンナ事を、旦那に聞へては惡いから、折柄席の男衆が合狀を持て來て、千代吉に

假令挨拶丈でも貸してくれと言ふて來ましたから、挨拶貰ひはある習慣なれば、女將は二階の小政に答へますと、小政「イッソ今日の所はだ〳〵咄したい事もあるが、ソレは又千代吉は歸らすがよかろ、未だ」女將「夫れは爾ふです、その方が奥方の御機嫌が取た後日の事とせう、女將「夫れは爾ふです、その方が奥方の御機嫌が取りよう御座ります、大体旦那が箸豆なから、コンナ事が起つたんですヨ、小政「違ひなしだが、千代吉の方は嫌味氣なしの交際だ、女將「何だか分りやせぬ、両方に花をかざして、田舎源氏の光氏さんも、在五中將業平さんも及ぶこつちやありません子！、日本國中の好男子の開山とは旦那の事、チン〳〵喧嘩の絶間がなくつて、却つて苦勞の種蒔きですヨ、小政「ナカ〳〵そんな旨い咄じやない、肱鐵砲の口よ、女將「旦那も旨く言つていらつしやる子」、其處で千代吉は歸す事になりました、千代「姐公さん……旦那にお目に掛つては、却つて都合も惡いかも知れませんから、お目に掛らず歸りますから、何卒貴女から宜しく……、女將「ア、好い樣に言ふておくし」ト、千代吉は歸り去りました、二階の奥座敷では、小政と小金が差向ひで、モウすつかり仲

直が出來たものと見へて、小政「ホントにお前は亂暴な女だ子！、小金「妾の亂暴なに愛相が盡きたと言ふじやなし、小政「何も愛相が盡きたと言ふじやなし、是れから少度慎むが能いと言ふ事だ、小金「ヘイ〳〵慎みますよ、乾度以後は……、だが子此間放座敷で差向ひになつて、ヒソ〳〵咄しのあつた後で、アノ妓に五十圓無理に上なすつたろ、だから妾や……お前さんが浮氣だから、仇し花に氣を移したと思ふて、小政「ソレで今夜暴れ込んだのか、小金「夫れでも現在亭主を外の女に取られて、無言つて居ては私の意氣地が立ちません、小政「アハ、、、、意氣地が立つの立ぬのと言ふても、別に取られたと言ふでもないに、小金「ソリヤまあ爾ふですが、ソレでも腹が立ちましたから、小政「今になつて少しや面目なかろ、小金「ソリヤ少度は……、小政「だから向後は慎めと言ふのだ、オヤ泣いて居るナ、慎めと云つたが氣に障つたか、小金「イーエ氣に障つたの何かと言たら勿体ない、余り妾が向不見だから、お前に愛相盡されはせぬかと、夫れで……、小政「泣いたのか、マア能いわイ、仲直りに此間の晩頼んでおつた五十圓、丁度夕景に四ッ橋の得

意先で受取つて來から、サアお前に遣るヨ、小金「何も濟みませんナ、貴郎に心配さして……、小政「心配さして氣の毒と思ふなら、今度から今夜の樣に亂暴はせぬ樣にしてくれ、一体見とむないから、小金「ハイ〳〵何にも市し樣はございません、小政「サア〳〵機嫌直つたら、今夜は私や宿に少し用事があるから、是れから歸るとしよ、小金「ソンナ素氣ない事言ずに、今夜泊つてお在よ、小政「イヤ商賣用が肝心ダ、吃度明日の晩に來るから、小金「吃度ですよ、間違ちや横堀の宿へ連れ込みますから、小政「その暴れ込にや閉口ダ」ト、小政は帳場で車で歸りました、小金は後見送つて舌ペロリ、背後から女將は、女將「小金さん……、先刻にからレコが待つて居るよ」ト、拇指を門して見せる、小金「爾ふ……何處に、女將「離座敷だから、早く往つてお上ヨ、小金「チユーッ……」ト、小金は鼠暗しますが、チョンと水車でお老居なれば文廻しになる所でございます、『浮草や今日は向ふの岸に咲き』、愛讀諸君……此句の眞意のある所を、お考へを願ひたいものでございます、

第十小席

紀の國家の放座敷の障子に、差し向ひましたる男女の影法師、女は言はずと知れた增井廓の娼妓小金で御座いますが、男は是れぞ華族の二郎で御座います、二郎は懷中の温まりました所より、南地に泳き出し、似た者夫婦のたとへにも洩れず、小金の野太き魂情に二郎が打ち込めば、小金も二郎の喰へぬ氣性に血道を揚げ、今は夫婦の如く憎からぬ中で御座います、鳥渡小鉢物で水入らずの小酒盛、男は黑文字を嚙みながら、二郎「マア手前一人で引切に遣りな、乃公前刻にから獨酌で、三四本倒して居るんだから、小金「デモ妾の盞を一遍受けておくれヨ、二郎「マア好いやナ、乃公が酌をしてやるから……、小金「ジヤ妾の酒杯は受られないのかネー、二郎「いろんな事を云ふねへ、ジヤ受よふ、小金「マア積つても御覽ヨ、お前の傍でコンナに氣儘をしようと思やこそ、隨分辛い馬鹿らしい狂言も打つて居るんだから子ーチットは察しておくれ、二郎「フーン察してるヨ、小金「オヤ何だ子ー巻いだりして……、何か氣に入らぬ事があるのかへ、二郎「イヤそんな言は無へが、前刻にからお前に尋ねようと思ふて居たが……、アノ前刻茲

から送り出した客が、横堀とかお宿を取つて居る、岡嶋と言ふ紀州の商人か、小金「爾ふだヨあの老爺が……、お前夫れを尋ねるからは、チンチン起して居るんじやないか、二郎「ナーニ乃公もチットは苦勞をして居るわへ、ソンナ淋しい心は持ねへが、彼奴が活きて居ては、安穩に……、小金「お前アノ老爺知つて居るんかネへ、二郎「ナーニ知らないんだ、如何も……、小金「訝しいネへ、お前は今夜如何かして居るネへ、マア熱い酒でもお呑りナ、ドーレお酌を……、オヤ皆無だよ、自烈体……今に熱酒が來るから」、ポン〳〵と手を拍ちますと、蛍所で仲居の聲で、仲居「ハアーイ……」、程なく燗も參りましたから、二郎が前の猪口に酌ぎながら、小金「夫れに子ーお前が言ふておつた金ネー二郎「ブーンアノ金、お前に心配させて濟ない事情だが、頼むヨ、小金「サア……此處に」ト、九條の小政から取つた五十圓の金を前に出すと、二郎「ヤア如何も濟ぬ〳〵、小金「何も女房の妾に濟ぬと言ふ事はないわいな、お前に此金が上げたさの前刻の騒動、二郎「夫れじゃ岡嶋から取つたのか、小金「爾ふヨ……、岡嶋の老爺から取つて、お前の悦ぶ

顔が見たさだからネー、エ、憎らしい、二郎「ア、痛イ……、小金「我慢なさいナ、男らしくない、」却説も九條の小政と華族の二郎とは、餘程前世は色敵の間柄であつたに違ひありません、夫れは偖て置いて此方の尻無川へ入水なしたるお菊の話に移りますが、却説もお菊は覺悟の上にて、ザンブと尻無の深水へ飛び込みましたる所を、生首のお藤に助命けられまして、段々身の上を物語りました、お藤は生れ得て男を馬鹿にしてかゝつて居る毒婦でありますから、何な男でも手鞠に取れるものと、高をくゝつて居りましたに、神逸一郎には其正面から二遍まで、首尾能く失敗いたしましたが、如何にも心惜く思つて居ました内に、彼の雪中にて一郎は大倉清造の爲に、短銃で以て打れ生死の程も知れませんから、一層心に懸つて、時折には斯る毒婦ながら思ひ出して戀ぐ事もありました、斯して見ると其の愛情、眞の戀と言ふものは別段のものであります、所へお菊から神逸一郎の消息を聞まして、心中大に慌んで居りましたが、ソンナ色は少しも顔に出さず、一層お菊を大切にいたわりまして、翌朝自分に

は十分に化粧して、お菊を伴ひ三軒家の神逸一郎を訪ね參り、色慾と言ふ事は少度にも口に出さず、只親切でかしに勞り、又た五拾圓の金を土産として差出しました、が、一郎に於て、折角女房の千代が才覺して呉れた金を、四ッ橋に於て悉お菊が拘り盗られ、お菊は夫れが爲に入水なしたる驚き、自分も現に其金が無い時は、一身上の浮沈に關する處であります、元より義堅い一郎の事でありますから、「一郎」如何も妹の一命をお救ひ下されし大恩ある上に、又た此大金を頂戴致しては相濟みません、情願之れ計りは頂戴致しても同前で御座れは、お納めなされて下さいませ、お藤「オホ、、、、、お固い事は以前に御髮りでは御座いませんナ、此金は此場合……なれば、何だか髮に覺召しませうが、之れはホンノお土産代り、賊に失禮で御座いますが、お菊さんへ何卒お上げ下さいますやう、お菊さんも昨夜の件に就て、貴郎へ濟ぬと死をも決しられた次第……」、オホ、、、、、マア〳〵お菊さんへ何か買つて上げて下さいまし」ト、口上手のお藤に、一郎は辭む術なく遂に頂戴致し置きますと納めました

お藤は心中にほくそえみたりと、いろ〳〵慾の巧みを致して居りまに、折柄表の格子を開けて、「お母サン今日は……」ト、這入つて來たはお千代の千代吉であります、母のおくには夫れと見るより、お國「オヽお千代サン……、何卒お這入……、貴女にいろ〳〵お咄し申し度ひ事、實に大騒動が出來まして子ー千代「オヤ、爾ふ……シタガお客さんが……」、お國「お客さんがありますが、彼の方に今度はいろ〳〵お世話になつてネー、夫で今おいで下さつたので御座います、マア貴女も御逢ひ下さつて、お禮を仰しやつて下さいまし、千代「ハア爾ふで御座いますか」ト、千代吉は言つたものゝ、お菊の身の上に斯る珍事の起りあることは露知らぬから、大騒動とは如何な事かと、先胸を慕かして居ります、夫れにお世話になつたと言ふ婦人は、何處の誰れで何言ふ身分のお方であろ、偖て何と言ふて挨拶したものであろか、妾しは一郎が妻……、此派手な風をして、如何しても遊妓と言ふ事は誰れの眼からでも見透されるから、妻に違ひはないが、ア、妾とは言ひにくし、と云ふて妹とも言へずと、小さい胸に吐嗟の間に思案

決しませんに、母、おくにの背後について、お藤の前にと出て、ドンナお方と顔見て吃驚り、千代「ヤアッ貴女は申縁姉さん……、お藤「オヤッ矢車さんじやありませんか」、コレは〳〵と計りに、兩女は不思議の面會に暫し言葉もありませなんだ、お藤は胸に此矢車こそ、自分の戀の敵であると早や嫉妬の炎の燃るを、グッと飲み込む涯液で押へながら、お藤「昨晩お菊さんから承りました、お姉さんと仰しやつたは此矢車さんでありますか、お菊「ハイ左樣で御座います、お藤「ソンナヲ神邊さんの奥さんに……、お菊「ハイ……、お藤「如何も不思議の御縁ですこ、一郎「アハ、、、、家内と言ふも、ホン、ノ名ばかり、之れも思はぬ事が縁となり、今にコンナ苦勞をさせておりまする、お藤「夫れじや未だ何處かで出て入つしやりますノ、千代「ハイお恥かしながら南地で……、お藤「夫れも亭主の爲と言ふんであります、苦勞の中にも又た樂しみのあるもので御座ります、併し金瓶樓に居りました時分に岸野の御前がこの神邊さんを、嫉がる者を無理無体に連れてお出なされ、酒で殺して貴女に初會を附けたのでありましたネ、其盤

る朝固い書生さんで困りましたと言つた、お方とお方が、夫婦になるとは、一神邊さん戀と言ふものは別物でございますナ、一郎「イヤ夫れを言れますと、恥ぢ入りますが、前にも言ふ通り、不思議な縁で斯ふなつたので御座います」ト、お菊が金を掏られた事、お藤に一命を助けられた事をお千代に咄します、お千代も一時は驚き、又た無事であつたを悦び、お藤に厚く禮を述べ、お藤も腹に飼を隠しながら、昔し咄しに日も早や暮れんと致しますから、お藤お千代は暇乞ひして各々宅へ歸りました、偖て其翌朝の市内の評判に、俄酷な る強盗殺害事件があります、丁度お菊が入水なしたる夜の事であります、南區清堀に質商にて、大黒屋とは通名であります、石川藤兵衛と申すは町民の金滿家で御座いました、夜は更け渡り遠くに犬が吠る聲も、身に浸みて物凄く感じられます折柄、何處から忍び込みましたものですか、覆面なしたる一人の賊が、盗み足にて店の間へ來る、當家の手代と小僧の二人枕を並べ寝て居りましたが、賊「コラ起ろふ……、手代「ヘイ……、且那お早ふ御座います、賊「寝惚げる

ネー、聲を立ると之れだゾ……」ト、拔身を眼の前に突き付けると、手代「ヘ、、、、、、」ト震へて居る奴を、傍に有合した褌でグル〳〵卷にして、傍の柱にくゝし猿轡をはめて了ひました、小僧は未だ能く寐て居る奴を、グッと猿轡をはめますと、小僧「番頭さん何しなさる……」……ムニャ〳〵〳〵」、寐惚て居る奴をこれも柱にくゝし付けまして スタ〳〵と其儘奥へ這入つて參りました、間の襖紙を音さゝぬよう に、スーッと明けて見ますと、主人藤兵衛は東枕に一人寐て居りま す、其頃に妻と島田髷の娘とが枕を並べて臥つて居る、此娘は藤兵 衛の秘藏娘であります、當年十七歲清掘の花と言れる、大變美貌 で御座います、賊は主人を搖り起し、賊「オイ起き子イ〳〵、藤兵「アッ ……ハテ」、段太刀を目先へ突き付け、賊「聲を立ちや生命が無へゾ……」 藤兵「ハイ……」、賊「少し無心があつて來たのだ、有金をスックリ 出して了ひネへ、藤兵「ヘイ折惡ふ今日銀行へ入れましたので、金と言 ふでは……」、賊「何を愚圖々々吐かすのだ、此家に少しでも金が無へ と言ふ事があるかへ、躊躇さちすと生命から貰つて往くゾ、藤兵「ヘ、、

、、、何卒生命だけはお救けを……」、藤兵衛は心中に思ひますに、 儘かな事で我慢をしちや、詰らぬ目に遇ふからと考へまして、彼ひ ながら手箱筒の抽斗から取出しましたは、紙幣銀貨取り交まして、 藤兵「是れ丈より唯今宅にはありませんから、何卒御辛抱なしつて…… 夫れで足りませねば、明日お光來下さいましたら、銀行から 取り出しまして差上げます、賊「馬鹿言へ盜賊が晝日中に越られるも のかい、仕方がねへ無いと言へ、是丈で歸つてやらア、藤兵「ヘイ有難 ふ御座います、金を盜れて禮言ふ奴もありませうまい、

第十九席

女房や娘は眼を覺して居るんですが、聲立たら打切れますから怖し ひで、震へながらも寐た振をして居るんです、賊は懷中から財布を 取り出しました、其時に財布の中から名刺か一枚飛び散りましたが 賊はソンナ事は心注ず、彼の金子を入れまして、賊「夜中に邪魔だつ たネー、又た來るから精々貯ておいてくれ、藤兵「ヘイ爾ふ度々お光來

下さつては大變迷惑を致しますから、賊「エ、巫山戯るナ……」、賊は立ち去らんとして不圖と娘の美しいが目に付きました、賊は餘程好色の奴と見へまして、思わず恍惚として其疲顔を見惚れて居ります賊「オイ、此娘は手前がこさへたのか、藤兵「ヘイ夜業翻工で御座います賊「ナカ〳〵上玉だ……」、此時までは藤兵衛も眺ねつて、萬一手疵でも負されたら世の笑ひ物とジーッと堪忍をして温顔になつて居つたが、燒野の雉子夜の鶴、子を思わざる親はありませぬから、餘りに此賊が奴の容貌を褒めて、見惚て居る鹽梅、コンナ乱暴な奴だから、何な振舞に及ばぬとも言へない、今大事な嫁入前の箱入娘、身でも汚されては一生の疵と……、コト考へ出してはモウ我慢が出來なくなりまして、賊がアヽ美い娘だと見惚れて居る隙に、物をも言わずに背後からムッと組み付きました、賊は不意に驚いたが、余程膽力のすわつた奴と見へて、体を捻りますと藤兵衛がタヂ〳〵と前へ反る所を、一刀振り揚げて左りの肩口から乳の下まで、スパリと切り下げました、藤兵衛は其

儘どうと倒れた樣子に、女房は、女房「アレ、人……」ト、刎ね起きて逃げんとするを、殺とまでも言はず歸す刀で、右の肩口から脇中へかけて、八寸ばかり切り下ました、何か以て堪るべきアッと、悲鳴を上げて、其場にどうと倒れました、無「アレ……」と逃げんとする娘を後から猿臂を延して腦を掴み、ズル〳〵と引倒し、其處に有合した る手拭にて猿轡、無慘や可憐の少女は、兇惡なる賊が爲めに、終に仰向になりましたる儘……、無慘や乳房のあたりブッ下りと突き立られ、「ワッ……」ト叫けびたるが此世の名殘、其儘苦の花は散り果ました、賊は太刀の血汐を拭ふて、賊「アヽ、飛んでもねへ殺生をした併し七十五日の生命延びた」ト、臺所まで參りますと、段梯子口へガラ〳〵と落て來た者があります、ハッと賊は慄き飛しさり、太刀をキッと構へて能く見ると、下婢でがな御座いましよ、チャンと座つて着物の合目をしかと押へて、目を白黑とさせて居ります、之れは前刻からの兇行を二階口から見て、恐しさに腰を抜して了つて逃られず、モヂ〳〵して居る内に踏み外して、コロ〳〵と轉たものであ

りませう、」賊「膽を潰させやがつた、人の降るやうな天氣じやねへにソンナ天氣があつて堪りません、賊は此奴もと刀の柄で、ウンと下婢の肩口へ脊打を喰しますと、斬られたと思つて、下女「アッ……」ト其儘氣絶いたしました、其處で賊は充分に身仕度致して、ソロ〳〵と出掛け、表戸をガラリと明けて、四方をキット見廻し、賊「大きに遊ノなつてお氣の毒で御座いました、小僧さん用心を大事にして下さいヨ、何かがりを確りと……」ト、猶言して其儘驅ず急ず、ブラ〳〵と立去りました、偖て三軒家の神遊の宅にては、お藤お千代が[illegible]りました後に、一郎は机に寄つて勉強いたして居ります、盗所にては母のおくにとお菊が差向ひにて、お國「モウ〳〵今度から假令如何ことがありましても、死ぬるなんぞと言ふ狹いお心は出しては下さりますナ、お前さんは父御さま伊谷辨之助様から、お預り申し育てたる身体、貧苦の中から我子を捨てまで……、アヽモウ〳〵今度から、決してアンナ御心を出して下さりますな、お菊「ハイ、請願お母さん御堪忍なされて下さりませ、以後はモウ御心配はかけませんから、お國「サア〳〵涙などは不吉の元、御機嫌直して下さりませ」ト、おくには何がなお菊の氣をまぎらさんと、お國「お菊さんへ、今日お長家のお方の咄しに、何でも昨夜清堀とやらで、質屋さんへ賊が忍び込み、お金を二百圓とか盗つた上に、御亭主と家内とを斬り殺して、十七になる娘さんをば、服サン〳〵に慰んだ上で、是れも又た切り殺して逃ましたと言ふ事、ソンナ事新聞に載つて居りましたか、お菊「サア、妾は未だ朝から新聞は見ませんが、昨夕の事でありますから、未だ明日の新聞でなけりや載ません、お國「成程、世にも惨らしい奴もあるものでご御座いますナ」ト、親娘物語りの折しも表に誰か人の來た様子でありますから、おくには釣洋燈の眞を上ながら、お國「何誰で御座いますッ……」、表には素直らしい聲で、○「ハイ鳥渡お尋ね申しますが、神遊一郎さんのお宅は此方で御座いますか、お國「神遊は手前で御座います、何の御用でありますか、マアお這入なさいませ、○「ジャ免下さいまし」ト、格子戸明けて這入つて來た男は、書生でなし職人でもなし職人でもないと言ふ風体にて、眼付の凄い男、○「一郎サンは

御宅でげすか、チヨッと御面會を願ひたいんで……、お國「左樣でございますか、丁度宅に居られますが、貴郎の御姓名は……、○「イヤお目に掛れば御存じですから」、奥の間で勉强して居つた一郎は、此大阪へ引越してから、別に知人と言ふて無い身であるから、又た訪ねて來る者もないに、一体誰であるだろと、不審ながら起つて來て、

一郎「ハイ何誰ですか、僕は神邊一郎であります、○「ア、貴君が神邊一郎さんと申すんですか、僕は警察の刑事巡査です」ト、一葉の名刺を出して、巡査「貴君に少しお尋ねしたい事があります、今から拘引しますから」、拘引する……警察へ、何の事件か知りませ色樣るまでも黙いて、一郎「拘引する……事の不意に、流石沈着なる一郎も顔んが、僕は拘引されると言ふ樣な惡事をなしたる覺あります、神邊巡査「ソンナ事は如何でも宜しい、聖なる神邊一郎の精神であります、僕は長官の命令に依て拘引に來のでありますから陳ずる事があれば署にてなさい」ト、ツカ〳〵と上るなり有無を言さず、一郎に縄をかけました、おくにとお菊は夢に夢見る心地であります、お國「コリヤ余

りな……、お菊「兄さんに限つて惡事をなさるやうな方ではありません巡査「イヤうんな事は如何でもよろしい、萬一身に覺へのない事なれば、直に免されますから、サア往なさい、今まで無言に居つた一郎は、泣くゞゝされ居る親妹に向ひ、一郎「僕の精神には一点の曇なき事は、神も照覽ある所であります、警察へ出頭して辯解をして、青天白日の身となり直ぐに歸りますから、案じることなく待て居て下さい」ト、言葉柔和しく慰めながら、刑事巡査を冷かに見て、一郎「サアお供致しませうか」ト、靜々と拘引されて往きますが、入口を出る時に、背後に「親娘がワッと泣く聲は、一郎が耳には何と聽ましたろかホロリと翻す丈夫が一滴は、一鵬より絞り出したる血でありませう、此處は警察署の刑事部屋であります、一人の警部は八字の髯を捻りながら、警部「清堀の惨殺事件に就て、兇行の現場に落てあつた名刺に依つて、神邊一郎と見込をつけ、拘引の上取調べて見たが、如何思ふても斯る兇惡極る犯罪をなしたる人物とは見へん」ト言ふと一郎を拘引に往つたる刑事巡査甲は、刑甲「僕が拘引の有樣は具申しました通

りで、犯人が余り沈着過きます、大色まで變じて慄いたです、併し何も犯人としては疑しい点もないやうです、曹部「現場に名刺が落ちて居つたから、兇行地の警察から照會があつて、直ぐに捕縛したものであるが、他に兇行者がある筈ひない、刑乙「僕の見込も必らず、犯罪者は他にあると思ふのです、犯人拘引後早速家宅捜索したのですが、何一点証據品として引揚るものはない始末です、曹部「フーン、彼れ丈の惨酷を極めて、獣行を慾にする奴だから、何でも他警察に卒先して、犯人を當警察にて逮捕した いものだから、此件に就ては二氏を專任とし置くから、十分盡力して貰ひたいのだ、其處で嫌疑人として拘引なした神邊一郎は、兇行地の署からも依頼して來た人物であるから、早速其署へ証送する 如何も索線がないには困りますが、天何ぞ期る兇惡なる徒を免して置く筈はありませんから、刑乙「僕等二人にて十分に探偵を遂げ、遅からず逮捕してお目にかけませう、曹部「イヤ君等に於て爾ふ熱心にやつてくれると、大いに僕も

安堵するから……オヤもふ十時だ、僕は退廳するから、何分頼む、刑甲「承知しました、折柄時計がボーン〳〵と十時を告して居ります る、

第二十席

却説神邊一郎が拘引なつたる事を、早速に南地のお千代の千代吉に報せますと、お千代も大に驚きて、宙を飛んで駆て參り、おくに、お菊と三人が額を集めて、いろ〳〵と相談をして見たが、三人寄れば文殊の智惠どころでなく、出るものは唯涙ばかりであります、嘆きの内にもお千代は、千代「コンナに三人が泣て計り居たとて、仕方のない事であります、幸ひ兄の留太郎が日の出造船會社に、今日は來て居る筈であります、是れから使を遣り呼び寄せて、何彼の相談相手にもなつて貰ふじやありませんか」ト、夫れより會社へ使を走しますと、岩崎留太郎も大いに驚き、早速人力車で駆け付け來り、三人相談對手となり、先々慰さめて置き、何は兎もあれ警察へ

往て、拘引後の樣子を聞いてくると、直ぐに警察へ行き程なくつて來て、留太「刑事の噂では現行地の警察へ護送になり、一時監獄へ廻つたと言ふことだから、今日は時刻もないけれど、明朝監獄へ往き何か差當り差入物もして上ねばならず、又萬一に面會でも免すやうなれば、一週逢て來なさるが宜しい、萬事は乃公が付いて居りますから、何もお案じなさるあらません、何か間違ひでありませうから、日なちす青天白日のお身になられます、夫れまでにキナ〳〵思つて、三人の内病氣でも出ては大變ですから、氣を大きく持つておいでなさい」ト、留太郎が慰め力を付けくれますから、夫れを便りに三人は致して居ります、却説明る日になりますと、お千代、お類、留太郎の三人は、未決監に入れられて居ります、神邊一郎に差入又は面會なさんと、人力車を飛して參りました、監獄と言へば此世の地獄であります、其地獄に居ります亡者と、取次をしてくれます店が、此邊で來ますと幾軒もあります、留太郎は二人を連れて這入りましたのは、區助と屋號を目出度くつけまして、餘り目出度ない

人々の便利を計る店であります、傍の札の上には、類聚法規、日本六法全書、民事刑事訴訟法などゝ、書籍の脊に金文字で銘が入つてあります、勿体らしく積みかさねて、地獄の書記と言ふ面付で筆を持つて控へて居る男がある、コリヤ差入の手續、面會出願などの代書する人間であります、其他に當家では、辯護士の紹介、地方控訴の旅宿などを兼て居つて、地獄の亡者と婆婆の人間との連絡には至極便利な取り次ぎ屋で御座います、三人の姿を見ると、當家の下嬢が座蒲團火鉢茶などを持て來ます、留太「お前さん等は此家に暫らく待つて居るが好い、乃公は未決の受付へ往つて、一郎さんの樣子を聞いて來るから」ト、言ひ置いて出て往きます、待間程なく留太郎は歸つて來て、留太「イヤ安心なさい、一郎さんは無事に未決監に入つしやるから、直に面會の願書を認めて貰つたから差出すが好い、其上で又た差入の手續をするから」ト、二人を急き立て監獄の門を這入りました、此處は何となく別世界の樣な心地がせられます、留太郎は願書を受付へ差出しますと、暫く控處で待つて居れ……」ト御役人の

お詫葉に、「ハイ……」ト三人は此方に控へて居る内、間もなく呼び込みになりました、三人は今は心も空にて、面會處へ通りました、看守、押丁の御役人にて、四邊嚴重に警護をせられて居ります、夫れが猶更三人が胸には、涙の湧く種でありました、看守は三尺許りの小窓を開きました、三人はその前の止り木に腰つて居ります、看守長は嚴かに、看守「面會は唯今許すが、願書に認めた要件以外の事を言つては不可ぬぞ、又た時間に制限があれば、可成無駄な事を言つておつてはならぬゾ、「ハイ……」、と三人は答へて前の窓を覗きます、無慘神邊一郎はションボリと此方を見詰めて居ります、先お千代と、一郎「オヽお千代か……、お菊も來て代は口を開いた、千代「一郎サン……、てくれたか、千代「ハイ……ハア……」ト、兩女は泣落の姿で御座います、お千代は我を忘れて、一郎に縋り付んといたしましたが、氣が付けば前は止り木であります、背後にはお役人がジーッと見詰めて居られます、此時兩女の眼には看守、押丁の御役人も、丁度地獄の赤鬼青鬼にも見へましたろ、御職掌柄と言ふことは忘れて了つて居りま

す、我が子の惡事は何とも思はぬが、縄取が知つて、慢く思はれると は、誠に親身の情合であります、此時には威極つて語をなさずで、何の爲に面會に來たかと言ふ事は忘れて了つて居ります、留太郎は斯ては果てと思つて、留太「一郎サン……、飛んだ此度の御災難にて、乃公は聞いて吃驚り致しやした、然し元より心に疚りの無いお前さんなれば、直ぐに嫌疑も晴れて青天白日の御身になられることは受合つて置きますが……、又た留守宅の御袋なり此二人は、及ばずながら乃公が付いて居やすから、決してお案じなさいますナ、又た此事は寃罪であると思つて居ますが、何を言つても嫌疑のかゝつてあるんですから、誰か辯護士を依頼なくてはなるまいと、夫れで今日は連れ立て面會を願つた樣な次第でありますから、誰か貴夫お心當りの辯護士はありますか、一郎「何から何まで御心配をかけまして……何分留守宅は宜しくお世話を願ひます、が、辯護士は御頼み下さるには及びません、僕も法律には素養のある身ですから、十分やつて見る精神なれば、おッ母にも心配をせぬやうに仰しやつて下さいま

し、近日には嫌疑を晴して目出度く歸宅を致しますから、お太「夫れを力に待つて居ります、就ては差入物はして貰きますから、一郎「如何も夫れは有難ふ御座います、如何か萬事よろしく願ひます、僕の精神はコンナ頓坐を受けると、益々堅固になつて來ますから御安心下さい」ト、一郎は活潑に言ひ放しました、其時までシク〳〵泣いて居つたお千代お菊は、顔を上げて何か言んとします其時、看守長は俄かに差止めて、看守「オイもふ時間が來たから、止を得ず差止めるから、話す事は澤山あるだろふが、又願つて出るが好いから……、お菊「夫れでもモウ少し……、看守「ア、不可ない〳〵、お上の規則だから……、お太「サア〳〵泣いてたてもウ駄方がない、且那方のお出なさる前だ、少度は慎しむが可い、サア退ろ……」、此時早や一郎の顔を見せて居つた窓は閉鎖されて了ひましたから、止むを得ず三人は面會所を立ち出で、夫れより福助に歸り、差入の手續萬端を依頼して、三軒家へ歸りましたが、二女は奥の間へ這入るなり、今まで人前で泣すに居つた溜涙を、堪へ兼ねてワッと一時に泣き立てました、實道理ある

事で御座います、却説話頭はお藤等の身の上に及しますが、毒婦お藤は義理の柵にかけて、神邊一郎に對する懸の初一念を遂げんものと、歸宅後いろ〳〵魂丹を碎いて居りますが、正を邪道にて打碎く事はナカ〳〵出來ぬことであつて、手練手管に卒業してゐる女でも手の付け所なく困ビ果て居りました、如何してアノ矢車と夫婦になつたのであろふか、アノ矢車が付いて居つては、此方の望みは猶更遂げ難い、ア、何としたら好ろふナア……」ト、千々に心を碎き居る所へ、ノツソリと歸へて來たは華族の二郎で御座います、朝から顔色をホンノリとさせて、喫へ楊枝の懐中手、お藤は尻目にて冷かに見て、お藤「朝から御機嫌だネー」、二郎は無言て居る、お藤「向ひ酒をお爛け申しませうか、二郎「ト言れちや痛み入るネー、お藤「マア別に痛み入らなくても可いわナ、今日は東風が烈しかつたと見へるネー、二郎「ウフー……マア可いわナ、乃公が惡いんだから、斯の通りに謝罪るから、今日歸つて來たは手前に相談しよと思つてサ」、お藤は男の素直なるに怒りもならず、お藤「何だネー、お前が相談とは何れ碌な事じや

あるゆへ、二郎「爾ふ無下に言ふたものじや無い、實昨夕恐ろしい奴を見付て……、お藤「ナーニ恐しい奴て……誰だべ、森野にでも逢つたのか、二郎「違つてるヨ、森野は別に怖れる事はないが、死んで居るだろと思つて居つた、九條の小政を見付たのだ、お藤「アーン未だ彼奴活て居るかへ、シテお前さん見付つたか、二郎「イヤ小政は知らねへのだ、實は新ふだ……、乃公が呼んでる女は增井席の小金と言ふのだ、お藤「オヤ〳〵朝から御機嫌で、お自惚の頂戴とは恐れ入る子ー、二郎「マア茶にせずと聞ねへヨ」ト、九條の小政が紀州の商人岡崎清兵衛と名乘つて、南地の紀の國屋を宿坊にして、小金を呼んで遊んで居るを、隣からソット見た事を咄し、二郎「如何も彼奴が當地でサヨ〳〵さらすとあんまり安心して此方も居られないからナ、お藤「そうだナ頻閉つて不可ねへから、何處で殺害して了つたら可いじやないか、二郎「夫れも爾ふだが、何程彼方が老輩でも、そう安くは生命をくれないから子ー お藤「何だネー男らしくねへこつたナ、アンナ老輩の一匹半匹、盃を捨るより易いじやないか、背後からドーンと一發やつて了つたら、一

思ひだネー、二郎「マアそりや爾ふだ、お藤「一ツお前骨を折ておくれヨ、諾、何とか工夫をして見るヨ、オットお前に土産があるのだ、お藤「何だネー、コリヤ五十圓、何處で仕事をおしだつたヨ、二郎「夫れが最と面白いのだ、今言つた增井席の小金の女郎が、小政の野郎を舌先にかけて奪取つたを、右から左へ又た乃公が小遣に取つて來たのだ お藤「爾ふかへ、彼奴とお前は餘程色敵だ子ー、何せアンナ老輩は誰も好ないから、二郎「何の角のと可愛と言つて抱て寢た辭に、今更留てくれ、お藤「オヤ昔語で嫉妬か、併しお前に閉ひたい事があるが、金瓶樓に往た時分に矢車と言ふ妓があつたろ、二郎「フーンあつた、手前と違つて生意氣でなくつて柔和しい妓だつた、お藤「人を馬鹿にしてるヨマア好いが、其妓が當地で藝妓を稼いで居るに、昨日思はずも出遇つたのだ、二郎「フーン……、お藤「實はアノ妓に遇ては、岸野の一件なんかスツクリ知られて居るから、如何にも謀んで居る仕事の邪魔になるンだ、其處でお前に殺害して貰ふと思つてるんだ、二郎「ソンナに邪魔になる阿魔なら、高の知れた女一匹片付るに仔細はねへが、今何

處から藝妓になつて居るか、手前知つて居るかい、お藤「ソリヤちやん と聞いてあるんだ、南地で西川席と言ふがあるか、二郎「フーンある、 自分美い妓ばかりを抱へて居る席だ、お藤「ソノ西川から千代吉と言ふ 名で出て居るそうだ、二郎「ナーニ西川席の千代吉……、フーン不思議 だネー、何だか見たことのあるやうな面だと思つて居たのだ、お藤「お 前、千代吉を知つて居るか、二郎「別に乃公が聘したと言ふ譚じやないが 今言つた小政が執心な藝妓とは、千代吉の事だヨ、お藤「オヤ不思議だ ネー」、借てもお藤は千代吉があつては、自分が戀の强敵であると考 へました所から、二郎には有る事無い事を物語り、千代吉が當地に 居つては、萬事仕事の妨害になるから、九條の小政と賭共に殺害し て了つて、後難のないやうにと、二郎は惡徒ながらもお藤が爲には 左右にせらるゝ男であります、夫れより兩人を片付んと、既あ らばと狙つて居りました、實に不便なるは藝妓の千代吉であります

第二十一席

却説本編九條の小政を讀みする卷頭に、明治の今日にはチト不似 合でありましたが、お菊が赤手拭の稲荷社の片傍にて、何者とも知 れませぬが、既に無体の所業に及ばんと致したる所にて、怪しの鬼 火が燃して、然もその陰火の中にアリ〳〵と怪しの影を認めました 事を伺つて置きましたが、賭君は此幽靈話は立消になつて居るんじ やないかと、御催促でありますから、いよ〳〵本編の結局と共に、 幽靈の怪体を顯してお聞に入れますから、暫時の御辛抱を願ひます 實に不幸なる女は神逸一郎が妻お千代、即ち西川席藝妓千代吉でご ざいます、便りに思つて居つた夫一郎は、冤罪であると言ふことは 自分等に於ては十分に見極は付けては居りますが、嚴判の嫌疑は一 日二日と經ちましても晴れません、苦界の勤の儘ならぬ身を持ちま して、日々三軒家へ訪れますと、母のおくにとお菊が兩の袂に縋り ました、如何しよ〳〵と泣れますには、身も世もあられぬ切なさも 自分から泣てはどジット辛抱して、叱るがやうに言ふて勢をつけて 小伺の身体の悲しさに、家形に歸ると直ぐお座敷であります、白粉

で泣顔を粧ひ、血を吐く思ひで紅をつけて、男衆に送られて座敷に出ますと、お客は此方の氣も知らず飲め唄への難題、腹で泣いて笑顔を作るとは、丸で市松人形のやうであります、只此場合の方竹と言ふは兄の留太郎一人で御座います、折しも梅屋から出しに來たものでありますから、屋形の主將の顔色見ては、否と言ふ事も得言ずして送られて往きますと、お客は誰だろと親明けて、千代「今晩……」ト顔見て、千代「オヤ兄さんでしたか、留太「ハア……マア通入るが好い、今入た引掛て二三杯遣りな、千代「ハイ有難ふ……、留太「實乃公は家形へ往ふかと思つたんだが、何だか乃公が尋ねて往くと、婆々めが怖い面さらすが邪に障るから、梅屋から呼びにやれば公方だ、ソコデ乃公と言ずに呼びに往つて貰つたんだ、千代「爾ふでしたか、實此頃お座敷と聞くと、何だか地獄へでも往くやうな氣持でいやで〳〵ならない所へ、お座敷と言ふんで、嫌だと言へば女將に怖しい眼付で睨れるも嫌だしと思つて來たら兄さんでしたから、コンナ嬉しい事はありません、留太「爾ふだろ、有理の事だ、モウ暫らく辛抱してくれ、實は

伊谷の旦那にも手前の事を打明け噂して、其内に折を見て三百か五百程無心言つて、手前の身体を楽にさせなくッちや、死んだお袋に如何も濟ないから、千代「兄さん何卒御心配して下さひますな、此上お前さんに心配させては、妾が切なくつて堪りませんから、留太「ナーニ乃公の方が辛ひんだ、手前をコンナ身分にしたも乃公が悪いんだからナ、併しソンナ事はマア止にして……監獄の方ネー、千代「ハア夫れもネー、今日も女將が怖い顔して責つたが、エ、何となろとも能よと、見舞に往つて來ましたが子！、お母サンとお菊さんが、両方から泣き付いてネー、妾も泣きに去んで得泣ず、却つて叱る樣に言ふて今が先歸つて來た所で御座います、留太「フーン爾ふか、乃公も藝官衆に馴染もあるものだから、研究をして所存も聞き合して見たが、お上の見込みでは、如何にも一郎の所業でないやうに思れるが、兇行現場に落ちてあつたは、一郎さんの名刺じやないか、その外に何も索線と言つては皆無の樣子であるから、如何しても神逃さんは獄疑が晴れ難いんだ、今も言つた乃公の知つて居る藝官の見込では、

他に必らず犯罪人があるに相違ないから、何でも自分に取捕へて手柄にせんと、大變力身んで居られたが、此頃子なら近々に青天白日の身体にもなれよ、マア心配して此上にもお前等が患つてくれては大變だから、明日にでも三軒家へ往つたら、案じなさらぬやうに手前から言つて置てくれ、乃公も一遍見舞て上げたいと思ふが、諸負の方が日も切迫しておるし、旁々悲しくつて困つておるから、夫れも一所に宜い樣に言つて置てくれ、千代「ハイ畏りました、ホントニ早く一郎さんを出したいといろ〳〵、氣を騷んでも籠の鳥なり、女の身で智恵も分別も出ず、泣てばかり居るが、ホントに此世に神さまも佛さまもないものでせうか、留太「アハ、、、、此世に神や佛があつて堪るものか、自分の心の正直が神さんだ、何もクヨ〳〵する事はない、又た一郎さんは辯護士はいらない、自身で辯解して見せると言つて在つしやつたが、眞逆の時の要意と思つたから、伊谷さんの心易い代言で、松本富夫と言ふお方にも研究して置いた、千代「オヤ辯護士で松本さんと言ふお方は、妾も平常御贔負になつて居ります

留太「爾ふであつたか」ト、兄妹は中睦間じく物語りまして、憂の中にも笑ひが洩れることもありました、留太「ジヤ乃公はモウ歸るから、身体を大事にするが好い、千代「ハイ有難ふ……、留太「オ、忘れて居つた、お前に之れを……、千代「オヤ兄さん之れを如何するのです、留太「手前も小遣が不自由たろふし、又た三軒家の家へも味いものでも買つて往つてあげな、千代「爾ふですか心配させて濟みませんが、頂いて置きます、留太「頂く〳〵も憂もあるものか、兄のものは妹のものだ、オット妹のものは兄の自由だと言ふて、手前にコンナに苦勞させたのだナ、千代「兄さんソンナ事言つたら、妾が辛ひヨ、留太「アハ、、、、辛ひはモウ暫らくだ」ト、留太郎は歸り往きます、偖て其翌る日大阪の金城の東邊に岸の家と云ふ料理屋が御座います、夫れへ相乘車にて南地の帳場の印旗を立て、勢力能く曳き込みました紳士と藝妓、紳士と言ふは眞下に八字の髯を貯へて居りますが、之れぞ華族の二郎が容貌を變せん爲に、付髯をなして居るんで御座います、藝妓と言ふは即ち西川廊の千代吉であります、千代吉がまだ吉原の金瓶樓にて花魁矢

車でありました時に、華族の二郎は生首お麿、即ち仝じ金瓶樣に居つた時分は、由緣花魁と言つて居りましたが、由緣の情夫として度々逢つては居るものゝ、其時分の二郎が風俗は道樂者であつたが、今日は紳士の立派なる風体にて、加之鼻下にゆたかなる八字髯を貯へて居りますから、何處かで見たことのある御方位は、千代吉も胸に感じとは居りましたろが、別段怪しとも思はぬに交際つて居りました、大分價紳士の二郎には、酒氣が廻つて來たと見へて、二郎「千代吉さんの美しいお顏を拜しながら、新鮮なる空氣を呼吸しながら、斯ふ旨ひ肴で酒を呑んだら、十年も生命が延々したようだ、千代「オヤ旦那のお口は女殺しですネ！、妾等の如き初心な者は、直にコロリとなるが分りませんから、旦那お氣を御附け遊ばせヨ、二郎「遊ばせ言葉とは固く出たな、僕なんぞは斯ふ見へても、思ひの外技倆なしサ、烏渡でもお前の樣な美い女に甘い言葉の一つでも掛られると、直ぐデレリとなるから困る、千代「オホ、、、、、、余りデレリとなる筋の人相とやありません、妾何かは旦那の樣なお方にデレリとなつて、お其ひ申したいんですヨ、二郎「旨くお世辭を振り蒔くネ……、千代「オヤ旦那お惚ちになつて何方へお出です、二郎「烏渡小用に……、千代「どやお供しませう、二郎「ナーニ介意ないワサ」、華族の二郎は小用をしまして、ブラ〳〵廣い庭先を歩行いております、千代吉は駒下駄がありませんから客勝手で下駄を借んと廊下傳ひに來ますと、東一面に見晴たる座敷の障子をガラリと引き明けて、靜に酒を飲んで居る一組の客があります、其前を少し會釋して通り過んとしますと、「アヽちよいと〳〵、千代吉さん……」と呼れて、千代「オヤ御免なさいまし、瓢兵術さんじやありませんか、久しくお過ひ申しませんナ、今此處にお在とは知らなかつたものですから、失禮を……、

瓢兵「アヽ、余り小さいから眼に通入なかつたンでせう、併しお客さんとでせうが、久し振ですマア一ツお映りヨ、千代「ハイ如何も有難ふ……」ト、其處は愛嬌商賣ですから烏渡座にうきまして、瓢兵術の上座に居ります、年齡五十位の客人に會釋を施し、受けた盃を呑み干し烏渡洗ふて、千代「へイ……旦那戴きますんですが、御免を……、旦那

ヤア私にか……オイ近藤サン此お妓は……」、瓢兵衛は酌をしながら瓢兵「此妓は西川の千代吉さんです、南地切ッての尤物で温和しい妓と言ったら、即ち此妓でございます、千代「オヤ丹波の山奥から生捕った鬼子の口上の様でありますな、併し旦那……、以後は少度御ヒイキに……、旦那「イヤ私なんかはナカ〳〵愛顧にと言ふ樣な事は出來ぬが是れを御縁に御近付になりませう、千代「何卒お願ひ申します、瓢兵衛サン……お前さんから宜しくネー、瓢兵「願つて置いてあげるヨ、千代「瓢兵衛さんチョイト、お手間を取りませんが、お前さんにお頼みがありますから、瓢兵「エー私しに頼み……ハテナ、旦那「何も不思議がる事はないじやないか、後で何か驕れヨ、瓢兵「違ひなしだ、千代吉サンに鳥渡言れちや、大分女運が向て來たか知らん、千代「オホ、、、、阿呆らしい、私し等が何を思つても及ばぬ鯉の瀧登り、瓢兵衛さんには鶴松さんが付いて在つしやりますからネー、瓢兵「ソンナ事を此處で素破拔くとは色氣なしじやないか、千代「夫れも妾が色の叶はぬ意趣返しですヨ、旦那「如何も恐れ入つたネー、日本色男の關山は、近藤に止めを

さすが、瓢兵「そねめ〳〵、色男には誰れがなるッ、ア、人目程なくて幸ひものでげすせ、旦那チョット御免を……、旦那「ア、往つておいでヨ千代「旦那暫らくお借り申しますから、旦那「ハ、何卒その肥太たを、少し痩させておくれヨ、然し腰のたゝないやうにしてくれては、歸り道に此方が困るから、千代「オホ、、、、そりや請合て置きますから」ト二人は起つて次の室へ往きました、

第二十二席

千代吉は瓢兵衛を別室へ連れて來て、自分は前に手を支へて、千代「瓢兵衛さん、一遍貴郎にお目にかゝつてお禮申したいと思つて居ましたが、お聞申せば泥足を洗つて土地にお在でないものですから、ッイ思ひながらも今日まで延引して居りましたが、瓢兵「イヤお言葉中だが、私も御陰にて今の旦那のお世話になり、浮氣家業の足を洗つて瓢兵衛改め近藤新兵衛と、眞面目に會社勤めをして居る次第、併しお前さんに御禮を受けるやうな事をした覺はないが、千代「成程……天

窓からお禮申さねばならぬではお分りになりませんが、貴郎赤手拭で三軒家の神邊お菊が、惡徒にかゝつて難義しておつたを、お助け下さつた事がございませう、新兵「ハア〳〵有ります、覺へが……、千代「そのお菊の妾は義理ある姉で御座います、新兵「お前さんがアノ娘子の姉さんですか、コリヤ妙でげすナ、千代「妹がお世話になつた事は、其揚句に聞まして、南地の瓢兵衛さんなら妾もお座敷で御近付なればお目にかゝつたらお禮を申して置きませうと請合て置きましたが、其後お座敷で少度も御目にかゝらないものですから、人に聞たら土地にはモウお在がないとの事で、ツイ〳〵延引いたして居りました、新兵「私も丁度其明る日に瓢兵衛の足を洗つて、近藤新兵衛と言ふ眞面目な人間になつたんですが、其禮を受るは私ではない、私はホンの名前を貸したばかり、その本像樣は今の旦那だヨ、千代「アラ左樣ですか、新兵「マアそんなに彼の時妹さんが助られたが嬉しいなら、モー一遍旦那にお目にかゝつてお禮申すが宜いじやないか、千代「それじやア新ふ致しませう、新兵「併しお前のお客さんは……、千代「今鳥渡聞いて、見

たら、大變酔つて寐て居るやうですから、失敗ては大事ありませんナ、千代「時と場合ですヨ」ト、二人は連れ立て元の座敷へ戻りますと、旦那と差向ひになつてる男が御座います、此方の足音に振り向き千代吉と顔見合せ、男「オヤ妹じやないか、千代「アラ……兄さん……、貴郎此旦那を……、留太「コレは平常から吶しをする、伊谷の旦那だ、千代「オヤ存せぬ事として前刻から御挨拶をも申し上げ失禮を致して居りました、旦那「知らぬ事とてお互ひだが、岩崎お前に妹さんのある事はチヨツトも耳にしなかつたが、留太「ヘイ今日まで御吶しした事はありませんが、實に此妹に就て留太郎には讀悔吶しがありますんですが、夫れは長い事ですから、後刻ゆつくりと申し上ませうが、お千代お前は又如何して此お座敷に……、新兵「イヤ夫れは近藤新兵衛が物語らんと座を構へ、留太「近藤サン昔の辯が時折出ますねへ、新兵「爾ふサ、雀百までのたとへだ」ト、夫より千代吉が此座敷に居る事を嘶し、新兵「偖て岩崎さんの妹御で千代吉さんがあつたとはナカ〳〵小說にでもありそうな妙な吶でげせう、然るにモウ一つ妙

な咄があります、夫れは赤手拭稲荷の幽靈一件に、此千代吉サンが關係して居るんです、旦那「ナーニ千代吉サンが、アノ一件に關係があるとは又妙だネー、新兵「實唯今僕を此千代吉サンが、島流來いを極めたから、鳥流來いには油斷をすな、定めて毒喰ふ虫も好々にて、口說の濕場ありと思ひきや、斯々云々の次第ゆへ、又此座敷へ戻り來りましたる所、今の名乘合と來たのです、旦那「いよ〳〵コリヤ妙だ……、アノ幽靈一件などは歌舞伎でしたら揭栄と言わせる所だせ、千代「ソンナラ旦那にもアノ塲の幽靈を御覽になつたんですか、妹のお菊さんなどは、今にアノ咄をしては怖つて居ますから、旦那「アハ、、、、、妹さんは、アレを誠實のお怪と思はれたのだ、今日開けた世の中に、幽靈などがあつて堪るものか、アノ時の幽靈の本像は此瓢兵衛サ、千代「オヤ貴郎がアノ幽靈になつたんですか、留太「此奴面白い、四斗樽見たいな幽靈で、凄い事であつたろ、新兵「夫れでも菊五郎も既足と言ふ奴で大當りだつた、千代吉さん實アノ幽靈の性体は所ふ云ふ次第だ、偖て彼の晩この旦那即ち伊谷維之は、日の出迄揚合

社で祝賀會を開く事があつて、いろ〳〵餘興物の中に、和洋手品を加へやうと思つて、此新兵衛がまだ南地の太鼓持瓢兵衛であつた時分でしたから、商賣柄であるから瓢兵衛に相談すると、瓢兵「私の朋輩の手品師が、赤手拭の南手の新建に住んでる奴がありますから、一つ夫れを呼びに遣つて相談して見ませう、維之「イヤ呼び寄せるまでも、私も少しは散歩したし、此方から押寄たら如何だ、瓢兵「ソリヤ如何も恐れ入りますが、腹空しにブラ〳〵と出掛ますか、維之「善は急げ是れから往ふ」下、夫れより二人連れ立つて、彼の手品師の宅を訪れますと、手品師も大に悅び、早速酒肴を調へて出すと云ふ鹽梅にて其中に暴風雨になつたものですから、歸るに歸られずと云ふ仕義で腰を据へて、酒間いろ〳〵餘興物の打合せを致しておりました、其時瓢兵衛がフイト天井に釣てあるものを見て、瓢兵「ヒヤ……累がお岩か性体顯せ、維之「驚々しいナ、瓢兵「旦那如何です、此お怪を貸つて歸つて、一つ藝妓共を嚇して遣りませうか、維之「モウ止せ〳〵ソンナ詰らん事をして目でもまわされちや大變だ、瓢兵「イヤ面白ふがす、私に脇

鉄砲唯した奴が二人程あるんです、

す」ト、手品師より鬼火に遣ひます藥品を貰ひ受け、折柄暴風雨も上りましたから、偖て人力車と言っても幸町まで來なければ、無いと言ふ不自由な所でありますから、瓢兵衛は風呂敷に彼の幽靈の衣裝を包み、ブラリ〳〵と來かゝりましたは、赤手拭の手前の地藏堂の傍でございます、瓢兵「旦那アノ聲は何でせうな、維之「ブーン怪しいナ、コリヤ何でも惡者が娘に獸行を加へ、よとして居る樣だ、一ッ助けてやろか、瓢兵「旦那危なふございますせ、障らぬ神に祟なしと申します からナ、維之「イヤ私も以前は二本棒を腰にした身分だ……、義を見てせざるは勇なきなりだ、一ッ計略で驚し付けてやろ、瓢兵「旦那如何するんです、維之「マア可いから耳を貸しな、瓢兵「ヘイ至ってお粗末な耳ですが……成程、コリヤ妙策、維之「早く仕度をしな、私は鬼火を點けてやるから」ト、其處で瓢兵衛は白の衣裝を着け、お化の面を冠ってヒュドロ〳〵と何とも言ずに、地藏堂の後から、中風のおいで〳〵をしながら、スックと起ちました所を、維之は藥品に火をつけますと

パッと燃へ上る鬼火の光りに、此方を見たる惡者は、キャッと言ふなり早腰拔して逃て行く、娘もキャッ……ドスンと倒れて了つた、瓢兵「旦那惡者は逃ましたナ、維之「惡漢は逃げた樣だが、何やら娘がキャッと言ふて倒れたせ、瓢兵「爾うですか……」ト、雲間洩る寒月の光りに透し見て、維之「氣絕をして居るやうだ、オイ瓢兵衛水だ〳〵……、

瓢兵「ヘイ水と言ふて……ありませんナ、併し好い玉ですナ、維之「エ、夫れ所でないわい、其處等に水が無いか、オイ其處に地藏サンに供へた花筒があるだろ、夫れに水がないか、瓢兵「折節無いんです、エ、花筒し、維之「ソリヤ何だ、腹立しと言ふ地口です、維之「地口所しやないしやないか、氣絕して居る娘を抱へて居って、此儘此娘が息氣を引き取つたら、手前が何だせ下手人だ、殺人罪に問れるゾ、瓢兵「ソリヤ大變ですナ、旦那が發起人ですから……、ヤア有ました、此石の窪に水が溜ってあります、雨水ですから至極清々としたものです、

維之「ソリヤ宜い早く娘に呑して遣れ、瓢兵「ヘイ……如何しても口を開ません、維之「ソリヤ不可ない、お前が口へふくんで居って、コンナ時